ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅵ － 1

1979

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅵ － 1

1979

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のほ場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生い立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和５４年３月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長　沢　悠光

例　言

1．本報告書は、昭和53年度国庫補助事業対象となった、県営、団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖北・湖西地区の調査成果を収載したものである。

2．調査にあたっては、地元各町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。

3．現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘、兼康保明をそれぞれ担当者とし、特に上古賀遺跡については安曇川町教育委員会技師中江彰氏、針江遺跡については新旭町教育委員会主事水口（現姓図司）高志氏にお願いした。

4．調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとにしるすとともに、報告の文責は文末に明記した。記して感謝の意を表す次第である。

目　次

はじめに
例　言
第１章　伊香郡高月町松尾寺遺跡
１．はじめに …… 3
２．歴史的地理的環境 …… 3
１）　位置と地理的環境
２）　歴史的環境
３．調査の経過 …… 6
４．調査の結果 …… 9
１）　Ａトレンチ
２）　Ｂトレンチ
３）　Ｃトレンチ
４）　Ｄトレンチ
５）　Ｆトレンチ
６）　Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｉトレンチ
５．遺　物 …… 11
６．遺跡の性格 …… 13
第２章　東浅井郡浅井町祇園寺・荘厳寺遺跡
１．はじめに …… 17
２．位置と環境 …… 17
１）　位置と地理的環境
２）　歴史的環境
３．調査経過及び結果 …… 20
１）　トレンチの状況
２）　第１住居跡
３）　第２住居跡
４）　遺　物
４．考　察 …… 49
５．おわりに …… 50
第３章　高島郡安曇川町上古賀遺跡
１．はじめに …… 55
２．位置と環境 …… 55
３．調査経過 …… 57

(1) A地区
(2) B地区
(3) C地区
(4) D地区
4．遺　構……59
(1) 古　墳
(2) 中世古墓
(3) 竪穴住居跡
(4) 掘立柱建物
5．遺　物……70
(1) 弥生土器
(2) 須恵器
(3) 土師器
(4) 瓦・土製品
6．結　び……76
第4章　高島郡新旭町針江遺跡
1．はじめに……81
2．位置と環境……81
3．調査の経過……81
4．調査の結果……84
Ⅰ．土　層
Ⅱ．遺　跡
5．出土遺物……85
Ⅰ．土　器
Ⅱ．木　器
6．小　結……88

図 版 目 次

高月町松尾寺遺跡

1 （上） トレンチ配置状況遠景
（下） トレンチ配置状況近景
2 （上） Cトレンチ
（下） Aトレンチ
3 （上） Bトレンチ
（下） Bトレンチ断面土層
4 （上） Eトレンチ石組
（下） Gトレンチ石組
5 （上） Hトレンチ石組
（下） Iトレンチ石組
6 （上） Jトレンチ石組
（下） 陶器鳥出土状態
7 木器・砥石
8 木 器

浅井町祇園寺・荘厳寺遺跡

9 （上） 遺跡遠景
（下） 遺跡遠景
10 （上） 第14トレンチ
（下） 第19トレンチ
11 （上） 第18トレンチ
（下） 第3トレンチ
12 （上） 第1・第2トレンチ
（下） 溝 跡
13 （上） 調査風景
（下） 第1住居跡・第2住居跡
14 （上） 第1住居跡全景
（下） 第1住居跡部分
15 （上） 第1住居跡部分
（下） 第1住居跡カマド
16 （上） 第2住居跡全景
（下） 第2住居跡全景
17 （上） 第2住居跡部分

（下）　第２住居跡カマド

18　出土遺物（須恵器）

19　出土遺物（須恵器）

20　出土遺物（須恵器・土師器）

21　出土遺物（土師器）

22　出土遺物（鉄器・石器）

安量川町上古賀遺跡

23　（上）　Ａ・Ｂ両地区調査地

（下）　Ｃ地区調査地

24　（上）　下井１号墳

（上）　下井５号墳

25　（上）　下井２号墳

（下）　下井２号墳副葬品出土状況

26　（上）　下井３号墳

（下）　下井３号墳副葬品出土状況

27　（上）　下井６号墳

（下）　下井７号墳

28　（上）　Ｂ17トレンチ

（下）　１号竪穴住居跡

29　（上）　土坑４と４号竪穴住居跡

（下）　古墓３

30　（上）　６号竪穴住居跡

（下）　Ｂ２・６トレンチ

31　（上）　掘立柱建物１

（下）　掘立柱建物２

32　出土遺物（Ａ７・８トレンチ，５号住居跡，下井４号墳）

33　出土遺物（下井２号墳）

34　出土遺物（下井３号墳）

35　出土遺物（下井１号墳，４号墳）

36　出土遺物（下井１号墳，１号住居跡，Ａ７・８トレンチ，Ａ44試掘坑）

新旭町針江遺跡

37　（上）　発掘前風景

（下）　発掘後風景

38　（上）　掘立柱建物（北西より）

（下）　掘立柱建物（南東より）

表 目 次

浅井町祇園寺・荘厳寺遺跡

表1　出土遺物観察表……35

表2　周辺遺跡出土遺物観察表……43

安曇川町上古賀遺跡

表1　土器実測図一覧表……75

挿 図 目 次

高月町松尾寺遺跡

1 松尾寺遺跡位置図及び附近主要遺跡分布図…… 4
2 宮山３号墳横穴式石室実測図…… 6
3 宮山３号墳出土遺物実測図…… 7
4 松尾寺遺跡附近地形図及びトレンチ配置図…… 8
5 松尾寺遺跡Ｂトレンチ断面土層図…… 9
6 松尾寺遺跡古道石組遺構実測図…… 10
7 松尾寺遺跡出土遺物実測図…… 12

浅井町祇園寺・荘厳寺遺跡

1 祇園寺・荘厳寺遺跡と近接遺跡位置図…… 18
2 トレンチ配置図…… 21
3 第３トレンチ附近地形実測図…… 22
4 第17・19トレンチ附近地形実測図…… 23
5 遺構実測図…… 24
6 第１住居跡実測図…… 25
7 第２住居跡実測図…… 27
8 出土遺物実測図（１）…… 29
9 出土遺物実測図（２）…… 30
10 周辺遺跡出土遺物実測図（１）…… 33
11 周辺遺跡出土遺物実測図（２）…… 34

安養川町上古賀遺跡

1 遺跡位置図…… 56
2 トレンチ配置図…… 58
3 B17・19トレンチ及びB18トレンチ平面図…… 60
4 下井１号墳横穴式石室実測図…… 61
5 下井２号墳横穴式石室実測図…… 62
6 B36・38トレンチ平面図…… 63
7 下井３号墳横穴式石室実測図…… 64
8 下井５号墳横穴式石室実測図…… 65
9 下井６号墳竪穴式小石室実測図…… 66
10 下井６号墳竪穴式小石室実測図…… 67
11 B17トレンチ平面図…… 68
12 B13トレンチ平面図…… 69

13　B15トレンチ平面図…… 69
14　B10トレンチ平面図…… 69
15　B２・６トレンチ平面図…… 70
16　古墳出土土器実測図（その１）…… 71
17　古墳出土土器実測図（その２）…… 72
18　竪穴住居跡出土土器実測図…… 73

新旭町針江遺跡

1　遺跡位置図……82
2　トレンチ配置図……83
3　トレンチ土層断面図……84
4　Ａトレンチ平面図……85
5　針江遺跡出土土器実測図……86
6　田下駄足板実測図……87
7　田下駄枠実測図…… 88
8　掘立柱建物の比較…… 89

第１章　伊香郡高月町松尾寺遺跡

1．はじめに

松尾寺遺跡は、「東大門」、「西大門」と呼称される地点があり、その附近で、かって、屋瓦の出土したことを伝える遺跡である。しかるに、昭和53年度事業として、当該地及びその附近一帯で、ほ場整備工事の実施が計画されるところとなった。当遺跡については、寺域や堂塔伽藍はもちろん、遺跡の年代、性格等について全く不明であり、遺構や遺物の包含層等の存否についてすら明確にされていないのが現状である。従って、事前に、これらについて明らかにしておく必要があり、工事の遺跡に対する影響の程度を確認しておく必要が生じた。本書は、昭和53年度に国庫補助を受けて実施した松尾寺遺跡の発掘調査報告書である。

調査は、滋賀県の委託により、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。調査の参加者は以下の通りである。

調査員・林　純（京都産業大学卒業，奈良大学学部生）

補助員・上羽基之、宮崎雅美、山岡一郎、石本好典、田中聡一、井塚哲夫、藤井益夫、多賀健次、岸本好弘、馬場重信、飯野清志、（以上京都産業大学考古学研究会々員）

また、現地発掘調査、整理作業については滋賀県教育委員会文化財保護課　技師　田中勝弘が指導に当った。

本書の作成については、本文を田中勝弘が執筆し、挿図、図版の作成及び写真撮影等については、上記参加者の協同作業による。

なお、地元高月町教育委員会、松尾区の方々及び高月町ほ場整備事業所の諸氏には、現地調査に当って、多大な御援助をいただいた。ここに記して謝意を表します。

2．歴史的地理的環境（第1図）

1）　位置と地理的環境

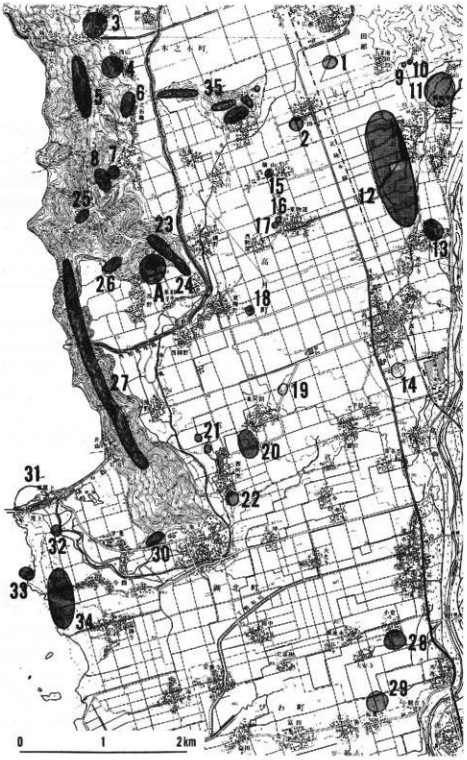
松尾寺遺跡は、行政上伊香郡高月町松尾地先にある。湖北平野の北部は、東を高時川、西を賤が岳から派生し琵琶湖と一線を画す地果状の山岳によって囲まれている。この平野部の西端には、地果状山丘の裾部に沿って南流する余呉川があり、山丘南端で西方に曲って琵琶湖に開口している。山丘は、その中程で馬背状に非常に細くなり、余呉川もこれに沿って、中程で一度西方に流れをかえ、再び、馬背状の山丘部に沿って南流している。松尾寺遺跡は、この余呉川が西方に流れをかえる部分の北岸にあり、幅広い北半山丘部の南端裾部に位置する。

松尾の集落は北側はこの地果状山丘がせまり、東及び西側は、この山丘から舌状に小さく張り出した丘陵によってはさまれた状態になっている。遺跡は、この現集落をも含み、その南側に広がる水田地帯にも及ぶものと想定される。従って、遺跡の立地は、山丘裾部から平地に及ぶとすることができる。

平地部は、標高およそ98m程で、琵琶湖水面と約13m程の比高差があり、しかも、西方を地果状山丘によって琵琶湖と界されている。しかし、附近は極めて水はけの悪い水田地帯であり、地盤は青灰色の細砂質土及至粘土で構成され、従って湿潤な立地条件となっている。

2）　歴史的環境

余呉川沿岸の歴史的環境については、現在のところ、余呉川開口部の湖北町尾上遺跡における縄文時代遺跡が最古のものである。ここでは縄文時代から奈良時代にかけての遺物の散布が知られており、また湖上交通にお



第1図　松尾寺遺跡位置図及び附近主要遺跡分布図

1	法光寺遺跡	2	石作遺跡	3	大越常・千平遺跡	4	西山古墳群
5	西山山頂古墳群	6	小山古墳群	7	中居谷遺跡	8	赤尾古墳群
9	瓢箪塚古墳	10	饅頭塚古墳	11	大海道遺跡	12	井口遺跡
13	柏原遺跡	14	高月遺跡	15	兵主神社古墳	16	大将軍古墳
17	生塚古墳	18	姫塚古墳	19	父塚古墳	20	円通寺遺跡
21	大将軍塚・京田塚古墳	22	里の内遺跡	23	寺山・宮山古墳群	24	山畑古墳群
25	西野古墳	26	西野宮山古墳群	27	古保利古墳群	28	小倉遺跡
29	大安寺遺跡	30	若宮山・ゴンベ穴古墳	31	尾上浜遺跡	32	尾上遺跡
33	今西湖底遺跡	34	今西遺跡	35	涌出山古墳群	A	松尾寺遺跡

ける港として、古来より要所とされてきた所である。

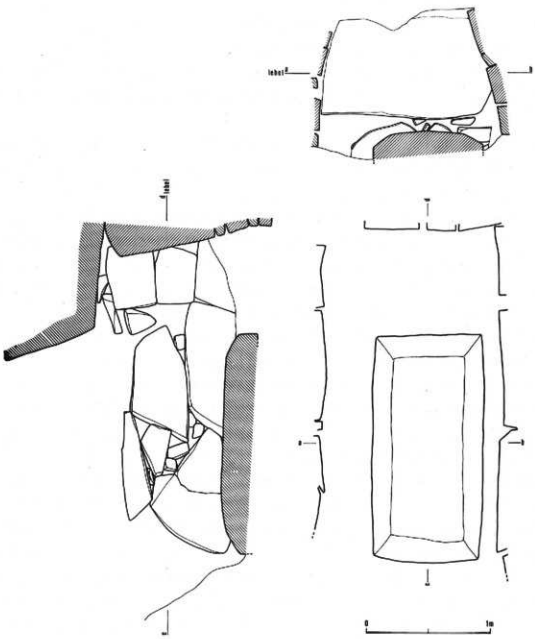
弥生時代遺跡については、余呉川沿岸域で明確なものは知られていないが、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺跡が湖北町今西遺跡や高月町円通寺遺跡等において知られるようになった。両遺跡とも、いわゆる古式土師器を中心とした遺跡で、今西遺跡からは、黒色土器が出土していて、弥生時代終末から平安時代に及ぶ複合遺跡であることが判明している。円通寺遺跡では、畿内庄内並行期と考えられる土器群を出土した溝状遺構が検出されている。

古墳時代では、余呉川西岸、山丘裾部に立地して、木ノ本町大越堂・千平・中居谷遺跡、高月町重則遺跡等須恵器、土師器等の散布が確認された地点が若干その数を増すが、詳細は明らかでない。また、最近、高月町熊野地先で、古式の須恵器が出土したことが伝えられた。

こうした集落跡に対し、古墳については、余呉川西岸の地累状山丘を中心に、東岸平野部においても、非常に多数のものが分布し、湖北地方一帯と比較しても極めて特異な存在となっている。地累状山丘の南端には、湖北地方最古と考えられる若宮山古墳がある。全長約50m程の前方後円墳で、その墳形、立地から古墳時代前期にさかのぼる可能性の強いものである。また、地累状山丘の馬背状になる南半分尾根上には、１２０数基から構成される古保利古墳群がある。この古墳群は、前方後円（方）墳に何基かの円墳が付随し、また、こうしたグループが少なくとも４～６個所において確認でき、明らかに首長系列の古墳群といえるものである。測量調査が実施された75号墳やその他前方後円墳の墳形から考えて、およそ５世紀代のものと考えられている。余呉川東岸平野部には、姫塚古墳、甕塚古墳、父塚古墳、兵主神社古墳等大型の前方後円墳や円墳があり、およそ５世紀代のもので、当地の地名考証等をも含めて、大和朝廷の日本海地方進出に伴う物部氏系氏族の墳墓と考える説もある。余呉川開口部附近は、日本海地方へ通ずるための湖上交通上の要所とされ、門戸となる地点であり、古保利古墳群は、物部氏系氏族の進出以前における湖上交通権を掌握していた在地豪族の墳墓である可能性が強い。

古墳時代後期には、前述の平野部に築造される大型古墳に対して、横穴式石室等をもつ群集墳が、地累状山丘の中腹や尾根上に墓地を求めている。古保利古墳群の北端附近で横穴式石室を持つ古墳が数基確認されているのをはじめ、山丘が馬背状になるまでの北半部において、多数の群集墳が見られる。北半部山丘の南端では、丘陵は南東方向に突出した状態になっているが、この部分に４支群からなる宮山古墳群がある。松尾支群は東端にあり、２基の円墳と３基の方墳からなる。詳細は明らかでないが、外形観察から方墳と思われるものがあるといわれ、あるいは古墳時代中期にさかのぼり得る可能性がある。宮山支群は、松尾支群より尾根筋をのぼり、松尾の裏山あたりで、高所側４基、低所側４基の２グループからなる。高所側のものは、いずれも横穴式石室を持つが、低所側のものは詳細は明らかでない。高所側の４基のうち、３号墳とされるものには、横穴式石室に家形石棺を埋置していることが知られている。以前に、この石棺内より出土したと伝える遺物が、松尾区の覚念寺に保管されている（第２図・第３図）。石棺の形式や出土遺物から６世紀後半のものと考えられ、古墳群の一端の内容を知ることができる。磯野支群は、宮山支群の北側にあって、北方に小さく舌状に張り出した尾根上に５基の円墳が分布する。西野支群は、丘陵南側にあって、群中最西端にあり、３基の円墳からなる。ともに横穴式石室を持つらしいが、詳細は明らかでない。宮山古墳群以北においても、さらに、木ノ本町赤尾古墳群、小山古墳群、西山古墳群等多くは横穴式石室を持つ群集墳が存在する。

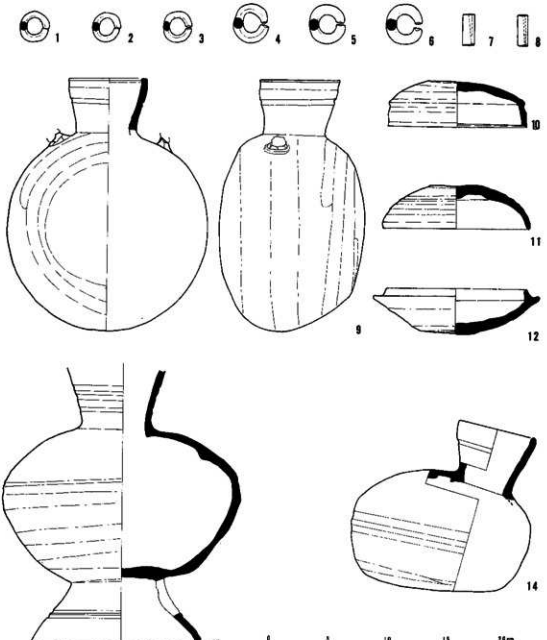
これら群集墳の山丘側への分布は、余呉川沿岸が湖上交通を利用して、日本海地方へ至るための重要なルートであったことをうかがわせるに十分な状況であるといえよう。



第２図　宮山３号墳横穴式石室実測図

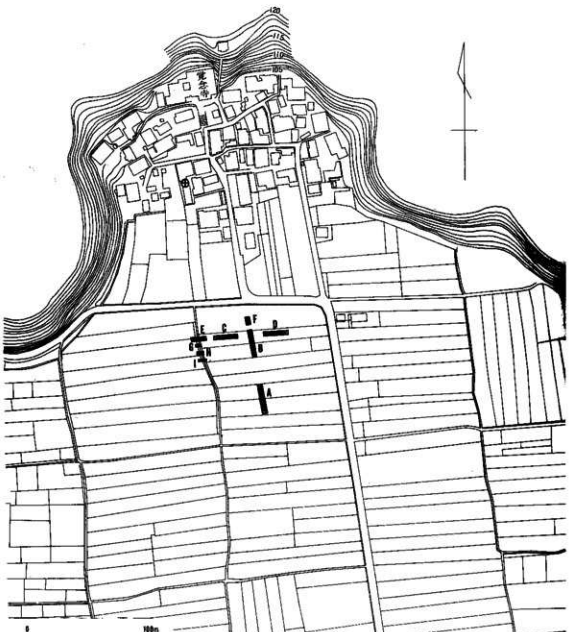
奈良時代以降では、余呉川西岸においては、松尾寺遺跡で瓦を出土したことを伝える以外に顕著な遺跡は知られていない。しかし、東岸では、今西遺跡や円通寺遺跡で土器片の散布が確認でき、円通寺遺跡の北方高月町大将軍・京田塚遺跡附近においても土器片が採集されている。また、余呉川沿岸だけで、数カ所の延喜式内社の存在が確認されており、この流域が発展していた様子をしのばせる。

３．調査の経過（第４図）



第3図　宮山3号墳出土遺物実測図

調査は、松尾集落の最奥部にある覚念寺の参道を兼ねた集落の中央部を南北に通る道と集落の南側を東西に走る道との交点附近が西大門と呼称されていること、この附近より以前に瓦を出土したことが伝えられていること、地形上、想定される遺跡範囲の東西の中軸線に当ること等により、集落内の南北道を遺跡のセンターとして、この道の延長上に３カ所（第４図－Ａ・Ｂ・Ｆトレンチ）とこれに直交する方向に３カ所（第４図－Ｅ・Ｃ・Ｄトレンチ）のトレンチを設定し、遺構の追求を計った。このトレンチ調査の結果により、随時トレンチを拡張することとしたが、結果的にはＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆトレンチでは、青灰色粘土の厚い堆積があり、部分的に、近世に埋ったと考えられる浅い沼池状の凹みを検出したのにとどまった。Ｅトレンチは、現在の畔道を横断する状態で設定したものであるが、同トレンチでは、畔道基底部で石組を検出した。石組は畔道基底部で検出されたので、畔道を



第４図　松尾寺遺跡附近地形図及びトレンチ配置図
（中は瓦の出土地点）

つくった時の施設である可能性が考えられたので、附近の古老等に対して聞き込みをしたが、こうした造作については記憶にないとのことであり、あるいは、松尾寺遺跡に関連するものであるとも考えられ、Eトレンチ以南に、G・H・Iの3カ所のトレンチを新たに設定し、石組の延長状況を追求することとした。

また、現地発掘調査とともに、遺跡及びその周辺部の遺物分布状況や出土遺物の有無等を確認するために、踏査、聞込み調査を再度実施し、遺跡の範囲や性格を追求することにつとめた。

4．調査の結果（第5図・第6図）

1〕 Aトレンチ

耕作土及び床土は約40cm程の厚味がある。以下は青灰色の粘土層が厚く堆積している。粘土層上面において遺構の検出はできず、また、粘土層中にも遺物の包含は認められなかった。

2〕 Bトレンチ（第5図）

ここでは、耕作土及び床土の下方に、青灰色粘土層と、これと同質であるが色調がやや黒味をおびた濁青灰色粘土層が約20cmの厚さを持つ。この下層は青灰色粘土層である。濁青灰色粘土層は南寄り程薄く、従って、青灰色粘土層上面は南寄り程レベルが高かく、池状の落ち込みとなっている。濁青灰色粘土層は落ち込み内の堆積土で、自然木片、加工木片、陶器、須恵器等の小片を若干包含していた。

3〕 Cトレンチ

トレンチ内の東側2～3mの間で、Bトレンチで見られた濁青灰色の粘土層の堆積があった。以西は耕作土及び床土直下は青灰色粘土層であり、従って、池状の落ち込みの西端となる。

4〕 Dトレンチ

トレンチ内の西側2～3mの間で、濁青灰色粘土層があり、以東はCトレンチ同様青灰色粘土層で、落ち込みの東端である。

5〕 Fトレンチ

ここでは、濁青灰色粘土の堆積は認められず、耕作土及び床土直下は青灰色粘土層となる。従って、池状落ち込みはBトレンチとFトレンチとの間で北端となることが知れた。

6〕 E・G・H・Iトレンチ（第6図）

E・G・H・Iトレンチは、現在の畔道上に設定したトレンチで、当初、Eトレンチで石組を検出し、その延長状況を見るために、G・H・Iトレンチを設定したところである。

石組は、現在の畔道の下で、その西端に沿ってのびている。畔道の幅2m程あるが、これら近年に拡幅したところであり、当初、幅1m足らずの細いものであったと言う。従って、この畔に沿って石組がのびるところから、畔構築の際に、その基礎固めとして組まれた遺構

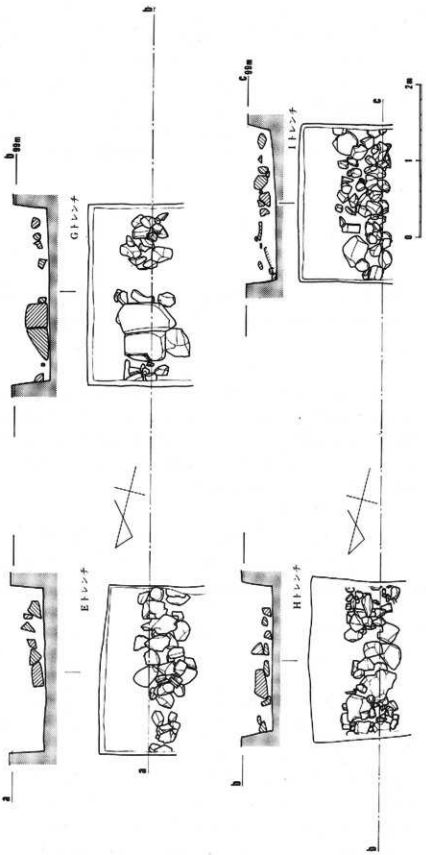
第5図
松尾寺遺跡Bトレンチ断面土層図

であると考えられる。

石組は、大小の割石、自然石を乱雑に積み重ねた状況にあり、特に、規則的に積み上げた状況を示す部分はない。およそ、80cm程の幅で、約30cm程の高さに積み上げている。検出した石材で最大規模のものは、70cm×40cm×30cm程のもので、大半は拳大から人頭大の割石及び自然石を利用している。

E・G・H・Iの各トレンチで、各々数本の杭を検出した。Eトレンチでは、その北端で、石組西側に4本、東側6本がほぼまとまって打込まれている。Gトレンチでは、石組より西側へ50cm程離れて、2本の杭が石組と並行に、20cm程の間をおいて打ち込まれている。Hトレンチでは、石組の西側に沿って、石組みに並行に5本の杭が検出された。Iトレンチでは、石組西側で、30cm程の間をおいて5本の木杭がジグザグに打ち込まれている。いずれも径10cm程の丸太杭である。

現在の畔道は、東側半分以上が近年に拡幅されている。石組は現畔道の西端に沿って、畔道のカーブに従



第6図　松尾寺遺跡古道石組遺構実測図

い組まれており、畔道の基礎固めのためのものと考えられる。木杭については、すべて旧畔道内に納まるもので、Hトレンチでの杭と石組の位置関係、杭の配列等から見ると、木杭は、石組の崩落をふせぐために、横板を通したのではないかと考えられる。すべての杭がこのように解釈されるかどうか疑問であるが、旧畔道に伴うものであることは、畔道の拡幅部分からは杭を検出できなくなったことからも、ほぼ確実であろう。

石組の構築時期については、地元古老に聞込みをしても記憶にないとのことであり、この畔道は、元来、その位置にあったとのことであり、少なくとも明治時代にはくだらないであろう。ただ、石組に堆積する土層より、染付けの陶器椀が1点のみ出土している。陶器は江戸時代頃のものと思われ、石組構築の下限をこのころにおくことができる。

5．遺　物（第7図）

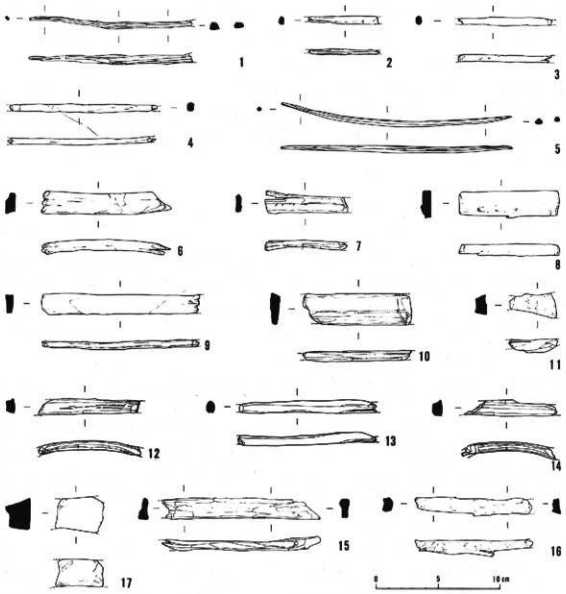
遺物は、Bトレンチの池状の落ち込み内の堆積土中から出土したものが大半で、自然木、加工木、陶器、須恵器等の小片である。自然木は大半が小枝片で、樹幹を思わせるものはない。陶器は染付けが細片で、量的には、自然木に比べて極めて少ない。須恵器も細片で、少量出土している。時代は不明であるが、古墳時代まできかのぼらないように思われる。加工木は、全容の知れるものは数点で、他は加工痕の見られる程度のものである。大型のものはない。図示できる範囲のものを以下で説明しておく。

1～5は箸状の木製品である。1は一端を欠失しており、遺存長は13.2cmを計る。厚さは0.5～0.7cmで、横断面は不整形ながら四角形となっている。粗雑に削って面を取り、端部を細く削り出している。2は両端を欠いている。遺存長は5.7cm で、厚さは0.4～0.7cm である。やはり、粗雑な削痕が認められ、横断面は不整形な五角形となっている。3も両端を欠失している。7.5cm の長さを残し、厚さは0.5～0.7 cm を計る。4も両端を欠失し、長さ12cm を残す。厚さ0.5～0.6cmで、削痕を認めることができる。5は完形品である。全長は18.8cm ある。中央部が最も太く、両端に行くに従い、序々に細くなり、端部を細く削っている。厚さは0.5～0.6cm を計る。やはり、全面に粗雑な削痕が見られ、横断面に丸味を持たせる工夫がなされている。これらの類品については、広島県草戸千軒町遺跡のSG350池とされるところから、その西側で3,000本以上が集中的に出土している。同遺跡出土のものは、長さ19～23cm 、厚さ0.5～0.8cm で、松尾寺遺跡のものとほぼ同規模である。両端を細く削り出し、全面を削って面取りしている点も同様である。SG350池からは、多数の墨書木札や人形等の木製品の他に、木材片、削り屑等が出土しており、附近に木工関係の仕事場があったと想定されている。時期については鎌倉時代末頃とされている。草戸千軒町遺跡においても、一応箸状木製品とされ、他の用途についてもその可能性が残されるといわれているが、SG350池の性格やその周辺遺構の性格が明らかになった段階で、こうした木製品の用途も明らかになってくるものと思う。

6は長さ10.4cm 、幅1.7cm 、厚さ0.7cm の横断面長方形を程する板状のもので、各面に削痕が認められる。一端は焼けコゲているが、他端は、片側を斜に削り落している。

7は一端を欠失しているが、他端は斜めに削り落されている。長さは遺存している部分で6.3cm 、幅1.3cm 厚さ0.4cm を計る。

8は長さ8.1cm、幅1.6cm、厚さ 0.8cmを計り、横断面が長方形を呈する角棒状のもの。両端は長辺に対して直交する形で削り落している。



第７図　松尾寺遺跡出土遺物実測図

９は一端を欠失し、長さ12.2ｃｍ を残す。幅は１.５ｃｍ ～１.７ｃｍ で、欠失している側がやや狭くなっている。厚さは０. ５～０.６ｃｍ で、欠失している側が逆に厚くなっている。端部は丸昧を持たせて削り落している。

10は両端を欠失し、長さ8.8cmを残す。幅１.４ｃｍ 、厚さ０.３～０.６ｃｍ で、横断面は長三角形状を呈している。

11は、一端をノミ刃状に削り落したもので、幅１.９ｃｍ を残す。

12～14は長さ７.４ｃｍ～11.2ｃｍ、幅１.２ｃｍ 、厚さ０.７ｃｍ 程の棒状品で、いずれも両端を欠いている。

15は６と同様、一端の片側を斜めに削り落したもの。長さは６ｃｍ 、厚さ０.７ｃｍ で、他端は欠失している。

16は、一端をやや斜めに削り落している。他は焼けコゲていて、長さ９.２ｃｍ を残す。幅１.１ｃｍ 、厚さ０.７ｃｍ を計る。

以上の6～16の棒状あるいは板状の木製品については、6・15・16等が一端を斜めに切り落し、また、8は両端を直線的に、9は一端を丸味を持せて削り落すなどの加工痕が認められるが、現段階ではその用途、性格等については明らかにし得ない。

17は砥石で、両端が欠失している。一面に使用痕があり、溝状の凹みがみられる。砂質の石材で、粒子が比較的細かく、仕上げに近い段階で用いられたものであろう。

以上の木製品・砥石は、先述のように、池状の落ち込み内の堆積土中より出土したものであるが、同堆積土中からは陶器片が伴出しており、これらは、江戸時代をさほどさかのぼる時期のものではないと考えられる。

6．遺跡の性格

今回の調査で検出し得た遺構は、池状の落ち込みと石組のみである。石組は、拡幅以前の畔道の下方で、そのカーブに応じて組まれており、また、幾本かの木杭は、これら石組みの崩落止めのためのものである可能性が強く、従って、畔道の基礎構築であると考えられる。池状の落込みは、石組の東方にあって、南北40m程、東西25m程の規模で、深さは20cm程の浅いものである。汀線の状況から自然の湿地と考えられる。両者の年代は、ともに江戸時代をさほどさかのぼらないものと考えられるが、石組を基礎固めとして畔道がつくられた時点で、この池状の落ち込みの耕地化が実施されたものと思われる。

このように、今回の調査では、当初予想された寺院跡に関連する遺構、遺物を検出することはできなかった。しかし、現在の集落内で、古瓦の出土していることを聞き込み、実見したが、裏面に縄目のタタキ痕の見られる明らかに奈良時代～平安時代の古瓦であり、附近に寺院跡の存在したことは確実であることが知れた。この瓦は、江戸時代よりの旧家の庭園（図4の㊥印）で、その一部を切り取って作業小屋を建てた時に出土したものである。瓦は多数出土したらしいが、現在するものは1点のみである。庭園は、江戸時代に造成した折の踏み石が遺存しており、少くなくとも江戸時代までさかのぼるが、この庭は周辺より一段高かく、また、周辺水田面からは1m近い段差を持っている。すでに、改変されてはいるが、寺院の堂宇の基壇であった可能性も十分考えられる。現在の住宅部分は、周辺の地理的条件が非常に水はけが悪く、湿潤であるため、現水田面より非常に高かく盛土して基壇をつくり、家屋を構築している。従って、寺院の堂宇も同様に基壇を高かくしていたものと考えられ、現在の住宅部分のいくつかは、堂宇の基壇を再利用している可能性がある。現在、宅地は、北方山裾の覚念寺から南方140m程までに及んでいるが、ここ最近までは100m程の範囲であったらしく、以南は、集落中央を走る道より以東が「東前田」、以西が「西前田」と小字名を冠するように、水田であったらしい。

以上のように、松尾寺遺跡は寺院跡である可能性が強く、その堂宇は、地理的条件により、山裾の北側に集中していた可能性が考えられる。それでは寺域についてはどうか。現在、集落の南方、覚念寺より180m程南方に東西に走る道があり、この道と⊥字形に交わり、集落の中央を通って、覚念寺に直行する道がある。また、その60m程東方に、南の重則の集落とを結ぶ道が東西道と⊣字形に交わり、集落の東端を通っている。これら3本の道は、最近まで、現在の幅の2分の1以下の細道であったらしいが、古来より存在する道であったらしい。東西道と南北の2本の道が交わる附近は、中央が「西大門」、東側が「東大門」と呼称されており、寺域はこの東西道までと考えることができる。中央の道と東西道の交わる附近は、周辺地形からして、想定される寺域のほぼ中央南端に近い、南大門の位置になるが、古くからの南北道は2本に限られていたようであり、一門を寺院の通例

に合わせてその中央に、もう一門を南方集落である重則と直線的に結ぶ東側の南北道の部分に設け、元来2門が存在したところから、東に対して、南大門に当る門を「西大門」と呼びならわしていたのではなかろうか。「西大門」を南大門とすると、寺域の東西幅は、「東大門」までの距離約60mの2倍、120m以上となり、東西両側に張り出した舌状台地の山裾までを含めると、約200m程になる。覚念寺から東西道までは約180mを計るから、ほぼ、方2町程の寺域が考えられる。

このように寺域を考えると、今回設定したトレンチは、寺域の南、外側に当る。池状の落込みは、「西大門」の正面に当るわけで、道が、寺院正面を通らず、東寄りを通るのは、この池状落ち込みが示す湿地が存在したためであろうか。

7．おわりに

以上のように、今回の調査で、寺院跡の存在していた可能性が非常に強いことが判明した。ただ、今回設定したトレンチで明らかなように、想定した寺域の南半分をも含めて、非常に泥湿な立地条件にあり、堂宇は山手の北半分に集中していたと思われ、伽藍配置もこのことに規制され、特異な有り方を示していたであろう。また、多くの堂宇は、現家屋と重複しているものと思われ、今後、家屋の改築等の機会にのみ、当遺跡の性格の解明の期待が持てるにすぎない。

（田中勝弘）

第２章　東浅井郡浅井町祇園寺・荘厳寺遺跡

1. はじめに

祇園寺、荘厳寺遺跡は、行政上東浅井郡浅井町大字大路に所在する。当初、字名に「祇園寺」、「荘厳寺」とあるところから、寺院跡の存在が推定されていたところであるが、現地を再確認した結果、字域をこえて遺物の散布を見た、遺物は須恵器、土師器等であり、集落跡の可能性も考えられたので、字域外に対しても調査範囲を広げる必要が生じた。結果的には、古墳時代後期の竪穴式住居跡2棟が検出されたが、地元及びぼ場整備関係機関との協議の結果、遺構部分は畑地として保存されることとなった。

本書は昭和53年度に国庫補助を受けて実施した発掘調査の記録である。

本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会において実施した。調査参加者は以下の通りである。

調査員・林　純（京都産業大学卒業、奈良大学学生）

補助員・上羽基之、宮崎雅美、吉元連成、小牧正明、田中正範、山岡一朗、田中聡一、石本好典、藤井益夫、多賀健次、井塚哲夫、馬場重信、岸本好弘（以上京都産業大学考古学研究会々員）

本書の作成については、本文を林　純が執筆し、挿図、図版の作成及び写真撮影等については、上記調査参加者の協同作業による。

なお、地元浅井町教育委員会、大路区の方々及びぼ場整備関係機関の諸氏には、現地調査に当って、多大な御援助をいただいた。ここに記して謝意を表します。

（田中勝弘）

2. 位置と環境

1）　位置と地理的環境　（第1図）

祇園寺・荘厳寺遺跡は、湖国屈指の規模を誇る湖北平野のほぼ中央に位置し、行政上は東浅井郡浅井町大路に所在している。また、古代律令体制下では、浅井郡益次郷にあたるといわれている。[1]

伊吹山系の一つである金糞岳に源を発する草野川は、始め南流し太尾山南麓で平野部に出て西南へその流れを変える。そして、姉川と合流し豊穣な湖北平野を形成しつつ琵琶湖に注ぐが、その過程で随所に自然堤防が見られる。特に、草野川と姉川の合流点付近ではその沖積作用も著しく、自然堤防も顕著に発達を見せている。祇園寺・荘厳寺遺跡は、この合流点付近の草野川左岸にある標高114～115mの自然堤防上に立地している。すなわち、遺跡は沖積平野の微高地に占地し、その南側に拡がる標高109～113mの後背湿地を農業生産の基盤としていたことが窺われる。

2）　歴史的環境　〔第1図〕

草野川流域とその周辺における人類の足跡は、現在のところ先土器時代のものは知られず、縄文時代に始まる。すなわち、草野川が平野部に注ぐ付近で、七尾山西麓に醍醐遺跡[2]がある。これは近畿地方における縄文時代中期

第1図　祇園寺・荘厳寺道跡と近接遺跡位置図

1. 西村遺跡
2. 醍醐遺跡(縄文)
3. 醍醐遺跡(古墳)
4. 塚原古墳群
5. 小野寺原山古墳群
6. 村前古墳群
7. 当目古墳群
8. 大門古墳群
9. 乗倉古墳群
10. 野袖塚古墳
11. 内野神古窯址
12. 大人塚古墳群
13. 木尾古墳群
14. 城山古墳群
15. 木尾遺跡
16. 八島弓月町古墳群
17. 八島廃寺
18. 浅井中学校遺跡
19. 狐塚古墳
20. 亀塚古墳
21. 雲雀山古墳群
22. 田川古墳群
23. 瓜生古墳群
24. 瓜生遺跡
25. 高畑遺跡
26. 宮山遺跡
27. 孝徳の宮古墳
28. 岡の腰古墳
29. 浄土寺遺跡
30. 平塚古墳群
31. 茶臼山古墳
32. 浄円寺遺跡
33. 東上阪遺跡
34. 柿田遺跡
35. 長尾敷遺跡
36. 正蓮寺遺跡
37. 大月遺跡
38. 上阪城遺跡
39. 乗台寺遺跡
40. 上寺地遺跡
41. 垣観古墳
42. 茶臼山古墳群
43. 犬飼古墳群
44. 絵山古墳群
45. 法恒寺遺跡
46. 北郷里遺跡
47. 榎木百坊遺跡
48. 国友遺跡
A 祇園寺・荘厳寺道跡

のタイプ・サイトとして著名なものである。

弥生時代については、同地域の姿を窺わせる遺跡の発見例は今日のところ皆無に等しく、僅かに田川流域の瓜生遺跡や高畑遺跡で磨製太型蛤刃石斧の出土例が知られる程度である。なお、最近の圃場整備事業に関連して、草野川と姉川の合流点よりやや下流域に当たる虎姫町五村遺跡[3]、田川流域の湖北町伊部遺跡[4]や留目遺跡[5]が発掘調査され、いずれからも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落・墳墓跡の一部が検出された。

古墳時代に入ると、前期に属する古墳は今のところ発見されていないが、中期以降非常に多数の古墳が草野川や姉川流域の丘陵や平野部に造営されている。中期のものとしては、姉川流域で横山（臥竜山）の北端部に、全長約80mを測る前方後円墳の茶臼山古墳が存在する。主体部については不明な点が多いが、墳丘に埴輪や葺石を有したものである。茶臼山古墳の南に垣籠古墳がある。全長48mに達する前方後円墳で、木棺直葬かと考えられている主体部から、銅鏡・玉類・刃剣類が出土した。これらの古墳は、同地域で覇を称え大王家とも姻戚関係にあったと伝承されている古代豪族息長氏に関係するものといわれている。一方、草野川流域では、田川の上流で小谷城跡のある小谷山の南に伸びた一支脈上に雲雀山古墳群[6]が存在している。この内の一基は、中期末葉に位置付けられる竪穴式石室を有する円墳で、短甲を始め刃剣類や銅鏡・玉類・須恵器が出土している。また、平野部に独立して築かれた岡の腰古墳や亀塚古墳・野神塚古墳・狐塚古墳[7]などは、比較的大型の円墳で中には周濠を有するものも見られる。

古墳時代も後期に入ると、その社会的変革に起因して、爆発的な勢いで古墳群が増加する。草野川流域では、まず、太尾山西麓に大人塚古墳群（円墳４基）と木尾古墳群（円墳数基）・城山古墳（円墳10基・横穴式石室）・八島弓月野古墳群（円墳６基）が見られる。また、太尾南山麓には当目古墳群（円墳３基・横穴式石室）や大門古墳群（円墳数基・横穴式石室）・乗倉古墳群（円墳十数基）が存在している。さらに七尾山西麓では、前述の醍醐遺跡に近接して醍醐古墳群（円墳数十基・横穴式石室・一部から馬具出土）や小野寺裏山古墳群（円墳十数基・横穴式石室）・村前古墳群（円墳数基）が知られている。姉川流域では、前述の茶臼山古墳の近傍に犬飼古墳群（円墳数基・横穴式石室）や絵山古墳群（円墳数基・横穴式石室）がある。

古墳時代の生産遺跡としては、草野川流域の太尾山西麓にある木尾の内野神古窯跡を挙げることができる。これは、７世紀初頭に位置付けられる須恵器窯である。

古代の幹道としては、古代から近世に至るまで、東海地方と北陸地方を結ぶ主要交通路として重要な役割を果してきた北国脇往還道が、祇園寺・荘厳寺遺跡の東約１ｋｍを通過している。このことは、その地理的要素が卓越しているばかりでなく、経済的・政治的ないし軍事的に優れた基盤が、この地域に存在していたことを物語るものとして見逃すことはできない。

このように、数多くの古墳群や生産遺跡の集中を見、さらに北国脇往還道の通過を見る草野川流域では、それらに対応した集落跡の発見例は皆無に等しく、僅かに浅井中学校遺跡（６世紀末～７世紀初頭）と国友遺跡（古墳時代前期～中期）[8]が知られるのみであった。今回、祇園寺・荘厳寺遺跡の調査で、従来あまり知られていなかった古墳時代の集落跡の一端でも明らかにすることができた。このことは、同地域の古墳時代の様相を知る手懸りとなるだけではなく、北国脇往還道に近接している地理的条件を睨まえ、巨視的には在地勢力と畿内・北陸地方の勢力との係り方を究明する上で重要な発見といえる。

なお、参考資料として、浅井中学校に所蔵されている周辺遺跡出土の遺物の実測図及び観察表を作成しておいた。

（林　純）

3. 調査経過及び結果

1〕 トレンチの状況

調査対象地域内に、第1トレンチから第19トレンチまでの計19カ所にトレンチを設定し、遺構、遺物包含層の有無の確認をおこなった。遺跡の基本的な層序は、上方より耕土（表土）・床土・暗茶褐色土・黄褐色土ないし砂礫層で、遺構は黄褐色土層に掘り込まれた状態で検出された。

以下において、各トレンチの状況を詳説する。

（a） 第1トレンチ （第2図）

トレンチの層位は、上方より耕土が 25cm あり、その下に床土が約5cm の厚さで堆積し、その下層に黄褐色土が見られる。各層は共に遺物は何ら出土せず、遺構も検出することはできなかった。

（b） 第2トレンチ （第2図・第6図）

トレンチの層位は、上方より耕土が 25cm ほど見られ、その下に約5cm の床土がある。その下層に遺物包含層の暗茶褐色土が 20cm の厚さをもって堆積している。その暗茶褐色土を除去した時点で黄褐色土層面を検出し、その面で北東から南西方向に走る幅4.8mを測る溝跡を1条検出することができた。

（c） 第3トレンチ （第2図・第3図・第6図）

調査対象地域の東部に、水田面から比高差が約1.5mを測る土壇状の高まりが見られた。高まりの南端にトレンチを設定した。層位は、表土が約 50cm ありその下層に黄灰色砂質土が 40cm 堆積している。その下層は砂礫層が続く。遺物は、表土に僅かに須恵器・土師器の細片が包含されていたにすぎず、他に中世から現在に至るまでの遺物も包含されており、明瞭に遺物包含層と呼びえるものではなかった。また、遺構も何ら認められなかった。

（d） 第4トレンチ～第8トレンチ （第2図）

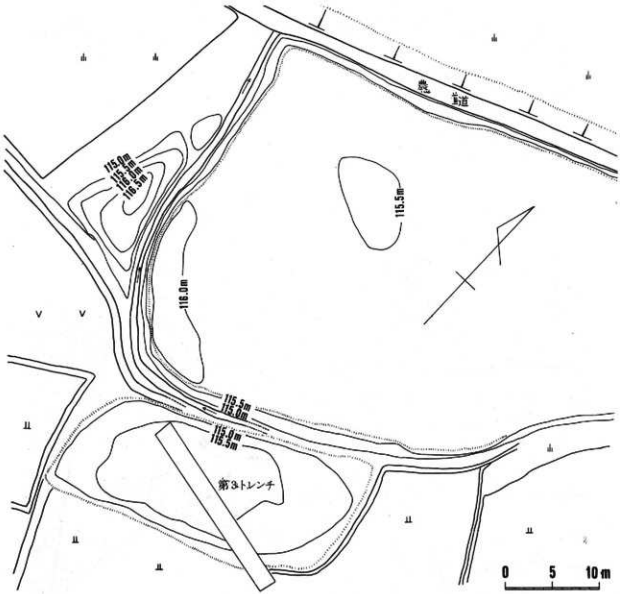
トレンチの層位は、上層より耕土が約 25cm あり、次に 5cm 前後の床土が見られ、その下は砂礫層が続く。遺物包含層は見られず、遺構も何ら検出できなかった。

（e） 第9トレンチ （第2図・第6図）

トレンチの層位は、上方より25cm の厚みで耕土が見られ、その下に10cm程度の厚みをもって床土がある。その下層は砂礫層が続く。遺物は、床土に須恵器・土師器の細片が僅かに含まれていたが、遺物包含層と認められるものではなかった。また、遺構も何ら検出することはできなかった。

（f） 第10トレンチ～第12トレンチ （第2図）

第2図　トレンチ配置図



第３図　第３トレンチ付近地形実測図

トレンチの層位は、第４トレンチ～第８トレンチと同様で、遺物包含層や遺構も同様に何ら認められなかった。

（ｇ）　第13トレンチ　（第２図・第６図）

トレンチの層位は、上方より耕土が 25cm あり、次に５cm 前後の床土が見られ、その下に黒褐色土がおよそ 25cm の厚さで堆積しさらにその下層に暗黒褐色土が見られた。遺物は、黒褐色土層に僅かに須恵器や土師器の細片が包含されていたにすぎない。遺構は何ら検出しえなかった。

（ｈ）　第14トレンチ　（第２図）

トレンチの層位は、第４トレンチ～第８トレンチと大差はない。遺物包含層や遺構についても同様に全く認め

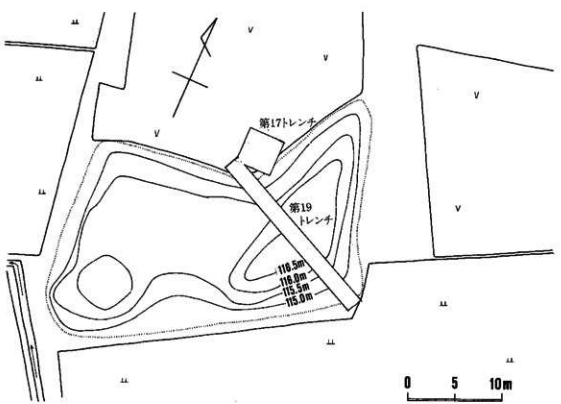
られなかった。

（ｉ）第18トレンチ　（第２図）

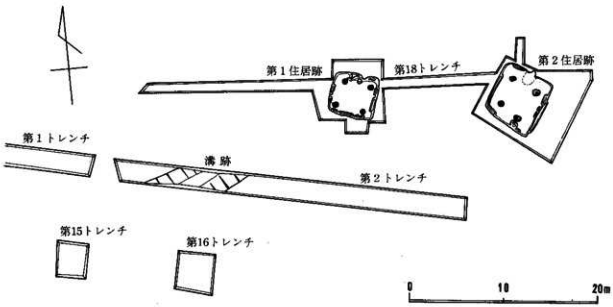
トレンチの層位は、上方より耕土が 25cm ほど見られ、その下に５cm 前後の床土がある。床土の下層に、約 20cm の厚味をもって遺物包含層の暗茶褐色土が堆積していた。その暗茶褐色土を除去した時点で黄褐色土を見た。この黄褐色土層面で、竪穴式住居跡が約12mの隔りをもってほぼ並行する状況で２基検出することができた。遺物は、包含層より須恵器・土師器・石製品・鉄製品が多量に出土した。竪穴式住居跡からは、それぞれ須恵器・土師器・石製品を多く検出している。

（ｊ）　第19トレンチ　（第２図・第４図・第６図）

調査対象地域の南部に、水田面からの比高差が約２ｍほど見られる墳丘状の高まりが存在した。その高まりの最高部を縦断する形でトレンチを設定した。トレンチの層位は、表土層が 40cm 前後あり、その下層は８層に分かれ、上部黒色土・黄褐色土・茶褐色土・灰褐色土・黒褐色土・砂礫層・暗黒褐色土がそれぞれレンズ状に堆積し、さらにその下層は黒色土となっていた。遺物は、下部黒色土から須恵器・土師器及び鉄製品の細片が僅かに出土したのみであった。遺構についても何ら存在せず、古墳等の存在を思わせるものではなかった。



第４図　第17・19トレンチ付近地形実測図



第5図　遺構実測図

2〕　第1住居跡　（第6図）

プランは、南北5.05m・東西4.8mの規模を有するほぼ正方形に近い竪穴式住居跡で、床面の面積は約24.2m²を測る。黄褐色土層を掘り下げて造られ、床面の深さは平均20cm程遺存していた。方位は住居跡南北の軸線がN-23°36′-Eの方向を示している。住居跡内からは、周溝・柱穴・カマドが検出された。

〔周溝〕

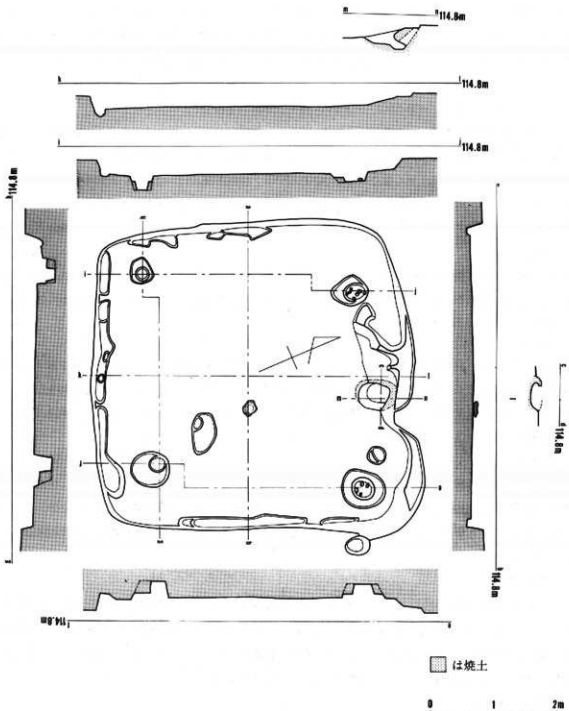
住居跡の壁面にそって周溝が設けられているが、カマドのある北壁では認められなかった。また、西壁・東壁・南壁の三方のそれぞれの周溝は、連続せずに断続的で各コーナーで途切れている。周溝の幅や深さは一定ではないが、おおむね幅20cmで深さ10cmほどの断面U字形を呈し、各コーナーに向って徐々に浅くなる。周溝内からは、何ら遺物は発見されなかった。

〔柱穴〕

柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上のややコーナー寄りで4カ所検出した。柱穴の掘り方は、不定形な楕円形を呈して径70～40cmである。柱痕はいずれも径35～20cm前後で、深さは30～15cm程度であって、柱痕底部に小礫が見られるものも存在する。なお、この柱穴に囲まれた部分の床面硬度は、他の部分と比べ際立った差は認められなかった。

〔カマド〕

北側の壁面のほぼ中央に築かれている。平面形は馬蹄形を呈し、天井部の一部がドーム状に遺存していた。カマド全体の規模は、幅60cmで奥行き80cmを測る。焚き口の幅は40cmで、カマドの底は横断面が船底状で、床より20cmほど掘り込めている。カマドの奥にトンネル状の煙道がカマド軸に真直に取り付き、約60°の傾斜をもって45cm伸びていた。カマド全体は黄灰色粘質土で築かれ、内側は熱をうけて赤黄色に焼け非常に固く焼き締まっていた。カマドの底部には灰層が厚く堆積し、炭化物も見られた。カマドの取り付く北側の壁は、カマドを中心として左右約3mの長さに渡って階段状に内側に張り出している。その張り出しの幅は一様ではないが、およそ20cm程であった。



第6図　第1住居跡実測図

〔遺物出土状況〕

住居跡内からは、須恵器・土師器・鉄器・石製品が出土しているが、大半は埋土中からの出土で、床面直上で発見された遺物は少ない。カマド周辺からは、土師器甕型土器の破片が散乱した状態で出土した。柱穴に囲まれた部分のほぼ中央で、床面に掘えた状況で須恵器の短頸壺（図９－12）と凹石（図９－22）が出土した。

３） 第２住居跡 （第７図）

第１住居跡の東方およそ12mのところに位置している。住居跡のプランは、南北5.8ｍ、東西6.8ｍの規模を有するやや長方形を呈する竪穴式住居跡で、床面面積は約39.4㎡を測り、第１住居跡より大形のものである。第１住居跡と同様に、黄褐色土層を掘り込んで築かれている。床面の深さは、最も深い西側の壁に沿った部分で16cm を測り、東壁に近くなるに従ってしだいに浅くなり、最浅部では10cm と遺存度は悪い。方位は、住居跡南北の軸線がＮ－42°30′－Ｅの方向を示す。住居跡内からは、周溝・柱穴・カマド・大形土坑が検出された。

〔周溝〕

住居跡の壁に沿って周溝が設けられているが、全周には回らず、また、各々は連続しない。周溝の幅及び深さは概して一定で、大概幅20cm 、深さ８cm を測り、断面形は浅いＵ字状を呈している。周溝内からは、特に遺物は見いだすことはなかった。

〔柱穴〕

柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上のややコーナー寄りで、計４カ所検出した。柱穴の掘り方は、不定形な楕円形を呈するものや、ほぼ方形に近いものもあり、径85～50cm を測る。柱痕はいずれも径30～25cm 内外で、深さは50～35cm 程度であった。なお、この柱穴に囲まれた部分の床面の硬度は、他の部分、例えば周溝付近と比べて際立った差異は認められなかった。

〔カマド〕

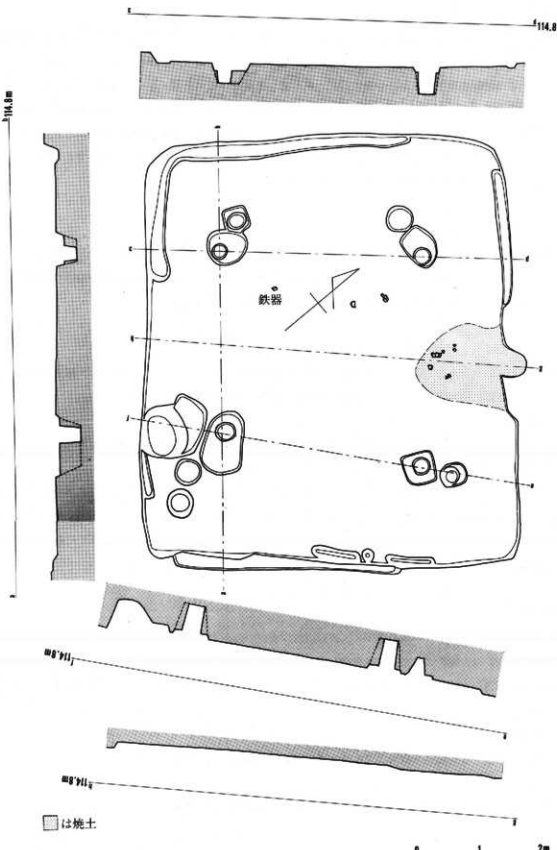
北壁のほぼ中央に構築されたであろうが、遺存度は非常に悪く、ただ焼土塊が一面に広がった状態であった。構造や規模を具体的に提示することはできないが、煙道と思われる突出が住居跡壁面外におよそ40cm 程延びている。また、カマドを構成していたと思われる黄灰色粘質土が、熱によって赤黄色に焼け、非常に固く焼けてしまって広がっていた。

〔大形土坑〕

カマドのほぼ反対側、即ち南壁沿いの中央よりやや東側のところで、二段に掘り下げられた大形の土坑を検出した。プランは不定形な楕円を呈し、規模は径約１ｍで一段深い方で径 80cm を測る。深さは浅い方で 10cm あり、深い方では約50cm ほどであった。深い方は断面が船底状を呈する。土坑内からは、須恵器・土師器片が少量ながら出土しており、貯蔵穴である可能性を否定することはできない。

〔遺物出土状況〕

住居跡内からは、須恵器・土師器・鉄製品が出土しているが、大半は埋土からであり、また住居跡全体の遺存度が悪いため、量は決して多くはない。床面直上で検出された遺物は、土師器・須恵器片の他に器形不明の鉄塊が柱穴に囲まれた部分のほぼ中央で発見されているにすぎない。カマド周辺では、土師器甕形土器の破片が散乱した状況で出土している。



第7図　第2住居跡実測図

(c) 溝跡 (第6図)

北東から南西方向に流れる溝で、竪穴式住居跡群の南西で検出した。竪穴式住居跡群と同じ黄褐色土層面を掘り込んでいる。溝跡の幅は、上端で4.8mを測り下端では1.8mであった。深さは60cmで、断面は浅いU字形である。この溝跡の埋土は3層に分層し得、上層の黒色土層からは須恵器・土師器細片の少量の出土をみたが、下層の明茶褐色土層・茶褐色土層・茶褐色土層からは遺物は全く出土しなかった。この溝跡の性格であるが、断面の形状よりして自然の流水路とするのが妥当であろう。しかし、埋土の土質や堆積状況から推定すると、この溝跡の流水はかなり緩やかなものであったと思われ、あるいは集落や水田に付随した施設であったかもしれない。いずれにしても、現時点で判断するのはむずかしい。

4) 遺物

本遺跡から出土した遺物は、須恵器・土師器・鉄製品・石製品などで、出土総量はそれほど多くはないが、その中でも須恵器・土師器が大部分を占めている。個別の観察については、別に出土遺物観察表を作成した。ここでは、出土層位や遺構ごとの出土遺物について、その特徴や年代を順次考証する。

(a) 第1住居跡出土遺物 (第9図)

第1住居跡から出土した遺物は、須恵器・土師器・鉄製品・石製品である。須恵器には、杯蓋・杯身・短頸壺があり、土師器に鉢と甕が見られる。鉄製品は鉄鏃であり、石製品は所謂凹石である。

〔須恵器〕

杯蓋(1～4)は、天井部が偏平で天井部と口縁部を分ける稜線は見られず、口縁部は内弯し端部は尖る。天井部は概してヘラ削りは見られない。口径11～12cmと小型化している。

杯身(5～11)は、その口径の大小により2類に分けられる。5～9は、口径12cm末満の小型品で、たちあがりが小さく、内傾し端部は丸い。受部は水平ないし斜上方に伸び、体部は口径に比してやや深く底部は丸味を残し、ヘラ削りはほとんどない。10・11は、口径に比して浅く偏平な感じを受ける。全体的に薄手。

短頸壺(12)は、口縁部が短く直立し体部はやや偏平な球体で、肩部はあまり張らない。

壺(13)は、外反し端部を丸く肥厚させるものである。

〔土師器〕

鉢(14)は、サラダボール状の体部に、片口の注口が付いたもので、器表が丁寧に調整されている。

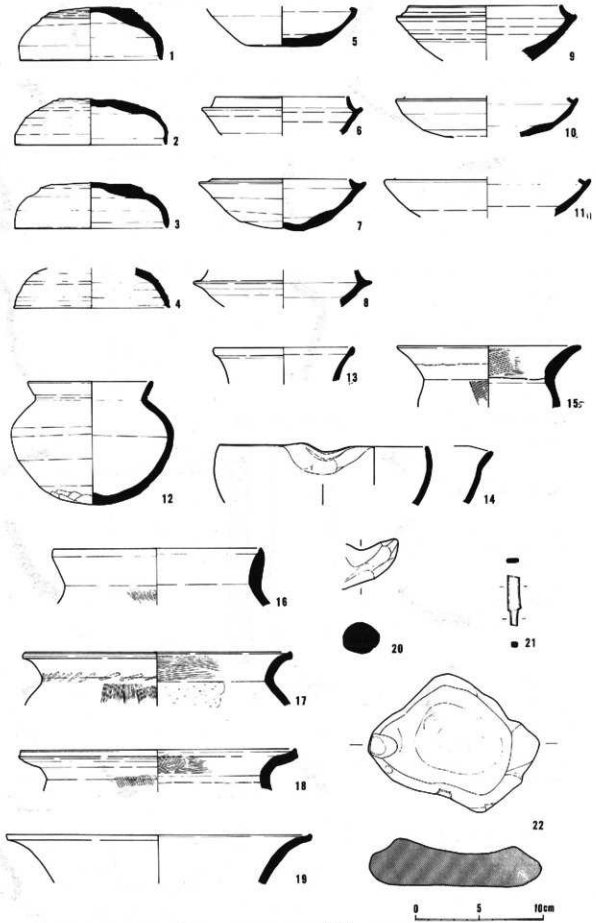
甕(15～19)は、細片のため全体を把握しえないが、口縁部の形態から2類に分けることができる。15・16は、口縁部を単に外反させただけのものである。17～19は、外反し短く上方に摘み上げる口縁部である。他に、把手付の甕(20)も見られる。

〔鉄製品〕

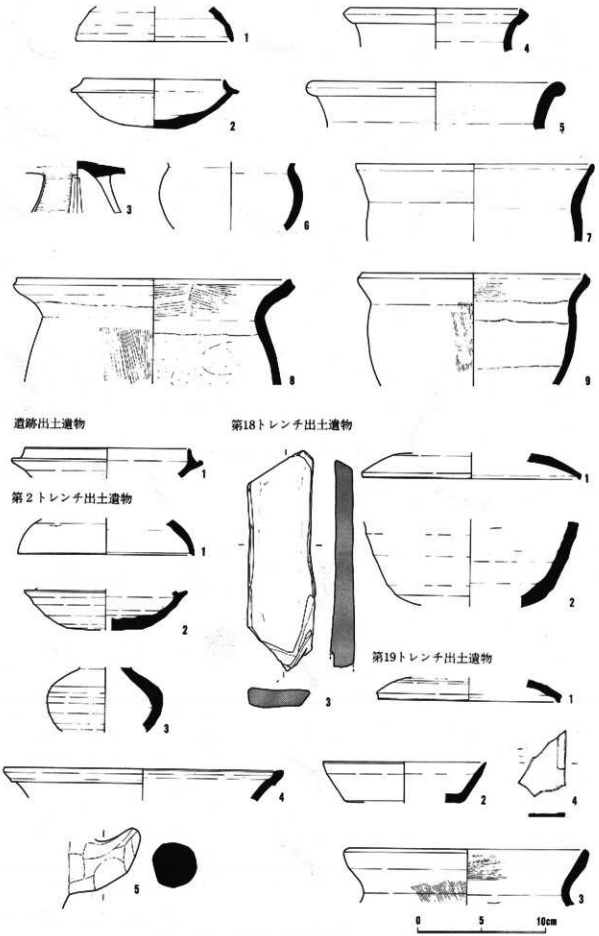
鉄鏃(21)は、5世紀後半以降急速に量を増す実践的な細根式の長頸鏃である。

〔石製品〕

凹石(22)は、偏平な自然石を利用したもので、その一面を凹ませたものである。



第８図　出土遺物実測図（１）（但し、22は6/1）



第9図　出土遺物実測図（2）（但し、第18トレンチ出土遺物3は6/1）

以上の出土遺物のうち、須恵器の杯身・杯蓋や短頸壺は、陶邑古窯址群[9]のＴＫ２０９型式や陶邑編年[10]のⅡ型式第５段階といわれる時期の特徴をよく示す。また、湖北地方の古墳出土の須恵器[11]と対応させれば、長浜市諸頭山２号墳[12]のものに近似する。土師器では、甕は難波宮整地層下灰色粘土層出土[13]の甕や、小墾田宮推定地[14]の溝ＳＤ０５０のものと共通する特徴を有す。また、鉢は大阪府船橋遺跡[15]の鉢ＡⅡ類に類似している。これらのことから、第１住居跡出土遺物の年代は、７世紀初頭に位置付けられよう。

（ｂ）　第２住居跡出土遺物　（第10図）

第２住居跡からは、須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕が出土し、土師器には壺・甕・竈等が見られる。他に、鉄製品が僅かに出土した。

〔須恵器〕

杯蓋（１）は、天井部と口縁部を分ける稜線は不明瞭で、口縁部は内弯し端部は尖る。口径は12cm 前後で、後述する杯身に対応して小型化している。

杯身（２）は、口径11.1ｃｍ を測る小型品で、たちあがりは小さく、内傾し端部は丸い。受部は斜め下方に伸び、たちあがりとの区別が不明瞭で一体となった感じである。体部は、口径に比して浅く、底部は丸味を残しヘラ削りは見られない。

高杯（３）は、短脚の一段透し高杯で脚部にカキ目が施されている。時期的に、他の土器と大きなズレがあり、明らかに混入品であろう。

甕（４・５）は、大小の二種類がある。４は、口縁部が外反し端部を折り曲げ断面三角形の段を有し、５は単に丸く肥厚する。共に装飾性に乏しい。

〔土師器〕

壺（６）は、小型で球体に近い体部をもつものである。胎土は特に精良である。

甕（７・８）は、細片と化しているため全容を明らかにすることはできないが、長胴の甕であろう。口縁部は、単に外反し短く上方に摘み上げる。

竈（９）は、口縁部の形態は甕と大差はないが、体部は小さく蜆状を呈するものである。

〔鉄器〕

器形・用途共に不明な鉄塊が出土している。

以上の出土遺物のうち、須恵器の杯蓋・杯身や甕は、陶邑古窯址群のＴＫ２０９型式や陶邑編年のⅡ型式第５段階のものの特徴をよく示している。また、土師器の甕は、大津宮時代（668~672）に比定されている湖西線関係遺跡ＶＤ区大溝出土[16]の甕や、難波宮整地層下灰色粘土層出土の甕に類似している。これらのことから勘案して、第２住居跡出土遺物の年代は、第１住居跡と同様に７世紀初頭に位置付けられる。

（ｃ）　溝跡出土遺物　（第10図）

溝跡から出土した遺物は、須恵器と土師器で、溝跡埋土最上層の黒色土層からの出土であった。量も少なく、また大半が細片であったため、図示しうるものは僅かに須恵器１点のみであった。

〔須恵器〕

杯身（1）は、たちあがりが小さく、直立して端部は単に丸くおさめている。受部は短かく斜上方に伸び端部は丸い。体部は浅い。

この須恵器杯身は、陶邑古窯址群のTK209型式や陶邑編年Ⅱ型式第5段階に類似し、7世紀初頭に比定しうる。この溝跡出土の遺物は、量的にも少なく、出土部位も最上層であるため、溝跡自体の堀穿の年代は明らかでないが、少なくとも7世紀初頭には埋没を終了したといえるとしておく。

（d） 第2トレンチ出土遺物 （第10図）

第2トレンチは、前述の溝跡が検出されたトレンチであるが、その耕土・床土下の暗茶褐色土層にも遺物が包蔵されていた。出土遺物には、須恵器と土師器がある。

〔須恵器〕

杯蓋（1）は、天井部と口縁部の境界が不明瞭なもので、口縁端部は尖る。

杯身（2）は、たちあがりは内傾し受部は斜上に伸び、体部は浅く底部は平らでヘラ削りは施こされない。

壺（3）は、球形の体部をもつ小型化したものである。体部はヘラ削りで整え、肩部には凹線は見られない。

甕（4）は、口縁端部が肥厚して面を取るもので、口縁部に笈餝は見られない。

〔土師器〕

甕があるが、細片のため図示しうるものは、牛角状の把手（5）だけである。

以上の出土須恵器は、陶邑古窯址群のTK43からTK217型式に属する。すなわち、この包含層は年代的に6世紀後半～7世紀前半の遺物を包蔵している。

（e） 第18トレンチ出土遺物 （第10図）

竪穴式住居跡群を検出したトレンチで、暗茶褐色土層から須恵器・土師器の他に石製品が出土した。

〔須恵器〕

杯蓋（1）は、天井部に偏平な宝珠つまみが付き、口縁端部を単に下に短く屈曲させるものである。

壺（2）は、長頸壺の体部でやや丸味を帯る。

〔石製品〕

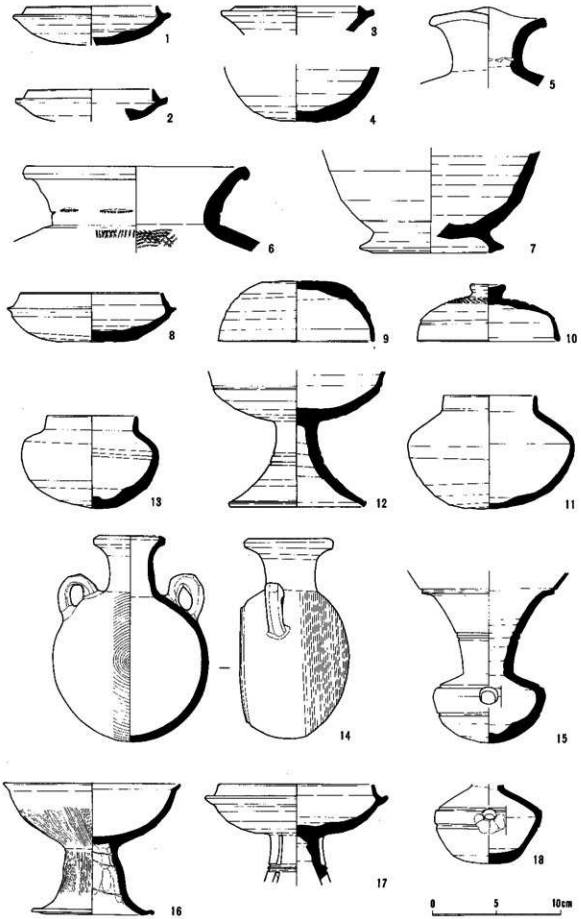
砥石（3）は、板石状の偏平な石で、金属を砥いだと思われる痕跡を三面にもっている。

出土遺物中、須恵器杯蓋や長頸壺は、陶邑古窯址群のMT21型式に、また、藤原宮Ⅱa型式[20]に類する。これらの須恵器は7世紀後半～8世紀初頭のものである。

（f） 第19トレンチ出土遺物 （第10図）

2mほどの墳丘状の高まりの土層は、表土下8層に分層し得た。その内の最下層の下部黒色土中より、須恵器、土師器・鉄製品が僅かに出土している。

〔須恵器〕



第10図　周辺遺跡出土遺物実測図（1）

杯蓋（1）は、偏平な天井部の中央に偏平な宝珠形のつまみが付くもので、口縁部は単に下方に短く曲げる。
杯身（2）は、口縁端部が尖り体部は直線的に開く。体部と底部の境界は屈曲して稜をなす。

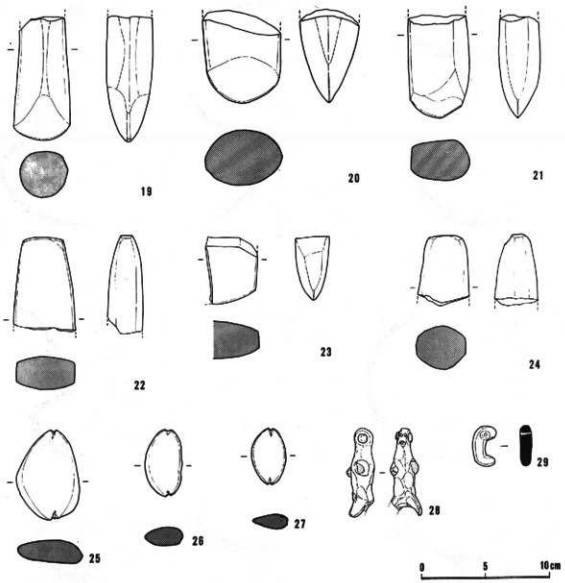
〔土師器〕

甕（3）は、口縁部は単に「く」字形に開くものである。

〔鉄製品〕

器形不明（4）のもので、板状の一端に帯状の鉄片が貼り付けられたものである。

このうち、須恵器杯蓋は陶邑古窯址群のＭＴ21型式に、杯身はＴＫ７にそれぞれ近い。したがってこの墳丘状の高まりは８世紀後半以降に形成されたものである。　　（林　純）



第11図　周辺遺跡出土遺物実測図（２）

表1. 出土遺物観察表

第 1 住居跡

種類	器種	図版番号	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	胎土	色調	焼成	法量	備考
須恵器	坏蓋		1	天井部は、やや高く平らである。 天井部と口縁部の境界は、不明瞭で僅かに凹む程度である。 口縁部は内弯して立ち、端部はやや尖り気味に終る。	天井部は、ヘラ切り後に、粗いヘラ押えを施し、天井部と口縁部の境界付近のみにヘラ削りを施す。 天井部内面は仕上げナデ調整。 口縁部内外面は共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	茶褐色	良く硬質	口径 11.1cm 器高 4.2cm	還元炎焼成による灰色の色調は呈しておらず、茶褐色であるが、所謂「焼成不良」によるものではなく、焼成は良い。他にも、同様のものが多く見られることから、あるいは、生産窯の特色とも考えられる。
			2	天井部は、やや偏平で丸味を持つ。 天井部と口縁部の境界は不明瞭。 口縁部は内弯して立ち、端部は僅かに肥厚し丸くおさめる。	天井部は、ヘラ切り後にヘラ押えを施す。 天井部内面は、仕上げナデ調整。 口縁部内外面は、共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	黒灰色	良く硬質	口径 11.6cm 器高 3.6cm	
			3	天井部は、やや偏平で平らである。 天井部と口縁部の境界は、不明瞭で、単に凹む程度である。 口縁部は内弯して立ち、端部はやや尖り気味に終る。	同 上	細砂粒を多く含む。	茶褐色	良く硬質	口径 11.9cm 器高 3.6cm	1と同様。
			4	天井部と口縁部の境界は不明瞭。 口縁部は内弯して立ち、端部は内側に面を取り尖る。	同 上	細砂粒を多く含む。	暗灰色	良く硬質		

	坏　身		5	体部は内弯して開く。 体部と底部の境界は、やや屈曲し稜をなす。 底部は平ら。	体部内外面は、共に横ナデ調整 底部内面は、仕上げナデ調整。 底部はヘラ切り後に、仕上げナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	灰色	悪く軟質		
			6	たちあがりは小さくやや内傾し、さらに外反して立つ。 口縁端部は、単に丸くおさめる。 体部は、やや上向きに外方へのび、丸くおさめる。 体部は、直線的に開く。 体部と底部の境界は、僅かに屈曲する。	口縁部、体部内外面は、共に横ナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	淡灰色	良く硬質	たちあがり高 0.9㎝	
			7	たちあがりは、非常に小さく内傾する。 口縁端部は、やや尖る。 受部は、やや上向きに外方にのび、丸くおさめ、受部上面にはヘラによる1条の凹線を施す。 体部は内弯して開く。 体部と底部の境界は、不明瞭。 底部は丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部内面は仕上げナデ調整。 底部は、ヘラ切り後にヘラ押えを施す。	細砂粒を多く含む。	灰白色	悪く軟質	口径 10.6㎝ 器高 4㎝ たちあがり高 0.4㎝	
			8	たちあがりは、内傾して小さい。 受部は水平に突出し、丸くおさめる。 体部は、やや内弯して開く。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。	砂粒を少し含む。	淡茶褐色	悪く軟質		
			9	たちあがりは非常に小さく内傾し、やや外反して立つ。 口縁端部は、丸くおさめる。	同　上	細砂粒小石を多く含む。	灰色	良く硬質	たちあがり高 0.7㎝	

				受部は水平に突出し丸くおさめ、受部上面には、ヘラによる1条の凹線を施す。 体部は内弯して開く。						
			10	たちあがりは、大きく内傾する。 受部は上向きにのび、丸くおさめる。 体部は浅く、内弯して開く。	体部内外面は、共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。	小石、砂粒を多く含む。	淡灰色	良好で緻密		全体的に非常に薄手。
			11	同　上	同　上	砂粒を多く含む。	暗灰色	良く硬質		同　上
	短頸壺		12	口縁部は短く、やや外傾し、端部は単に丸くおさめる。 頸部に1条の凹線を施す。 体部はやや偏平で、肩部は丸味をもち、胴部最大径は中程よりやや上位にくる。 底部は丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に、横ナデ調整。 底部は、ヘラ切り後に不定方向のヘラ削り及びヘラ押え。	小石、砂粒を多く含む。	灰色	良く硬質	口径 9.8 cm （復原） 器高 9.6 cm 胴径 12.7 cm	
	壺		13	口縁部は外反して開き、端部は外側に肥厚し丸くおさめる。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	暗灰色	良く硬質		
土師器	鉢		14	サラダボール状を呈し、口縁部の一カ所に片口の注口が付く。 口縁端部は単に丸くおさめる。	体部内外面は横ナデ調整。	細砂粒を含む。	黄灰色	悪く硬質		類例は少ない。
	甕		15	口縁部は「く」字形に外反し、端部は単に丸くおさめる。 体部はあまり張らない。	口縁部外面は横ナデ調整。 口縁部内面は横方向の刷毛目調整。 体部内外面は共に縦方向の刷毛目調整。	砂粒を含む。	黄灰色	良く硬質		小型の甕である。

			16	口縁部は肥厚して直立し、端部内面に浅い凹線を巡らす。体部はやや張る。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。体部外面は、刷毛目調整。	細砂粒を含む。	黄灰色	悪く軟質		
			17	口縁部は「く」字形に大きく外反し、端部は僅かに上方につまみ上げ、外側に面をなす。体部は、やや膨らむ。	口縁部外面は、横ナデ調整。口縁部内面は、横方向の刷毛目調整。体部外面は、縦方向の刷毛目調整。体部内面は、ヘラ削り調整。頸部に、ヘラによる押え痕が見られる。	砂粒を多く含む。	黄灰色	やや良く硬質		
			18	口縁部は「く」字形に大きく外反し、端部は僅かに上方につまみ上げ、外側に面をなし、面の中央はやや凹む。	口縁部外面は、横ナデ調整。口縁部内面は、横方向の刷毛目調整。体部外面は、縦方向の刷毛目調整。	細砂粒を多く含む。	黄灰色	やや良く硬質		
			19	口縁部は大きく外反し、端部は僅かに上方につまみ上げ、外側に面をなす。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	砂粒を含む。	黄灰色	悪く軟質		甕の一種であろう。
			20	甕の把手で、断面円形を呈す。	手づくね。	砂粒を多く含む。	黄灰色	やや良く硬質		
鉄器	鉄鏃		21	細根式の長頸鏃の茎部で、断面は長方形を呈す。						
石製品	凹石		22	平面形が矩形の偏平な自然石で、その一面を凹ませたものである。石質は片成岩である。						住居跡床面中央に原位置を保ったまま出土した。

第２住居跡

須恵器	坏　蓋		1	天井部と口縁部の境界は明瞭でない。 口縁部は内弯して立ち、端部は尖り気味に終る。	口縁部内外面は、共に横ナデ調整。	砂粒を多く含む。	淡灰色	良く硬質		
	坏　身		2	たちあがり、非常に小さく内傾する。 口縁端部は、単に丸くおさめる。 受部はやや下向きに外方にのび内弯するだけで凹まづ、たちあがりとの境界が明瞭でなく、たちあがりと一体となっている。 体部は内弯して開く。 体部と底部の境界は丸味をもつ。 底部は丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に、仕上げナデ調整。	細砂粒を含む。	茶褐色	良く硬質	口径 11㎝ 器高 3.8㎝ たちあがり高 0.8㎝	たちあがり部や受部の形態は特徴的で、生産窯の特色である。焼成についても、第１号住居跡出土遺物 1.3 と同様である。
	高　坏		3	短脚一段透し高坏の脚部で、基部は太く、四方に透し穴を穿つ。	脚部外面は、粗いカキ目調整。 脚部内面は、横ナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	灰色	良好で堅緻		
	壺		4	口縁部は外反して開き、端部は折り曲げて、外方は中央に稜をもつ断面三角形の段をなす。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	淡灰黄色	悪く軟質		
			5	口縁部は外反して開き、端部は大きく肥厚し丸くおさめる。	同　上	小石、砂粒を多く含む。	淡灰黄色	悪く軟質		

土師器	壷		6	体部は球体に近い。	体部内外面は共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	黄茶褐色	悪く軟質		
	壷		7	口縁部は僅かに屈曲し、端部は僅かに内傾する。 体部は全く張らない。	口縁部内外面は、共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	黄茶褐色	悪く軟質		
			8	口縁部は「く」字形に外反し端部は上方に僅かにつまみ上げ、外側に面をなし、面の中央は凹む。体部はあまり張らない。	口縁部外面は横ナデ調整。 口縁部内面は横方向の刷毛目調整。 体部外面は縦方向の刷毛目調整。 体部内面はヘラ削り調整。	小石、砂粒を多く含む。	黄灰色	悪く軟質		
			9	口縁部は「く」字形に外反し、端部は上方につまみ上げる。 体部は張らず、丸味をもつ。	口縁部外面は、横ナデ調整。 口縁部内面は、横方向の刷毛目調整の後に横ナデ調整。 体部外面は縦方向の刷毛目調整。 体部内面は、横ナデ調整。					粘土帯の接合面が明瞭に残る。

溝　　跡

須恵器	坏　身		1	たちあがりは小さくほとんど直立する。 口縁端部は、単に丸くおさめる。 受部は外上方に突土し、丸くおさめ、受部上面にヘラによる1条の凹線を施す。 体部は内弯して開く。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。	砂粒を多く含む。	灰色	良好で堅緻	たちあがり高 1㎝	

第 2 トレンチ

須恵器	坏　蓋		1	天井部と口縁部の境界は不明瞭。 口縁部は内弯して立ち、端部は内側に面をとり尖る。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	砂粒を多く含む。	淡灰色	良く硬質		
	坏　身		2	受部は、やや上向きに外方にのび丸くおさめる。 体部は、内弯して開く。 体部と底部の境界はやや屈曲する。 底部は平ら。	体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に仕上げナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	淡灰色	悪く軟質		
			3	体部は小さく肩部はあまり張らづ、球体に近い。	体部外面は、肩部以上は横ナデ調整、肩部以下はヘラ削り調整。	細砂粒を多く含む。	暗灰色	良く硬質		
	甕		4	口縁部は開き端部は肥厚し、水平の面を取る。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	細砂粒を多く含む。	黒灰色	良く硬質		
土師器	甕		5	甕の把手で、断面円形を呈す。	手づくね。	小石、砂粒を多く含む。	淡黄灰色	悪く軟質		

第 18 トレンチ

須恵器	坏　蓋		1	天井部から口縁部にゆるやかにのびる。 口縁端部は屈曲して下方に短く突出し、断面逆三角形を呈す。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。	砂粒を多く含む。	灰色	悪く軟質		

	壺		2	体部と底部の境界は屈曲して稜をなす。	体部の内外面は共に横ナデ調整。	細砂粒を含む。	灰色	良好で堅緻		長頸壺の体部であろう。体部外面に自然釉が付着している。
石製品	砥石		3	板状の砥石で、断面矩形を呈す。 上面、下面と一方の側面に使用痕が見られる。使用痕より金属器を砥いだものと思われる。 石質は片成岩である。					巾 9.6㎝ 厚さ3㎝	一端は欠いている。

第 19 トレンチ

須恵器	坏蓋		1	天井部から口縁部にゆるやかにのびる。 口縁端部は屈曲して下方に突出し、断面逆三角形を呈す。	天井部はヘラ切り後にヘラ削り調整。 口縁部はヨコナデ調整。	砂粒を多く含む。	淡灰色	良く硬質		
	坏身		2	口縁端部は尖る。 体部は直線的に開く。 体部と底部の境界は屈曲して稜をなす。 底部は平ら。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に仕上げナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	暗灰色	良好で堅緻		
土師器	甕		3	口縁部は「く」字形に開き、端部はやや肥厚し、丸くおさめる。	口縁部外面は、横ナデ調整。 口縁部内面は、横方向の刷毛目調整。 体部外面は、縦方向の刷毛目調整。	砂粒を含む。	黄灰色	悪く軟質		
鉄器			4	厚さ2㎜の板状で一端に帯状の板を貼り付けている。						器種は不明。

（林　　純）

表2. 周辺遺跡出土遺物観察表

種類	器種	図版番号	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	胎土	色調	焼成	法量	備考
浅井町木尾、内野神古窯址										
須恵器	坏身		1 ～ 3	たちあがりは、非常に小さく、内傾する。 口縁端部は尖り気味に終る。 体部は浅く、偏平で、内弯して開く。 底部は丸味を残す。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。					「浄土寺跡、岡の腰古墳発掘調査経過報告№3」より転載。
浅井町木尾城山										
須恵器	壺		4	体部と底部の境界は不明瞭。 底部は丸味をもつ。	体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ切り調整。	小石を少し含む。	淡灰色	良好で堅緻		
	提瓶		5	口縁部は大きく外反し、端部は外側に面をとる。	口縁部、体部内外面は、共に横ナデ調整。	精良	淡灰色	良好で堅緻		
	甕		6	口縁部は外反して開き、端部は下方に折り曲げて肥厚させる。 体部は大きく張る。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。 口縁部外面に櫛状工具（叩き目原体？）の押えによる鋸歯状の紋様が入る。 体部外面は、平行叩き目紋を施す。 体部内面は、同心円叩き目紋を施す。	精良	灰褐色	良好で堅緻		

	長頸壺		7	体部はやや膨らむ。 体部と底部の境界は丸味をもつ。 高台は大きく外方にふんばり、端部は肥厚し、内側端部が下方に突出する。	体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に仕上げナデ調整。	小石、砂粒を多く含む。	暗灰色	良く硬質		
浅井町大依古墳										
須恵器	坏　身		8	たちあがりは小さく内傾する。 口縁端部は、単に丸くおさめる。 受部は小さく水平に突出する。 体部は内弯して開く。 体部と底部の境界はやや屈曲する。 底部は平ら。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部内面は仕上げナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。	精　良	暗灰色	良好で堅緻	口径 11.2cm 器高 3.9cm たちあがり高 1.1cm	
	坏　蓋		9	天井部は、やや高く平ら。 天井部と口縁部の境界は、不明瞭。 口縁部は、内弯して立つ。 口縁端部は単に丸くおさめる。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。 天井部はヘラ切り後にヘラ押え。	精良	灰色	良く硬質	口径 12.2cm 器高 4.7cm	
浅井町当目古墳										
須恵器	坏　蓋		10	天井部は僅かに膨らみ、中央に環状に近い偏平なつまみが付く。 天井部と口縁部の境界は僅かに凹む。 口縁部は、ほとんど直立し、端部は肥厚して内傾する面を作る。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。 天井部は、つまみを廻って、櫛描き列点紋を施す。 列点紋の上下に凹線紋を廻らす。	砂粒を少し含む。	灰白色	良く硬質	口径 11.1cm 器高 4.4cm	

	短頸壷		11	口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。 体部は、肩部が大きく張り、やや偏平で丸味をもつ。 体部と底部の境界は丸味をもつ。 底部は丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。 頸部はヘラによる1条の凹線が廻る。	細砂粒を含む。	灰色	良く硬質	口径 7.1cm 器高 8.8cm	
浅井町浅井中学校遺跡									
須恵器	無蓋高坏		12	坏部は浅く、口縁部は外上方へ開き、口縁部と坏部底部の境界は1条の凹線が廻る。 脚部の基部は細く、外反して大きく開き、端部は1条の凹線を廻し、外側に面を作る。 脚部は中位に2条の凹線が廻り、透し孔はない。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。 坏部底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。 脚部内外面は共に横ナデ調整で、内面には絞り目が残る。	細砂粒を多く含む。	黄灰褐色	悪く軟質	脚部径 10.4cm	
浅井町内保往生野古墳									
須恵器	短頸壷		13	口縁部は短かく直立し、端部は丸くおさめる。 体部は肩部があまり張らず、丸味をもつ。 体部と底部の境界は不明瞭で、底部は深く丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。	小石、砂粒を多く含む。	黒灰色	良好で堅緻	口径 7.1cm 器高 7.2cm	
浅井町内保									
須恵器	提瓶		14	口頸はやや長く外反し、口縁端部はやや肥厚し内傾する。 体部は前面が丸く膨らみ、背面ははぼ平らである。横断面は厚く鏡餅の断面に似ている。 肩部の両側に環状の耳が付く。	口縁部内外面は共に横ナデ調整。 頸部はカキ目調整。 体部前面は、回転を利用したカキ目調整を施す。 体部背面は横ナデ調整。	精良	黒灰色	良好な堅緻	口径 器高 胴部径 胴部厚	

浅井町北野											
須恵器			15	頸部は細く、口頸部はラッパ状に開き頸部と口縁部の境界は屈曲し1条の凸帯で明瞭な段をなす。 口縁部は内弯して大きく開く。 体部は非常に小さく、肩部はやや張り1条の凹線を廻す。 体部中位に1条の凹線を廻らし、円孔を穿つ。 底部は丸味をもつ。	口縁部、体部内外面は共に横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に仕上げナデ調整。	精良	暗灰色	良好で堅緻		
木ノ本町高時											
土師器	高　坏		16	坏部は浅い椀状を呈し、口縁部は屈曲して短かく外上方に開き、端部は尖る。 脚部は筒状を呈し外反して開き、水平になり、端部はやや肥厚に丸くおさめる。	坏部内面及び口縁部は横ナデ調整。 坏部外面下半は、手づくねの上から刷毛目調整。 脚部は、筒部外面が手づくねの上から刷毛目調整。 筒部内面は粘土帯の接合面を残し、手づくね。 裾部内外面は共に横ナデ調整。	精良	黄褐色	やや良く硬質	口径 14㎝ 器高 10.3㎝ 脚部径 9.6㎝	
木ノ本町川合											
須恵器	有　蓋 高　坏		17	たちあがりは、小さく内傾する。 口縁部は単に丸くおさめる。 受部は上向き外方にのび、丸くおさめ受部上面は心で1条の凹線を廻す。 坏部は浅く、内弯して開く。 脚部は長脚で二段透しである。	口縁部、坏部体部・脚部内外面は共に横ナデ調整。 坏部底部はヘラ切り後にヘラ削り調整。	精良	淡灰色	良好で堅緻	口径12㎝ たちあがり高 1㎝	白灰色の自然釉付着

				基部は細い。 脚部は中程に2条の凹線を廻らし、その上・下に三方の透し孔を配す。上方の透し孔は中まで貫通していない。							
木ノ本町古橋											
須恵器			18	体部は小さく、肩部はやや張る。 肩部と体部に凹線が廻す。 体部に円孔が穿れ、やや受け口状になる。 底部はやや平ら。	体部は横ナデ調整。 底部はヘラ切り後に仕上げナデ調整。	砂粒を少し含む。	暗灰色	悪く軟質			
浅井町東草野下堺並											
石器	石斧		19	蛤刃石斧の刃部で、断面円形を呈す。							
浅井町高畑79番地											
石器	石斧		20	蛤刃石斧の刃部で、断面偏円形を呈す。							
浅井町高畑											
石器	石斧		21	蛤刃石斧の刃部で、断面丸味のある形を呈す。							
山東町春照大沢杉沢											
石器	石斧		22 ～ 24	蛤刃石斧の基部で、断面丸味のある方形を呈す。							

木ノ本町古橋										
石器	石鏃		25 ～ 27	偏平な卵形の自然石の2端をV字形に削りこんでいる。						
浅井町木尾城山										
須恵器	装飾器台		28	装飾器台の装飾の一部で、耳や目・鼻の表現から猿と思われる。	手づくね。	精良	灰色	良好で堅緻		
高月町石作玉作神社										
石製品	勾玉		29	「コ」の字形に近い。	片面穿孔				長さ3.2cm 厚さ0.9cm	

（林　　純）

4. 考 察

祇園寺・荘厳寺遺跡は、当初寺院跡等の存在が予想されていたが[18]、本調査で明らかとなった遺構は、竪穴式住居跡2基と溝跡1条であった。もとより、古代集落跡の一端を明らかにしたのみで、集落の全容や性格を把握することはできず、所謂集落論的アプローチも現時点では困難である。しかし、従来この地域では竪穴式住居跡は未発見で、本遺跡がその初見で、同地域の歴史的空白を埋めるものとして意義深いものである。ここでは、調査の成果を要約的に述べ、それに係る二三の問題につき考察を進めることとする。

まず、各トレンチの出土遺物について、その年代幅は6世紀後半から8世紀後半代のものであること。次に立地については、住居跡が自然堤防上にあり、自然堤防が現在の大路集落と重複していること、この2点から、集落の範囲、年代幅をおおよそ推定することができた。

竪穴式住居跡の構造と年代についてであるが、本調査で検出した竪穴式住居跡は、いずれも方形のプランを呈し、柱穴を各辺の対角線上に計4カ所ある所謂「方4型」[19]で、周溝を有し北壁中央にカマドを付設する。また、第2住居跡には貯蔵穴かと思われる大形土坑が見られた。平面規模は、第1住居跡が5.05m×4.8mで床面々積約24.2m²を測る。第2住居跡は5.8m×6.8mの床面々積39.4m²と大きく、第1住居跡のおよそ1.6倍であった。竪穴式住居跡南北の軸線は、第1住居跡がN－23°36′－E、第2住居跡N－42°30′－Eで、第2住居跡からわずかに東側へふっている。

年代については、遺物の項で詳説したごとく、第1住居跡と第2住居跡から出土する遺物は共に同様な諸特徴を備え、例えば須恵器杯蓋・杯身は陶邑古窯址群のTK209型式に属し、土師器甕は難波宮整地層下灰色粘土層出土のものに類似する。このことから7世紀初頭に位置付けられる。

このように、軸線に関しては若干向きを異にするが、第1住居跡と第2住居跡は同型式の土器を出土し、相互に約12m隔ることから、同時に存在していた可能性が濃厚である。住居平面積に関しては、第1住居跡と第2住居跡は同様なプランを呈しながらも、第2住居跡が第1住居跡の約1.6倍の床面々積を有している。この差異は、各住居跡居住者の集落内での地位的格差に起因するものか、居住者数の寡多によるのか、あるいはそれ以外かは不明である。ただ出土遺物を見る限り、第1住居跡から鉄鏃、第2住居跡から鉄滓とともに鉄製品が出土しており、特に、身分的な格差はないように思われる。

次に、カマドの構造についてであるが、検出した2基の竪穴式住居跡のいずれも、住居跡北壁の中央にカマドを付設していた。第2住居跡の遺存度は悪くただ焼土塊が広がっているだけであったが、第1住居跡は比較的良好で、本来の形状や規模をある程度知ることができた。遺構の項で詳説した通り、平面形は馬蹄形で天井部はドーム状で、カマド奥部に煙道がカマドの軸線に真直に取り付き、斜上方に伸びて住居跡壁面に接している。

そこで、これを他遺跡のものと比較してみると、大津市真野遺跡[20]の竪穴式住居跡は5世紀末～6世紀初頭のもので、カマドは間口70cm,奥行き1.1mの「ハ」字形を呈するもので、煙道はないようである。長岡京跡右京第12次調査[21]で検出されたSB1204は、5世紀後半～6世紀前半のもので、カマドは幅71cm,長さ96cmの馬蹄形で、内に石材と土器で支脚を作り、煙道は見られない。城陽市の正道遺跡[22]の竪穴式住居跡のカマドは、形態上3種類に分けられ、4号住居跡のカマドは馬蹄形を呈して、カマド全体が住居跡内に入る。13号住居跡のカマドも

馬蹄形を呈するがカマドの奥に煙出しがあり、その部分だけが壁外に作られ、カマド内に石の支脚がある。さらに1号住居跡のカマドは、隅丸の「コ」字形でカマドの奥半分が住居壁外に出る。カマド内に土器で支脚を作る。これらは全て6世紀末～7世紀初の時期である。やや地理的に離れるが、福岡県築紫野町の大曲り遺跡の1号住居跡のカマドは、最大幅96cm、奥行き1.1m、間口26cmで中央やや内側に張り出す方形で、煙道は短く壁外に出ない。7号住居跡のカマドも、幅97cm、奥行き64cm、焚口38cmで方形に近く、石材で支柱とし煙道は短く壁外に出ない。これらは6世紀代の所産である。同じく築紫野町黒坂遺跡34号住居跡は、6世紀中葉でカマドは、幅85cm、奥行き70cm、方形で奥部に煙道があり壁面に沿う。カマド内に土製支脚が見られる。長野県塩尻市の平出遺跡の3号及び14号住居跡は、壁を斜上方に溝状に掘り込んで煙道とし、壁より外へ1mばかり延びている。これも土器を支脚として使用している。また、最近高月町の井口遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴式住居跡が多数検出された。現在調査中であるため詳細な検討を加えていないが、カマドの構造にはいくつかのタイプが見られ、a)住居跡壁面中央に付設し煙道が見られないもの、b)住居跡コーナー寄りの壁面に付設し煙道を壁面に沿わせてコーナーまで延ばすもの、c)住居跡コーナー寄りの壁面に付設し煙道を壁外に50cm前後延ばすもの、などがある。

林博通氏は、出現期のカマドの検討を通じて、その基本的な構造は須恵器窯と類似することを指摘している。また、カマドと一概にいっても、それには時代差や地域差さらには竪穴式住居跡自体の構造によって、いくつかのタイプが存在することが知れる。今後、類例の増加をまって、改めて検討する必要があろう。

最後に、祇園寺・荘厳寺遺跡の性格付けであるが、遺跡の性格を明示するような特別な遺物や遺構は何ら出土していない。一見して、一般的な集落跡と何ら変りはない。しかし、仔細に検討を加えるといくつかの特徴を見い出すことができる。すなわち、第1住居跡からは実戦的な鉄鏃が出土しており、さらに、両住居跡から出土する土師器の甕は、この時代に通有で湖国特有の所謂「近江型長甕」が全く見られない。また、鏃内地方と北陸地方を結ぶ重要なルートであった北国脇往還道に近接し、和迩氏系の氏族であるといわれ、湖北地方の雄族である息長氏や坂田氏さらに阿那氏の本貫地に近いという地理的条件を考え合せると、在地的な一般集落跡と見るよりも、政治的ないし軍事的背景をもった非在地色の強い集落跡と見ることも可能ではなかろうか。

（林　純）

5.　おわりに

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡2棟を検出したのにとどまり、とうてい集落全容を知り得るものではなかったが、湖北地方において、古墳分布の濃密である当遺跡附近において、集落跡の発見は合回が初例であり、その意義は大きいものと考える。

（田中　勝弘）

註

1、「角川　日本地名大辞典25　滋賀県」角川書店　昭和54年4月による。

2、小江慶雄「滋賀県醍醐遺跡発見の縄文式土器」京都学芸大学学報5　昭和29年

3～5、昭和54年度に滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会によって発掘調査された。田中勝弘氏の御教示

による。
6、直木孝次郎、『大阪市大歴史学数室紀要第1冊』
7、丸山竜平、「昭和整備事業関係遺跡調査報告、浅井町岡の腰古墳」　滋賀県教育委員会　昭和40年
8、昭和51年度に北陸自動車道建設に伴い、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会によって発掘調査された。田中勝弘氏の御教示による。
9、田辺昭三、『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ、1966年
10、中村浩ほか、『大阪府文化財調査報告書第28輯、陶邑Ⅰ』　大阪府文化財センター、昭和51年
11、田中勝弘、「湖北地方の後期古墳の編年・一最近の調査例を中心に一」　近江地方史研究第三号、昭和51年
12、田中勝弘、「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書1、諸頭山古墳群の発掘調査」　滋賀県教育委員会　滋賀県文化財保護協会　昭和49年
13、中尾芳治ほか、『難波宮址の研究、研究予察報告第五第二部』、大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会、昭和40年
14、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告1、小墾田宮推定地・藤原宮の調査」、奈良国立文化財研究所学報第27冊、奈良国立文化財研究所 昭和51年
15、原口正三　『船橋Ⅰ』、平安学園考古学クラブ　昭和37年
16、田辺昭三ほか、『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団、滋賀県教育委員会、昭和48年
17、「藤原宮」、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書25冊、奈良県教育委員会　昭和44年
18、昭和40年度の『滋賀県遺跡目録』では、字名から寺院跡としている。
19、石野博信、「日本古代文化の探究・家・考古学から見た古代日本の住居」、社会思想社、昭和50年
20、松浦俊和、『大津市文化財調査報告書5、真野・神田遺跡』、大津市教育委員会、昭和51年
21、高橋美久二ほか、『埋蔵文化財発掘調査概報、長岡京跡昭和53年度発掘調査報要』、京都府教育委員会 昭和54年
22、高橋美久二ほか、『城陽市埋蔵文化財調査報告書、第1集、正道遺跡発掘調査概報』、城陽市教育委員会　昭和48年
23、伊藤玄三ほか、『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集、大曲り遺跡』福岡県教育委員会 昭和45年
24、松岡史ほか、『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集、野黒坂遺跡』福岡県教育委員会、昭和45年
25、大場盤雄ほか、『平出』、平出遺跡調査会、昭和30年
26、昭和54年度より国道365号線バイパス建設に伴い、発掘調査を実施しており、現在継続中である。
27、林博通、「小江慶雄先生還暦記念論集・水と土の考古学、カマド出現に関する二・三の問題」、小江先生還暦記念論集刊行会、昭和48年
28、16と同じ
宮成良佐、『宮司遺跡・十里町（字上五町地区）遺跡調査報告書』、宮司遺跡発掘調査団・長浜市遺跡発掘調査団・長浜市教育委員会、昭和52年

第３章　高島郡安曇川町上古賀遺跡

1. はじめに

上古賀遺跡は、高島郡安曇川町大字上古賀字里ノ内・上井および下井の標高約130mをはかる水田一帯に所在する。遺跡のすぐ南には、湖西最大の安曇川がゆるやかに東流しており、この安曇川によって形成せられた河岸段丘上に遺跡が立地するわけであるが、現在約150戸におよぶ上古賀集落もまた同様の地形上に立地することがわかる。

さて、上古賀遺跡の発掘調査を実施する契機になった広瀬地区のほ場整備事業は、昭和49年からはじめられ、すでに、下古賀地区では完了して引きつづいて昭和53年からは上古賀地区を施行する予定に組み込まれていた。ところが、『滋賀県遺跡分布地図』（1975、滋賀県教育委員会）に見られるごとく周知の遺跡として上古賀遺跡が存在しているので、事前に遺跡の範囲ならびに性格等について確認する必要が認められた。調査は、昭和53年7月5日から12月11日まで2時期に分かれて実施し、おもに今回の整備事業で遺構の削平される地点を後半に、重点的に行った。

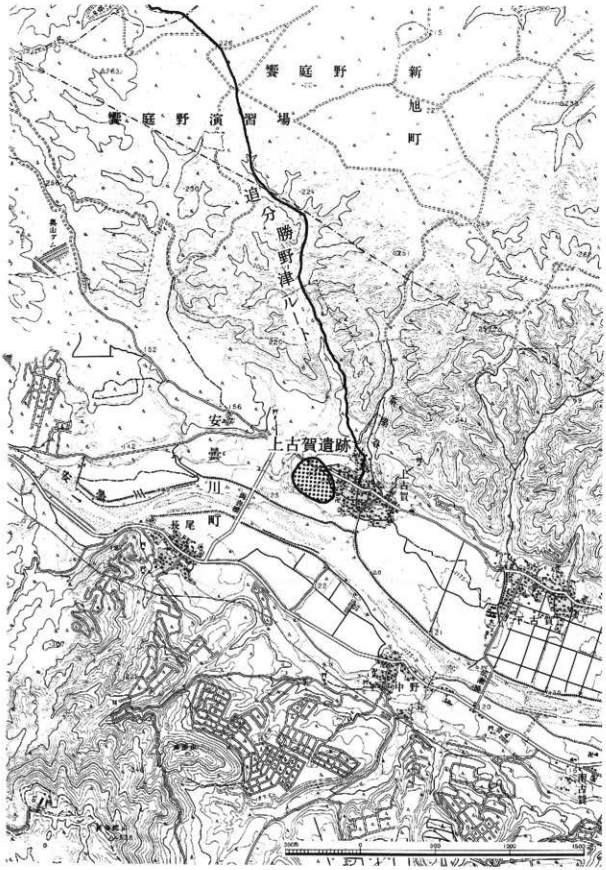
調査を実施するにあたっては、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明・安曇川町教育委員会社会教育課技師中江彰の両名が担当し、安原登志蔵氏をはじめとする上古賀地区の有志の方々に、作業員として御協力をうけ、さらに遺構の実測作業の際には、柏田三枝子・酒井和子・山口順子・藤野道成の4氏の全面的な援助を受けることができた。ここに記して厚く感謝したいと思う。なお、本文の執筆ならびに編集等はすべて中江が行った。

2. 位置と環境

安曇川の河岸段丘上に立地する上古賀遺跡は、それの東に接する上古賀の集落とともに周辺の水田よりは幾分高いことが知られる。というのは、饗庭野洪積世台地から安曇川に流れ出る茶屋谷川と天川の絶えざる土砂の堆積作用によって、この両河川にはさまれた部分がちょうど扇状地のごとき地勢に変貌せられたためで、したがってこのような水はけのよい土地に古くから集落が営まれていたとしても、不思議ではない。

それでは、いったいいつ頃から現在われわれが見るような規模の上古賀集落が生まれたのであろうか。まず、近世における上古賀村は若狭国小浜藩酒井氏の領地としてその管轄下にはいるが、『高島郡誌』(1927、高島郡教育会）によると、江戸中期の宝暦9（1759）年の人家は156軒をかぞえ、文化4（1804）年の人家は170軒で人口839人をかぞえるとあり、さらに江戸後期の天保13（1842）年3月16日の火事でおよそ70～80軒が焼失したということから、少くなくとも近世全般を通じて160軒前後の規模の集落であったことが容易に知り得る。

その次の中世の上古賀村はどのようであったかは、これを窮い知る史料が現在のところ見つかっていない。ただ、『朽木文書』のあちこちに「広瀬南庄」、「北古賀上荘」、「北古賀下庄」などという荘園名が散見できる程度で、それ以上に具体的な戸数や人口等は記されてはいないのである。ここに北古賀というのは、安曇川の南岸にある南古賀・中野・長尾に対して、現在の大字上古賀と下古賀とを合せてその当時は北古賀と呼び、大字上古賀を北古賀上荘といい、そうして下古賀を北古賀下荘（庄）といったのである。「北古賀」といういわば中世の荘園名は近世に至ってもなお使用され続けられたと思われ、じじつ上古賀遺跡の北西に位置する熊野神社の本殿の前に建っている石燈籠に、「北古賀村社中」が寄進したことが陰刻されている。熊野神社は、式内社の1つにかぞ



第1図　遺跡位置図

えられ、上古賀村と下古賀村の氏神としてまつられているのである。

要するに、中世の上古賀は、古賀荘または広瀬荘の中の北古賀上荘と呼ばれていて、京都のいくつかの有力な寺院領に、あるいは皇室領に、あるいは朽木氏の領地になったりしたわけである。

古代の上古賀に関する文献は、全くないといっても過言ではない。そうした未解明、未研究の中にあって、上古賀がもしも重要な歴史的役割をはたしていたものがあったとするならば、それはまず何よりも若狭方面からのありとあらゆる物資の流通という交通の要衝として、大きな機能をもっていたことがあげられる。しかもその重要度は中世に至ってもより一層増してくるが、近世になると船等の交通機関の発達に伴ってだんだんと減少するのである。

いったいに、若狭・北陸と京都を結ぶ交通路[注1]は、琵琶湖の西岸に沿って走る西近江路がことに有名であるが、これとは別に、小浜から保坂を通って今津まで行く若狭街道が石田川流域に沿って走っている。今津まで運ばれてきた物資は、西近江路を通過するかまたは今津の港から琵琶湖の水運を利用して大津まで運ばれたと思われる。

これまで、小浜からの交通路はこの若狭街道（九里半街道）のみが重要視されてきたわけであるが、むしろ途中の追分（今津町）からいっきに饗庭野台地を越えて上古賀に出、さらに南市（安曇川町）あたりまで行って西近江路に合流する方が、若狭街道に較べて距離は相当に短いのである。最近、高島町鴨遺跡において平安期、貞観15（873）年の木簡が発見され、この木簡は若狭の滋敷郡から米を送ったということの書かれた内容のものであって、もしかするとこの木簡も饗庭野を越えてもたらされのではなかろうか。

なお特記すべきは、天川の上流すなわち天川谷において平安時代の糸切り底の有する須恵器が1点発見せられたが、それの磨滅がいちじるしいので、恐らく原位置を保っていたものとは考え難い。

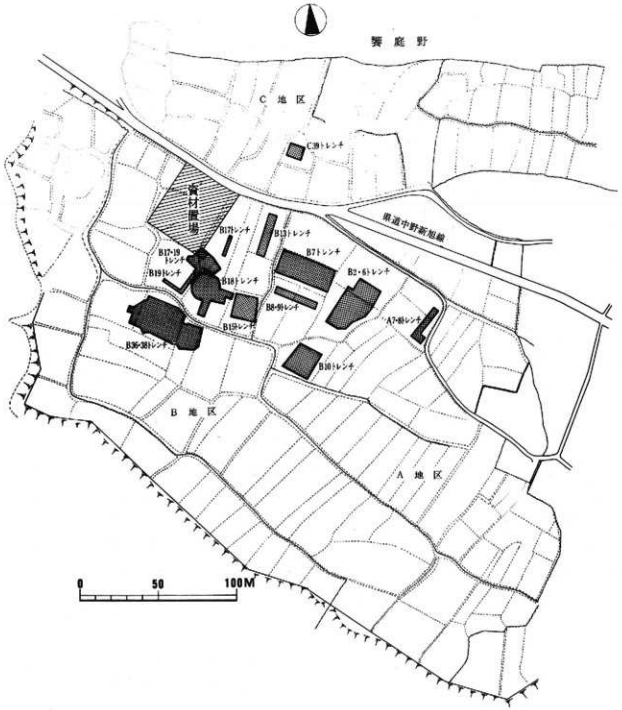
3．調査経過

発掘調査は、第1節に述べたように全体として2時期に分れて行った。すなわち、7月における夏季は場整備事業の施行に伴う事前調査と、10月から12月にかけて実施した冬季施行に伴う事前調査とである。は場整備対象面積は、約190ヘクタールとじつに広く、そのために調査はまず水田一筆ごとに、そのほぼ中央に試掘坑（2×2m）を設定し、バックホーを導入して遺構ならびに遺物包含層等の広がり状況を確認することからはじめた。

（1）A 地 区

ちょうど上古賀集落西の隣接地にあたり、夏季施行の対象地域でA地区と呼ぶ。試掘坑は全部で31をかぞえる。各試掘坑の基本的層序は、第1層（耕土）・第2層（床土）・第3層（砂礫層）で、このうち第3層が地山に該当するのであるが、A44等では暗茶褐色土が第3層として構成し、したがって第4層に地山があるわけである。また、A40・41・45等の安曇川附近では、河原石の礫層のみで地山を形成する所もある。全般として、床土（客土）は少なく耕土の下はすぐに地山が床土になっている。

遺物は、12ケ所の試掘坑において検出された。まず須恵器の高台付の杯は、A 8・13・20・21・44等において検出され、同じく須恵器のつまみ付の杯蓋は、A 8・19・22・23において検出された。なおA21では、長頸瓶も検出された。土師器（甕等）は比較的小さい破片で12ケ所とも検出されている。またA20では白磁が、A44では青磁の破片が1点づつ検出され、同じくA44でも弥生土器と推定される甕と土錘2点が検出された。これらの遺物の多くは、第1層および第2層において検出されたものばかりで、そうして平安時代の須恵器がその大半を占



饗庭野
C 地 区
C39トレンチ
資材置場
B17トレンチ
B13トレンチ
B7トレンチ
B17・19
トレンチ
B19トレンチ
B18トレンチ
B2・6トレンチ
B8・9トレンチ
B15トレンチ
A7・8トレンチ
B36・38トレンチ
B10トレンチ
B 地 区
A 地 区
0
50
100M

第2図 トレンチ配置図

めるのである。

次に、遺構（柱穴）の検出されたのはA８のみであるが、北接のA７とA８との水田のレベルは同一ということから、トレンチを設定し平面調査に移った。その結果、多数の柱穴が検出され、規模等はわからぬが少くとも数棟の掘立柱建物があったことが判明した。

（２）Ｂ 地 区

冬季施行区域をＢ地区・Ｃ地区そしてＤ地区の３地区に分けて呼ぶ。Ｂ地区は、Ａ地区の隣接地から天川までを該当する。この地区の試掘坑は全部で41ケ所をかぞえ、そのうち遺構ならびに遺物包含層の検出されたのは11ケ所であるが、B13・18・38等にみるようにＢ地区の北半分に遺構が集中していることがわかる。それ以外にも何ケ所かにおいて若干の遺物が検出された試掘坑もある。

遺構等の検出に伴って、設定したトレンチは全部で10本である。おもな遺構としては、古墳７基・竪穴住居跡６棟・掘立柱建物２棟以上・中世古墓３基・土坑６であるが、その内容は次節で詳しく述べる。

（３）Ｃ 地 区

県道中野新旭線と饗庭野にはさまれた地域をＣ地区と呼ぶ。試掘坑は全部で41をかぞえる。B42では、柱穴が第２層の地山を掘り込んで数個検出されたので、バックホーにて拡張したが、まとまった建物跡にはならなかった。B34・41・40の３ケ所では、須恵器の杯身等が検出されたが、それ以外の試掘坑では全く遺物の出土はみられない。

B27・28・31・32等の水田レベルは周辺に較べてもっとも低く湿田を形成し、それの耕土層は所謂すくも層が１ｍ以上にわたって堆積する。なお、このような状況はＡ１・Ａ２でも確認されている。

（４）Ｄ 地 区

Ｄ地区は、県道中野新旭線の西にあたる。試掘坑は全部で47をかぞえる。D13・14・17・18・21・39の６ケ所において、わずかに須恵器・土師器の小片が第１層（耕土）が検出されたのみである。

4．遺 構

検出された遺構のおもなものはＢ地区に集中し、それらは古墳７基・竪穴住居跡６棟・掘立柱建物２棟・中世古墓３基・土坑６等である。しかしながら、それ以外にも建物跡としては構成し難いような多数の柱穴（ピット）も見られる。遺構は、耕土・床土さらには暗茶褐色土の遺物包含層を除去した段階の、地山を掘り込んだ状況で検出されるが、なお地山が礫層のみで形成する土地においては、きわめて遺構は少いといえる。

（１）古 墳

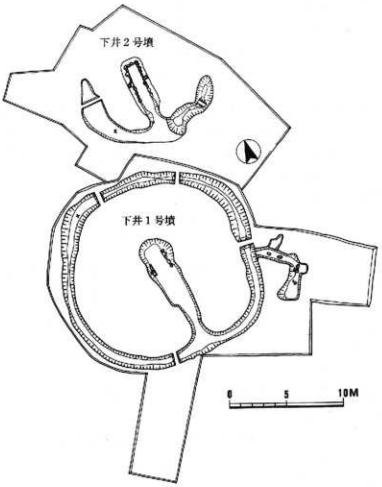
検出された古墳７基の封土（墳丘）は、いづれもほとんど完全なまでに削平せられており、その状況は周濠と主体部である横穴式石室の一部が残存するものと、主体部の竪穴式小石室のみが残存するものとの２種類にわけられる。これら横穴式石室や周濠等の遺構は、黄色粘質土を主成分とした地山を掘り込んでつくられており、その地山の上面に墳丘としての封土を設けられていたものと推定される。

封土がいったいいつ頃に削平されて、今日われわれが見るような整然とした水田に変貌したかは、それを断定でき得る史料がないので何とも言い難いが、少くとも中世の中頃までには古墳を削平して開墾したことが、古墳の上層の遺物包含層によってうかがえるのである。なお、これらの古墳は、土地の小字名を取って下井古墳群と

呼ぶことにしたい。

〔下井1号墳〕　墳丘の裾をめぐる周濠は、幅1～1.5m、深さ20～70cmの断面V字形を呈するが、溝底では幅20cm前後の平坦面をもつので、所謂完全なV字形ではない。周濠の深さは、北辺附近がもっとも深くて、南辺の石室入口に近づくにつれて次第に浅くなり、そうして10cmほどの深さで横穴式石室の掘り方に連続する。周濠の残存によって本古墳は、直径15m、周濠を含めると17mのやや隅丸方形的な円墳であることがわかる。しかして、墳丘の高さは、周濠のみの遺構からでは推定し難いが、少くとも地山面から2～3m以上は有していたものと思われる。

周濠内の出土遺物としては、須恵器の杯身1、長頸壺1、土師器の長甕1（×印）がある。



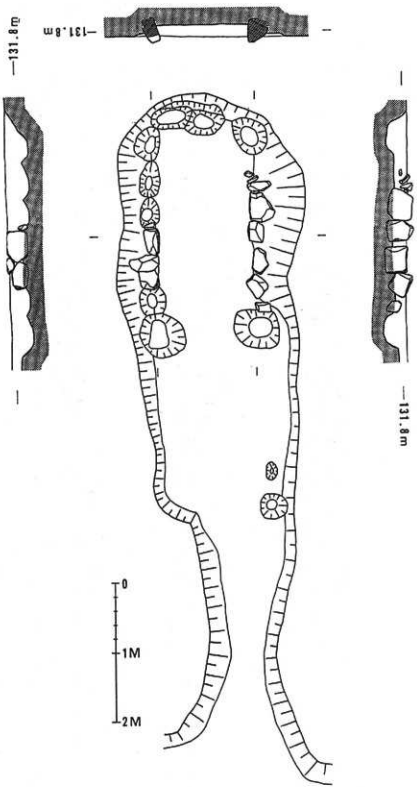
第3図　B17・19トレンチおよびB18トレンチ平面図

主体部（横穴式石室）の掘り方は、幅2.65m、長さ6.2mをはかる、コの字状平面である。横穴式石室は、主軸を南北に向けて南に開口する。主体部は発掘当初、多数の河原石が乱雑な状態で検出されたが、それらの石は暗茶褐色土中の浮いた状態であったので除去していくと、最終的に側壁の基底石7個が原位置を保っていたわけである。基底石は、その3分の1を地山に掘り込んで据えつけている。この基底石の抜取り跡によって、両袖式の横穴式石室であることが判明するとともに、玄室ならびに羨道の規模も知ることができる。すなわち、玄室の巾1.35m、奥行2.6m、羨道の巾0.75m、長さ3.0mである。奥壁の基底石は3個、両側壁はそれぞれ7個をかぞえる。

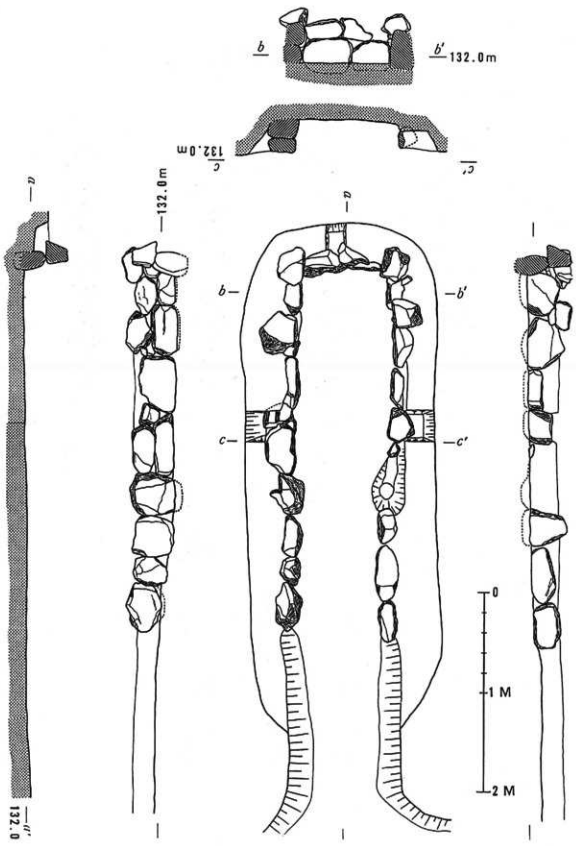
出土遺物としては、玄門附近の床面で長頸壺1、奥壁の東よりの側壁附近で杯身3、杯蓋1がある。なお、玄室の床面には敷石等の施設は見られなかった。

〔下井2号墳〕　1号墳の北に隣接し、ちょうどB19とB18の境界畦畔の下に位置する。墳丘袖をめぐる周濠は、巾1.1～2.1m、深さ15～60cmの断面U字形を呈するが、1号墳のそれとは違って全周することはなく、南半分のみ見られる。これはもともと周濠が南半分だけ掘削せられたのではなくて、中世における開墾の際にゆるやかな勾配をもつ土地を水平に削平されたため、北半分の周濠が消滅してしまったものであろう。

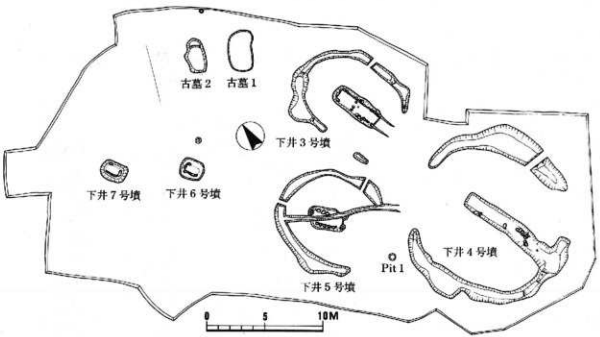
直径10m前後の円墳で、南に開口もつ横穴式石室である。石室の主軸は1号墳と同じ。掘り方は、巾1.95m、



第4図　下井1号墳横穴式石室実測図



第5図　下井2号墳横穴式石室実測図



第6図　B36・38トレンチ平面図

長さ5mのコの字状平面である。主体部の横穴式石室は、両袖式の平面プランで、河原石を利用して構築し基底石は横積みしている。石室の規模は、玄室の巾95cm 、奥行2.1mであり、羨道の巾80cm 、長さ1.6mである。

出土遺物は玄室から副葬品として、須恵器の壺1、長頸壺1、瓶1、高杯1、杯身2・杯蓋1の7点が検出され、また周濠（×印）からは大型の須恵器・甕1がこなごなの状況で検出された。

〔下井3号墳〕　1号墳から南西25mのところに位置し、B38の北東隅にあたる。B38の水田レベルは、B18と較べて20cm ほど低くなる。

墳丘の裾には巾60cm 、深さ10cm の断面U字形の浅い周濠がめぐる。しかし周濠は全周してはおらず、南辺の羨門部附近および西辺の一部には見られない。直径7.6～9.8mのやや楕円形をした円墳であるが、封土は1、2号墳と同様に全く削平されている。主体部の横穴式石室は、その主軸を少しく西に振った南開口の両袖式平面プランである。封土の削平とともに石室も基底石を残すのみで、上部構造（天井石等）は知り得ない。石室の規模は、玄室の巾82cm 、奥行2.93mであり、羨道の巾75cm 、長さ1.1mである。

なお注目すべきは、羨門部が約30cm 落ち込んで石室の床面を形成している点で、このような例は3号墳のみである。さらに、玄室の中央において、2個の扁平な河原石が側壁に接して左右対称的に検出されたが、これは恐らく棺台として利用せられたものであろう。副葬品の須恵器9点（杯身4・杯蓋4・平瓶1）が、棺台のすぐ南においてまとまって検出された。

〔下井4号墳〕　3号墳の南10mのところに位置しており、B36の北半部に該当する。B36の水田レベルは、B38と較べて25cm 低くなる。

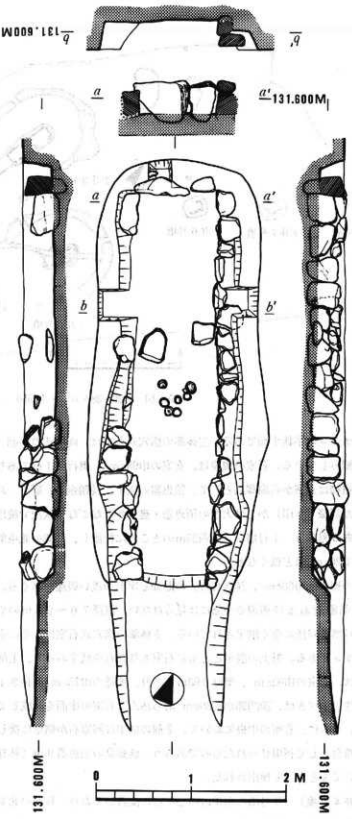
直径14.5mをはかる円墳であるが、封土は削平されて全く残存していない。周濠は、巾1.7～4.3m、深さ40

cm の断面U字形を呈するが、1号墳のごとく全周をめぐらされておらず、北西部と南東部が対称的に途切れていて、多分に墓道の役割を果したものと思われる。主体部の掘り方の規模は、幅3.3m、長さ14mであるが、横穴式石室はことごとく攪乱をうけていて、原位置をとどめる石は1つも確認されなかったことから、石室の規模・構造等は知り得ない。なお、石室の羨道と周濠の2ケ所（×印）から、土師器の甕1、須恵器の甕1、坩1、杯身2が出土した。

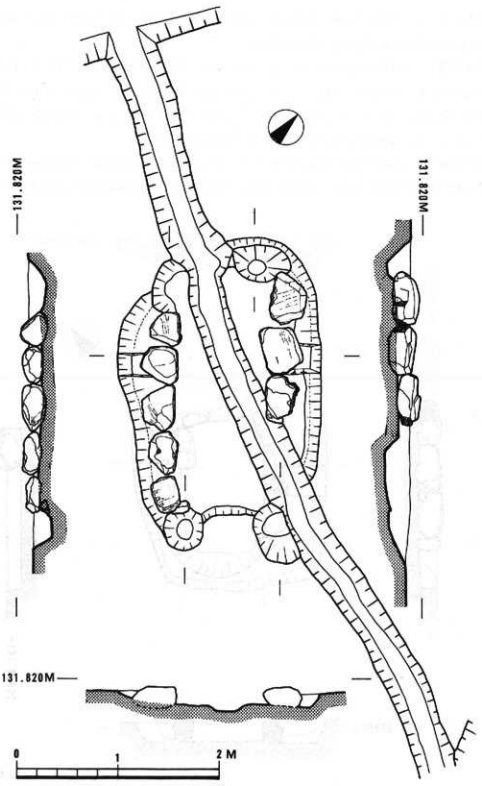
〔下井5号墳〕　3号墳の南西隣りに位置する。直径9.2mの規模を有する円墳で、その中央には主体部の横穴式石室がある。周濠は、幅1～3.1m、深さ25 cmをはかり断面U字形を呈するが、南辺には見られず墓道として利用したためと思われる。

横穴式石室は、側壁の基底石9個のみ原位置を保っていただけであるが、石の抜取り跡から南東に開口する両袖式平面プランであることがわかる。石室の規模は、玄室の巾90cm 、奥行2.2mであり、羨道の巾50cm で長さは不明。なお注意すべきは、玄門部において玄室の床面が羨道に較べて約10cmの落差をもっていることであろう。

円墳の中央を東西に走る溝（巾50cm、深さ20cm）が横穴式石室に付属する排水溝のような機能をもつものかは、現在のところ知り得



第7図　下井3号墳横穴式石室実測図



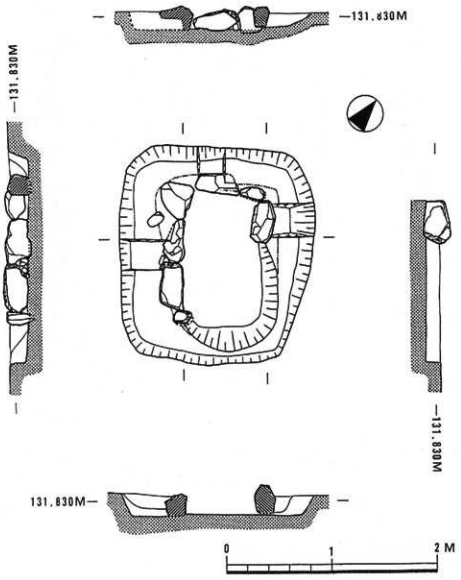
第８図　下井５号墳横穴式石室実測図

ない。

出土遺物としては、石室より副葬品の須恵器・杯身1が、また周濠（×印）の上層において須恵器・杯身1、土師器・小皿10数個・灰釉陶器・椀1が検出された。

〔下井6号墳〕　5号墳の北西14mのところにあり、同じくB38のほぼ真ん中に位置する。長辺2.05m、短辺1.85mの楕円形の掘り方の中に、河原石を使用した竪穴式小石室をもうける。石室は、基底石7個のみ原位置を保っており、幅64cm、長さ112mの規模をはかる。これによって封土は、石室の上部石組とともに開墾の際に削平されてしまったことが推察できよう。石室からの出土遺物はなかった。

〔下井7号墳〕　6号墳の西北西9mの位置にある。長辺2.35m、短辺1.65mの楕円形の掘り方の中に河原石を使用した竪穴式小石室をもうける。石室は、基底石5個と床面に50数個の数石のみ原位置を保っており、幅57



第9図　下井6号墳竪穴式小石室実測図

cm はいり込んでいる。床面には、2個のピットと焼土が検出された。この焼土面より須恵器・横瓶1が出土した。

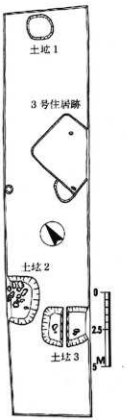
〔6号住居跡〕 B2・6トレンチの中央やや北よりに位置し、1号住居跡の東30mのところにある。一辺の長さ5.8～6.2mの方形プランの住居跡であるが、南東隅は5号住居跡と同様に内側へはいり込んでいる。床面までの深さは30cmをはかるが、柱穴等は検出されなかった。

出土遺物は、土師器の細片のみで時期判定が難しい。

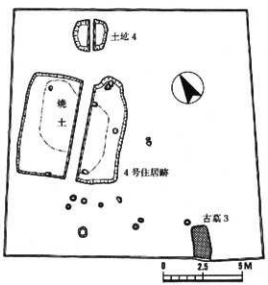
（4） 掘立柱建物

〔建物1〕 B17トレンチの南西隅に位置する。2間 × 4間の規模の建物跡で、主軸は1号住居跡とほぼ同一である。

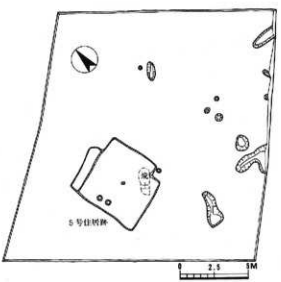
〔建物2〕 同じくB17トレンチにあり、2間×2間以上の規模の建物であるが、全形を知り得ない。主軸は、むしろ2号住居跡と同一であることが知られる。



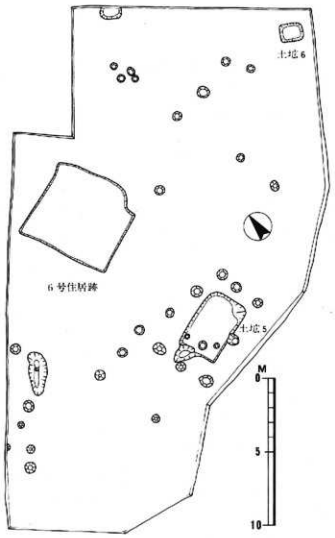
第12図 B13トレンチ平面図



第13図 B15トレンチ平面図



第14図 B10トレンチ平面図



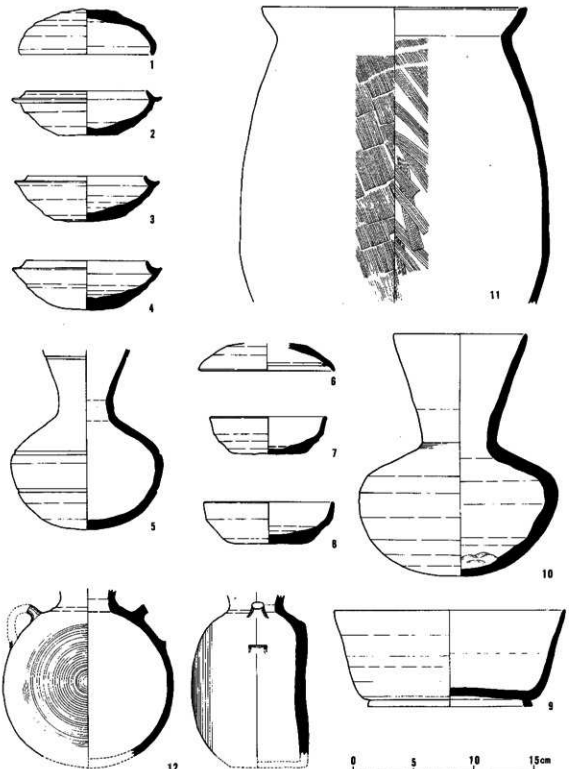
第15図　B２・６トレンチ平面図

5．遺　物

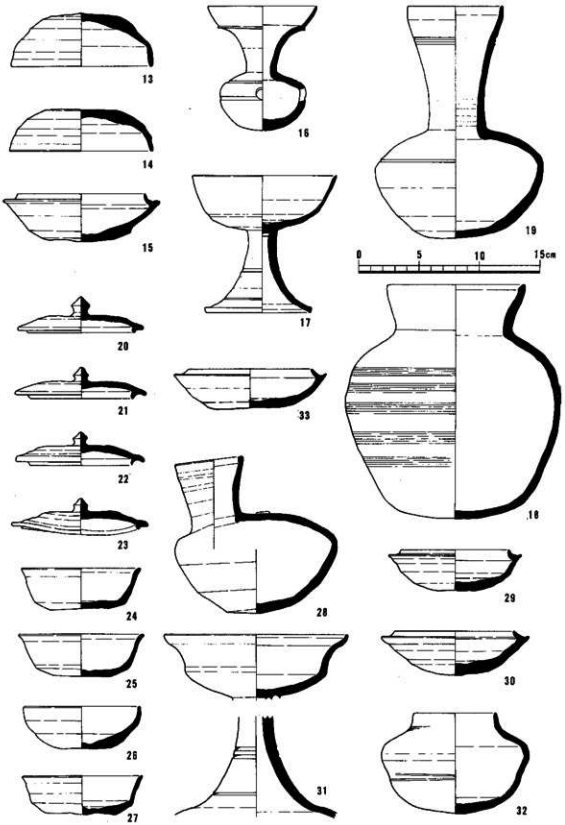
おもな出土遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁・白磁等の土器類と瓦・土錘等の土製品とがあり、その時期もおよそ３世紀から12～３世紀まで断続的ではあるが多種にわたって検出されたわけである。そのなかでも、もっとも量的に多いのは何といっても須恵器と中世の土師器・小皿である。

（１）　弥生土器

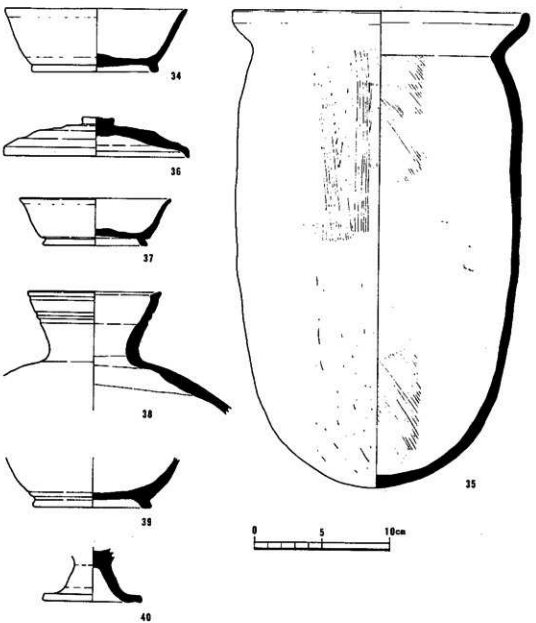
A44試掘抗の遺物包含層において、わずかに１点検出された。暗茶色を呈する甕で、胎土中に石英粒等多く含む（図版36－５）。



第16図　古墳出土土器実測図（その1）



第17図　古墳出土土器実測図（その２）



第18図　竪穴住居跡出土土器実測図

（2）　須恵器

古墳ならびに竪穴住居跡、遺物包含層などで出土を見た。

〔杯身A〕体部（底部）が丸く、口縁部にたちあがりを有する形態。下井1号墳・2号墳・4号墳・5号墳の横穴式石室出土土器がこれらに該当する。これらのたちあがりは短く、大きく内傾し、そうして端部で少しく上方に曲げている点に、共通した特徴がみられる。暗灰色を呈し焼成は堅緻であるが、1号墳出土の3点（図版－4～6）はやや軟である。

〔杯身B〕　平底で、たちあがりは消滅して体部および口縁部が外上方へのびる形態である。下井3号墳の横穴式石室出土土器（図版－6～9）がこれに該当する。比較的小形で暗灰色を呈し焼成良好であるが、（8）のごとく底部がまだ丸底に近いものも見られる。

〔杯身C〕　Bの底部に所謂高台を付けた形態で、1号住居跡（第19図34）・4号住居跡をはじめ試掘坑やトレンチの遺物包含層から、比較的多く出土している。（34）の体部は外上方へほぼまっすぐのび、高台は底部と体部との境近くで垂直に付く。1号墳周濠の上層において出土した土器（第17図9）は、青灰色を呈し、体部と底部との境界は明瞭で、体部はほぼ直線的に外上方に長くのびる。

〔杯蓋A〕天井部につまみをもたなくて、杯身Aとセットをなしている形態で、下井1号墳・2号墳の出土土器がこれに該当する。この3点（第18図13、14　第17図1）の色調は杯身と同様の青灰色を呈し、焼成は堅緻である。天井部と口縁部との区別はつけにくく、全体的に丸くつくられ、口縁端部の内面に内傾する面があるものと、そうでないものとの2種類が見られる。

〔杯蓋C〕　口縁部の内面にかえりをもつ形態で、所謂椀形の杯身Bとセットをなす。下井3号墳の出土土器4点（第18図20～23）がこれに該当し、青灰色を呈し堅緻な焼成である。比較的小さい口径であるが、天井部には宝珠形のつまみを付けていることが1つの特徴であろう。

〔壺〕　1号墳から1点（第17図5）、2号墳から2点（第18図18・19）、4号墳から1点（第18図32）が出土した。2号墳の（18）は、やや広口の濃茶色を呈し、自然釉が口縁部から体部の上半分にかけて付着している。体部には横方向に平行なハケ目を施す。器壁もあつく、全体的に重量感のある土器である。（19）は、淡青灰色を呈し、肩のある体部にゆるやかに外上方へのびる長頸部をもつ。口縁端部はまっすぐ上方へのび、丸くおさめる。口頸部に2条の沈線があり、さらに体部と肩部との境にも1条の沈線がみられる1号墳の（5）は、青灰色を呈し、口頸部が破損しているが、ほぼ2号墳（19）のそれと器形が似ており長頸壺といえよう。なお、体部と肩部との境に、1条の沈線がはいる。

4号墳の（32）は、短頸壺でいわゆる坩と呼ばれるもので、青灰色を呈し、体部にカキ目調整をほどこす。短い口頸部はやや内傾し、端部を丸くおさめる。

〔高杯〕　2号墳出土土器（17）は、薄青灰色を呈し、焼成はやや軟質である。杯部は無文で、口縁部との境界はなくゆるやかに外方へひろがる。脚部には透しはなく、筒部が裾部になる所に1条の凸線がみられ、脚裾の端部は上下に肥厚させている。

4号墳出土土器（31）は脚部のみで全形を知り得ないが、脚部の中位に2条の凹線が施されている。

〔鉢〕　青灰色を呈し、焼成は堅緻である。頸部は細長くのび、頸部と口縁部の境は凸帯を施すことによって明瞭にしている。体部には2本の凹線を施し、その間に円孔をうがつ。

〔平瓶〕　全体的に灰白色を呈するため一見灰釉陶器を思わせるような色調で、口縁部と胴部上半分に淡緑色の自然釉が付着している。体部上面の中央には、小さな円形の粘土粒1個を貼り付けており、底部はヘラ削りが顕著にみられやや尖り気味である。陶色TK 217の平瓶にほとんど類似する。（第18図28）

（3）土師器

〔甕〕　1号墳周濠内出土土器（第17図11）は黄色を呈し焼成は軟である。長細い胴部にくの字に曲げた口縁部がつき、端部は簡単に丸くおさめる。器面はハケ目仕上げである。外面および底部に煤などの付着はない。

1号住居跡出土土器（第19図35）は、1号墳のそれと較べて胴部はやや細長くスマートな器形で、口縁部はく

表1　土器実測図一覧表

挿番	図号	図版番号	器種	器形	出土地点	計測値(cm) 口径	高さ
16 － 1		35 － 3	須恵器	杯蓋 A	1号横・横穴式石室	11. 0	3. 7
16 － 2		35 － 4	〃	杯身 A	〃	10. 1	3. 7
16 － 3		35 － 6	〃	杯身 A	〃	9. 8	3. 8
16 － 4		35 － 5	〃	杯身 A	〃	10. 0	4. 0
16 － 5		35 － 1	〃	長頸壺	〃		(14. 8)
16 － 6			須恵器	杯蓋 B	1号墳・周濠(上層)	11. 1	(2. 3)
16 － 7			〃	杯身 B	〃	9. 5	3. 1
16 － 8			〃	杯身 B	〃	10. 7	3. 5
16 － 9			〃	杯身 C	〃	19. 0	8. 0
16 － 10			〃	長頸壺	〃	10. 9	20. 1
16 － 11		36 － 1	土師器	甕	〃	21. 9	(24. 5)
16 － 12			須恵器	提瓶	7号墳・竪穴式小石室		(14. 0)
17 － 13		33 － 6		杯蓋 A	2号墳・横穴式石室	11. 6	4. 4
17 － 14		33 － 5	〃	杯蓋 A	〃	11. 8	3. 5
17 － 15		33 － 7	〃	杯身 A	〃	10. 5	4. 0
17 － 16		33 － 3	〃		〃	8. 9	10. 3
17 － 17		33 － 4	〃	高杯	〃	11. 8	11. 3
17 － 18		33 － 1	〃	壺	〃	11. 3	19. 3
17 － 19		33 － 2	〃	長頸壺	〃	7. 8	19. 2
17 － 20		34 － 2	須恵器	杯蓋 B	3号墳・横穴式石室	8. 8	3. 0
17 － 21		34 － 3	〃	杯蓋 B	〃	8. 5	2. 6
17 － 22		34 － 4	〃	杯蓋 B	〃	8. 4	2. 8
17 － 23		34 － 5	〃	杯蓋 B	〃	9. 7	3. 0
17 － 24		34 － 6	〃	杯身 B	〃	9. 7	3. 4
17 － 25		34 － 7	〃	杯身 B	〃	10. 3	3. 5
17 － 26		34 － 8	〃	杯身 B	〃	9. 6	3. 5
17 － 27		34 － 9	〃	杯身 B	〃	9. 9	3. 3
17 － 28		34 － 1	〃	平瓶	〃	5. 6	13. 0
17 － 29		35 － 7	須恵器	杯身 A	4号墳・周濠	8. 9	3. 4
17 － 30		35 － 8	〃	杯身 A	〃	9. 9	3. 7
17 － 31		35 － 4	〃	高杯	〃	15. 0	(13. 3)
17 － 32		35 － 2	〃	短頸壺	4号墳・横穴式石室	6. 7	8. 4
17 － 33			須恵器	杯身 A	5号墳・横穴式石室	10. 1	3. 3
18 － 34		36 － 4	須恵器	杯身 C	1号竪穴住居跡	13. 4	4. 7
18 － 35		36 － 2	土師器	甕	〃	21. 7	35. 4
18 － 36			須恵器	杯蓋 C	2号竪穴住居跡	13. 6	2. 9
18 － 37			〃	杯身 C	〃	11. 1	3. 5
18 － 38		32 － 3	須恵器	平瓶 (?)	5号竪穴住居跡	9. 8	(8. 8)
18 － 39			〃	杯身 C	4号竪穴住居跡		(3. 7)
18 － 40			〃	高杯	5号竪穴住居跡		(3. 9)

〔備考〕　計測値欄カッコ内数字は現存値を示す。

の字に曲げて外方へのびる。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。器壁の内外面とも、ハケ目を施す。胴部および底部には、煤が付着しており、実際にこの甕を使用したことが知られる。

（4）、瓦・土製品

〔瓦〕　2点ともA7・8トレンチの掘削の際に、排土の中から検出されたもので何らかの遺構に伴った出土ではない。平瓦の破片と思われ、黄色を呈し堅緻な焼成である。厚みは1.5～2.0cmをはかり、凸面には平行タタキ目を縦横にみられ、凹面には布目痕がみられる。年代不詳。[注2]

〔土錘〕　A44試掘坑から2点（図版36－8）、1号住居跡から1点検出された。いづれも赤褐色の土師質で、真ん中に管をもうけている。長さ4～6cmのものである。

6．結　び

以上、こんどの発掘調査によって得られた成果の概要を記した。そこで、各遺構の特徴点についてもう一度触れてみて、そうしてそれぞれの時期年代を伴出遺物を通じて考察することにしたい。

まず、7基の古墳からはいっていく。1号墳・2号墳・3号墳・4号墳ならびに5号墳は、すでに封土が削平されているものの、周濠の残存によってすべて円墳であることがわかり、そしてその周濠自体も1号墳のごとく全周をめぐっているものと、他の4基の古墳のごとく意識的に一部において周濠をもうけずに、墓道のような役割を有したものとの2種がみられる。6号墳・7号墳は、前述の古墳の主体部といささか異なっており、さらに周濠が検出されなかったので、もともと封土がなかったものと思われるが、なお長浜市諸頭山3号墳の調査例[注3]から推測すると、ごく小規模な円墳であったと思われる。

主体部についてであるが、1号墳から5号墳まではすべて河原石を利用した横穴式石室で、その河原石をみるとまったく人工加工をしておらず、扁平な面の有する河原石を壁面として構築したのである。これらの河原石は、恐らく遺跡のすぐ南を流れる安曇川から採取してきたのであろう。なお、2号墳と3号墳の基底石は、ほとんど縦積みにし、1号墳と5号墳におけるわずかな基底石は横積みの状況で検出されたが、この2基も恐らくは縦積みがほとんどであったろう。

4号墳をのぞく4基の横穴式石室は、地山を10～30cmほど掘り込んで床面に置かれた基底石が残存するだけで持ち送り等の石室の上部構造がいったいどのようであったかは、知りがたい。ただし基底石ならびに基底石の抜取り跡の精査によって、羨道と玄室の規模がわかり、さらに両袖式の平面プランであることもわかる。4号墳の主体部は、ほとんど撹乱された状況で検出されたため、横穴式石室の規模・構造はわからないが、石室の主軸が3号墳・5号墳のそれとほぼ一致しており、南南東の方位に開口部がもうけられている。

床面には、敷石や排水溝等の諸施設はないが、特に注意をはらうべきは3号墳の玄室の中央部やや側壁よりに、棺台として利用せられたと推定されるよく似た扁平な河原石が2個検出されたことである。このような横穴式石室に棺台のごとき遺構の見られる例としては、志賀町石神1号墳[注4]・宝塚市雲雀山東尾根古墳群（A支群）の11号墳[注5]がある。石神1号墳は、志賀町小野の丘陵東斜面にあって両袖式の南南東に開口する横穴式石室で、石材も規模も大体下井3号墳のそれとよく似ている。棺台と思われる石材は、割石5個、自然石1個の計6個が棺を玄室の真ん中に置かれる状態で検出された。追葬はなく単次葬で、築造年代は7世紀前半の中葉という。雲雀山東尾根古墳群の11号墳は、無袖式の南に開口する横穴式石室で、規模は同じく下井3号墳に似ており、問題の棺台

は扁平な河原石4個を奥壁近くに棺台置いた状態で検出されている。棺台から玄関に向って50cmの床面上で須恵器の宝珠つまみのある杯蓋1点が出土しており、追葬はなく単次葬で7世紀前半の築造であるという。ここではわずかに2基の古墳のみ取り上げたが、このような古墳時代後期における棺台のある例は、もっとあちこちに多くあるに違いない。なお、3号墳の掘り方と基底石との間の裏込めは、炭化物を含んでじつに堅くたたきしめられている。

さらに前々節でも触れたように、3号墳の羨門部が約30cmの勾配のある落差があって、羨道および玄室の床面が1段低くなっていて、これでは石室に浸透した雨水の排出をいったいどのように処理したのか、問題は多い。

次に、6号墳と7号墳の主体部は、横穴式石室とはいい難くいわゆる古墳時代終末期（7世紀初頭～中葉）に出現する、竪穴式小石室と呼ばれるものである。両者とも、地山を楕円形ないし隅丸方形のように掘り込んで、北西に主軸をあわせて石室がつくられている。石材は、1～5号墳と同様に河原石を使出する。特に7号墳では床面に敷石がしきつめており、その敷石上において須恵器の提瓶が出土した。

最後に、各古墳の築造年代を考えてみる。それはまず、石室内において検出せられた土器の出土状態を通じてみていくことがよいであろう。1号墳では、杯Aが奥壁近くで並んだ状態で、また長頸壺は玄室のほいった床面上で検出され、これによる限り追葬はなく単次葬と推定でき、したがって築造年代は6世紀末～7世紀初頭にあたる。2号墳では、全部で須恵器7点の出土をみたが、その中の盌と高杯とは東壁から少しく離れているものの、すべて周壁に沿って置かれた状態で検出されたことから、玄室の中央奥壁よりに棺を埋設されたものである。したがって、追葬はなく単次葬であったと推定され、築造年代は杯Aと長頸壺によって1号墳とほぼ同時期の6世紀末～7世紀初頭といえる。

3号墳では、棺台の手前において4対のセットになった杯Bと平瓶とがかたまった状態で検出されたことから、追葬はなく単次葬であったことは間違いなく、築造年代も7世紀前半の中葉頃に比定できよう。

4号墳の主体部掘り方から検出せられた土器は土師器、須恵器を合わせて5、6点あるが、横穴式石室がすでに攪乱されているので原位置を保った土器はなく、したがって追葬か単次葬かはにわかに判じがたいが、出土土器のうち杯Aと短頸壺から、単一の時期であることが知られる。これによって、追葬はなく単次葬で、その築造年代も1号墳・2号墳と同じく6世紀末～7世紀初頭にあたる。

5号墳の出土土器は杯A1点であるが、4号墳の杯Aと較べると全般に小さく器壁がうすくつくられていることがわかり、また横穴式石室自体も1号墳等と較べて小規模化の傾向にあり、したがって築造年代は7世紀初頭に該当するものと思われる。

6号墳と7号墳とは、主体部である竪穴式小石室の構造規模・主軸の方位から恐らくあい前後して築造せられたと推定され、築造年代とほぼ7世紀中葉に比定できよう。ただし、7号墳において出土した提瓶は型式的に6世紀代に属しているので、7号墳があるいはその時期に築造されたものではないかとも考えられるのであるが、むしろこの場合においては、提瓶を伝世品とみなして少くとも1世紀近く被葬者が大切に保有し、そうして一緒に副葬せられたと考える方が自然であろう。以上のことから、

という変遷模式図が与えられよう。

なお、円墳5基の位置をみてもわかるように、2つのグループに集中して築造されており、すなわち1号墳と2号墳とのAグループ、3号墳・4号墳・5号墳のBグループである。円墳3基が1グループを形成するものともとれるので、2号墳の周辺にトレンチを設定し精査したが、古墳はついに検出されるには至らなかった。このA・Bグループは、とりもなおさず2つの氏族を意味するものであるとも推定し得るが、ただこれだけの資料では何とも断定しがたいのである。7世紀中葉にいたってそれぞれが、一定の土地に集まって竪穴式小石室を築造したことだけは、恐らく間違いはあるまい。

1号・2号ならびに4号竪穴住居跡では、杯Cと土師器の長甕が出土していることから、奈良時代末期～平安時代初期にかけてつくられたもので、1号竪穴住居跡のごとく北壁の中央にカマド痕があり、さらに無柱の隅丸方形プランを呈する。この無柱・隅丸方形プラン構造は、検出されたすべての住居跡にあてはまる。[注6] 特に、平面プランで注意すべきは、5号・6号住居跡の南東隅の周壁が直角に内側にはいり込んでいることで、これは構築当初から意識的につくられたものである。しかしこれがどういう意味をもつかは、現在のところ判断しがたい。

次に、2棟の掘立柱建物については、その主軸がほぼ1号住居跡や2号住居跡と同じであることから、奈良末～平安初の時期に該当すると思われる。

2基の古墳からは赤褐色の呈する径9～10cm前後の土師器・小皿多数検出されたことから、大体13世紀（鎌倉時代）に比定できよう。　　（中江　彰）

〔註〕

1. 林博通ら『美園遺跡発掘調査報告』（1975、滋賀県教育委員会）108～110頁
   田中勝弘ら『弘川遺跡発掘調査報告書』（1979、滋賀県教育委員会）85～87頁
2. 2片の平瓦が何らかの掘立柱建物に使用され、しかもその建物が同トレンチにおける伴出遺物から平安時代初期に比定できるとしたならば、その瓦葺き建物とはいったいどういう性格のものであったのであろうか。とりもなおさず寺院跡か公的建物跡かということになるが、古代の上古賀の歴史的地理的位置、つまり第2節でふれた辺分勝野津ルートの要衝ということを想定してみると、後者の方にややウエイトがあるものと思われる。いづれにせよ、瓦の出土量があまりにも少ない点と、建物に伴った出土ではなかった点で、今後の研究課題としなければならぬ。
3. 田中勝弘「諸頭山古墳群の発掘調査」（1974、滋賀県教育委員会）
   田中勝弘「湖北地方において最近発見された遺跡」（1977、滋賀文化財だより4）
4. 林博通ら『石神1号墳発掘調査報告』（1974、滋賀県教育委員会）
5. 武藤誠ら『宝塚市雲雀山古墳群東尾根A支群、西尾根B支群の調査』（1975、宝塚市教育委員会）
6. 田中勝弘「高月町井口遺跡」（1978、滋賀県教育委員会）
   井口遺跡で検出せられた竪穴住居跡は、「7世紀前半から9世紀代」に該当し、それの構造の特色として、カマドを持つこと、主柱穴や支柱穴をもたないこと、周縁をもたないことなどを指摘し、伴出遺物においても土師器の長胴甕等がみられる。このような内容は、ほぼ上古賀遺跡の竪穴住居跡と共通した所が多く、これもまた今後の湖西と湖北との関係を考えていく場合の研究課題となろう。

第4章　高島郡新旭町針江遺跡

1. はじめに

昭和53年度より実施される、新旭町の湖岸線沿いのほ場整備対象地域の中に、多くの遺跡地が含まれることが昭和52年に明らかになった。その内でも、針江遺跡は県下屈指の弥生時代の集落跡として早くから著名であり、そのとりあつかいについて、新旭町および新旭町教育委員会の間で、協議がなされてきた。その結果、遺跡を破壊するおそれのある水路部分について事前に発掘調査を実施し、遺跡の実態を把握することとなった。また、この際、遺構が検出された場合については、その保存について再度協議することで合意に達した。

2. 位置と環境

針江遺跡は、高島郡新旭町針江に所在する。現在の針江の集落の北方に位置し、東西 700m、南北 500mの広がりを持っている。この範囲内には、川北、針江北、針江中、針江南の4遺跡を含むが、その境界については明確でなく、ここでは針江遺跡の名称で統一した。地形的には、湖西最大の河川である安曇川によって形成された沖積地に立地しており、標高85mないし86mの低地にあり、主として田地となっている。

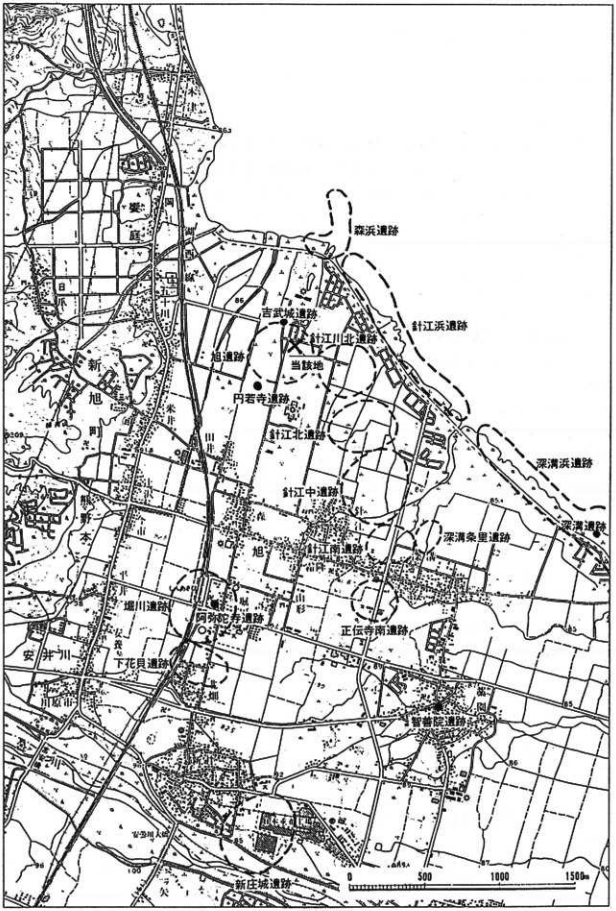
本遺跡は、かつて農業用水路掘削工事の際に、完形の弥生式土器や木器などが出土しており[1]、その後の分布調査によって、古墳から平安時代の遺物の出土が知られている[2]。本遺跡の周辺には、北方の湖岸に弥生時代後期から古墳時代の森浜遺跡[3]や針江浜遺跡、低地に時期不詳の円若寺遺跡が存在している。また、西方には中世の城郭である吉武城跡、南方には古墳時代から平安時代の集落跡である正伝寺南遺跡、東方には一部本遺跡と重復して、弥生時代から平安時代の集落跡とみなされている深溝遺跡（深溝廃寺遺跡）などが存在している。

3. 調査の経過

発掘調査は、ほ場整備区域の中央を南から北へ流れる河川の変更に伴う排水路、西側を南から北へ流れる河川の変更に伴う排水路、及び、上記の排水路を接続する西から東への排水路の工事部分が掘削されるため、これらの部分を中心にトレンチを設け、調査を進めていくことにした。トレンチは、第1次調査としてAトレンチ、第2次調査としてB・Cトレンチを設定し、Aトレンチは3ブロック（北より第1・第2・第3）、Bトレンチは4ブロック（東より第1・第2・第3・第4）、Cトレンチは4ブロック（北より第1・第2・第3・第4）を設置した。調査の実施については、低湿地であるために出水が激しく、周囲に溝を掘り、ポンプで排出しながら行なった。調査の目的については、遺構の存在を確認することは当然であるが、巾・深さに制約があるため、遺物包含層の有無、土層の確認を主眼とした。

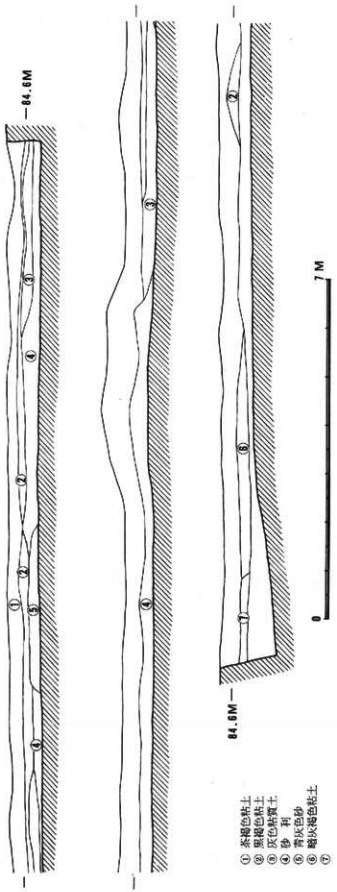
現地での調査期間は、第1次調査を7月10日より8月10日まで、第2次調査を10月23日より12月26日まで実施した。

なお調査にあたっては、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導の下に、新旭町教育委員会が行ない、町教育委員会主事水口（現姓図司）高志が現場を担当した。


森浜遺跡
吉武城遺跡
針江浜遺跡
針江川北遺跡
旭遺跡
当該地
円若寺遺跡
針江北遺跡
深清浜遺跡
針江中遺跡
深清遺跡
深清桑里遺跡
針江南遺跡
堀川遺跡
阿弥陀寺遺跡
正伝寺南遺跡
下花貝遺跡
智善院遺跡
新庄城遺跡
0
500
1000
1500m

第１図　遺跡位置図

第２図　トレンチ配置図



第3図　トレンチ断面土層図

4．調査の結果

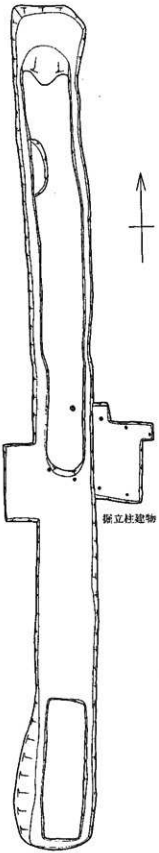
Ⅰ　土　　層

本遺跡の土層については、国道161号線高島バイパス分布調査によってボーリング探査されているが、今回の調査によってさらに資料が加えられたと言える。

第1次調査の基本土層は、第1層－茶褐色粘質土層（表土・耕土と床土の間に明確な一線を引きがたく、同一層として扱う。）、第2層－青灰色粘質土層、第3層－砂礫層となっている。第2層は、第3層の傾斜等の状況によって、堆積に差がある。第3層は20㎝以下の礫質土であり、砂利的要素が強い。

第2次調査の基本土層は、第1次調査の基本土層と異なり、第1層－茶褐色粘質土層（耕土）、第2層－暗褐色粘質土層（床土）、第3層－青灰色粘質土層、第4層－青灰色粘砂質土層、第5層－青灰色砂質土層となっている。また、Bトレンチ第4ブロック、Cトレンチ第2ブロックでは基本土層と異なり、第3層が認められず、黒褐色粘質土層、黒褐色粘砂質土層、砂層、砂利層が認められる。砂層、砂利層は色調・砂粒の大きさによって、さらに細分される。

遺物包含層は、出土した遺物から考察して青灰色粘質土層、砂礫層（砂利層）であるが、層位的に推測して青灰色砂質土層、青灰色砂層にも可能性がある。Bトレンチ第4ブロック、Cトレンチ第2ブロックに落ち込みが認められることや、土層も異なっていることから川跡等の存在が予想されるが、今後の課題としたい。



第4図　Aトレンチ平面図

Ⅱ 遺　構

掘立柱建物

Aトレンチ第3ブロック中央部で、検出された。砂礫層（砂利層）を掘り込んで建てられており、柱根7本が存在している。確認された範囲では、1間×3間の建物で梁行3.7m、桁行4.5mを測り、柱間は梁行3.7m、桁行1.5mを測る。柱根は直径30～20cmを測る。他の建築材は発見されなかった。

自然流路

Aトレンチ第2ブロック中央部近くで検出された。巾5m、深さ0.6mを測る。土層は、上層－灰褐色粘質土、中層－淡茶褐色粘質土（ゴミ含む）、下層－暗灰褐色粘質土となっている。自然流路と思われる。

（図司高志）

5. 出土遺物

Ⅰ 土　器

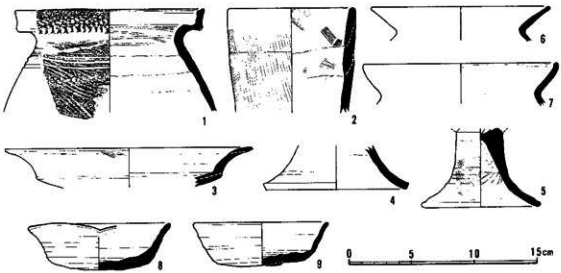
1. 甕　弥生式土器。細砂粒を多く含み、淡黒褐色を呈し、焼成は硬い。外面の施文は、おおむね5本を1単位としている。外面の手法の順序は、頸部下方・胴部に刷毛を施し、次に頸部上方・口縁部に横ナデをし、最後に口縁部・胴部に刺突列点文・櫛描き平行線文を施す。内面頸部は、ナデの上より横方向の太い刷毛を施す。口径14．7cm、口縁部残存1/4。

2. 長頸壷　弥生式土器。精良な胎土で、乳黄色を呈し、焼成はやや硬い。口縁端部内面は、指圧の後に横ナデを行う。口縁部内面は、刷毛を施した後をナデによって消している。粘土紐を板状に延ばして積み上げている。やや似た土器が、池上遺跡第6号住居跡より出土している。[1] 口径9．9cm、口縁部残存1/4。

3. 高杯　弥生式土器。微砂を多く含み、外面は赤褐色。内面は剥離のためか黒灰色を呈し、焼成は硬い。口縁部外面に箆磨きと思われる痕跡を僅かに残す。内面は剥離が激しく、詳しい調整方法は不明である。粘土紐を板状に延ばして積み上げている。口径19．2cm、口縁部残存1/16。

4. 高杯　弥生式土器。1㎜程の砂粒を若干含むのみで精良な胎土であり、淡黄褐色を呈し、焼成は硬い。全体的に器表の磨滅が激しく、残りが悪い。脚裾径11．3cm、脚部残存1/8。

5. 高杯　弥生式土器。2～3cm程の砂粒を含む全体に粗い胎土であり、黄褐色を呈し、焼成はやや軟らかい。外面は8～10本単位と思われ



第5図　針江遺跡出土土器実測図

る細い刷毛が施されている。内面上方は篦による平滑化を行い、中程にその時の篦のあたりを残す。口縁部内面に強い横ナデが残る。口縁端部は磨滅が激しい。脚裾径 8.9cm、脚部完存。

1～6までの土器は、弥生時代後期のものと思われる。

6. 甕　　土師器。0.5～1㎜程の微粒砂を含み、淡茶褐色を呈し、焼成はやや軟らかい。口縁部外面は横ナデを行い、頸部の一部に刷毛目を残す。内面は磨滅が激しく、調整方法は不明である。口縁端部がわずかに突出する特徴より、庄内式併行期の土器と思われる。

口径 14.0cm、口縁部残存 1/12。

7. 甕　　土師器。微粒の鬩り礫等を含み、明褐色を呈し、焼成は硬い。外面は横ナデを行う。口縁端部内面肥厚のやや下に刷毛目を残すが、磨滅が激しく詳細は不明である。口縁端部内面の肥厚の特徴より、布留式併行期の土器と思われる。口径15.3cm口縁部残存1/13。

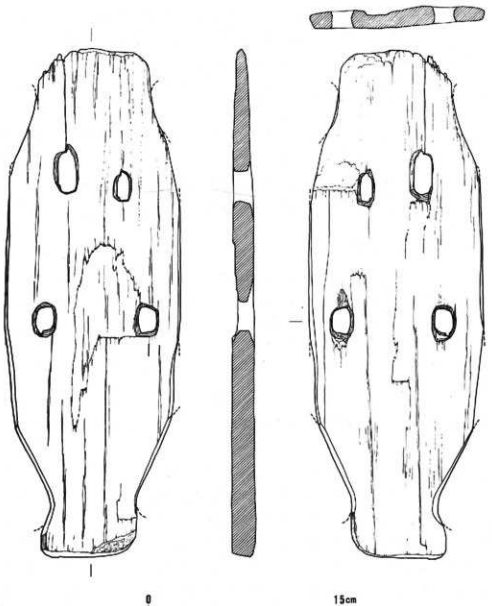
8. 杯　　須恵器。石英、長石片等の3㎜～4㎜程の砂粒が少し混じるが、総体的には精良な胎土である。外面口端部が黒灰色の他は、全体に暗灰色を呈し、焼成は硬い。右回転のロクロで作られている。底部は不調整である。底部と口縁部との境には、面取りが行われている。全体的に歪みが大きく、口縁端部の一部を折り曲げて片口を作っている。又、外面口端部が黒化しており、重ね焼きをしていたのかもしれない。なお、下寺観音堂遺跡より同様の坏が出土している[3]。口径 10.8cm～11.6cm、完存。

9. 杯　　須恵器。1㎜前後の長石片と思われる微砂粒が全体に白い斑点状に見えるが、総体的には精良な胎土であり、灰色を呈し、焼成は硬い。右回転のロクロで作られている。底部は不調整であり、粘土が付着している。底部と口縁部との境には、面取りが行われている。口縁部の中程に接合痕を残す。全体的に歪みが大きく、あるいは片口として使用されたのかもしれない。口径 10.1cm～11.0cm、口縁部残存 3/4。

8、9の土器は7世紀のものと思われる。　　（堀内宏司）

Ⅱ 木　　器

1. 田下駄足板　　前緒孔と思われるものが2カ所あけられているため、左右両方に使用したと考えられる。し

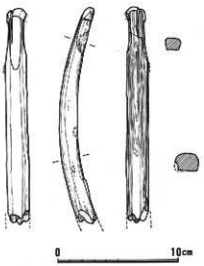


第6図　田下駄足板実測図

かし、鼻緒孔の位置には、古代下駄に特徴的な片よせがみられる。全体に磨滅して表裏がはっきりせず、両先端は欠損しているが、片方の端部近くの両側面には、切り込みが入れてある。残存長40cm、巾 13.5cm、残存厚約1.5cm。

2. 田下駄枠　　断片ではあるが少し弯曲しており、曲げて輪にした痕跡を残す。端部は、側面を切り込んで乳頭状に造り、一方の端と結びつけやすいようにしてある。残存長約14cm、最大幅2cm、最大厚1.5cm。

1、2は同地点から出土しており、同一の田下駄かと思われる。そして、足板の形状と枠からみて、輪樏型田下駄になると考えられる。



第7図　田下駄枠実測図

同様な田下駄の出土例は、滋賀県下においては、まず、野洲郡野洲町久野部遺跡の7世紀前後の時期とみられるものがあげられる[5]。足板のみで枠は出土していないが、本品よりもやや巾狭く、足板の中央に補強棒を渡している痕跡が認められる。しかし、鼻緒孔には片よせがみられない。一方、高島郡マキノ町仏性寺遺跡の出土例は[7]、同じく足板だけだが鼻緒孔に片よせがみられ、右足に用いたことがわかる。そして、裏面両端近くには枠の圧痕が認められ、表面にも紐で枠を取りつけた痕跡がみられる。時期は、弥生時代中期から奈良時代まで巾広く考えられ、明確には判らない。他に、針江遺跡からさほど遠くない所にある森浜遺跡の出土例があげられる[8]。足板の形状こそ異なるが、楕円形の枠が完全に残存している輪樘型田下駄で、足板の両端近くの側面に切り込みを入れる代りに、足板の四隅に孔を穿ち枠を取りつける方法を用いている。時期は弥生時代後期と考えられている。

3.　4.　柱根　　3/4以上欠損している。丸木の樹皮を剥がしただけで、表面は加工していない。端部は、ノミか斧などの刃物で切断した痕跡が残る。3.　残存長約53cm、最大径23cm、4.　残存長約40cm、最大径17cm。

（山口順子）

6．小　結

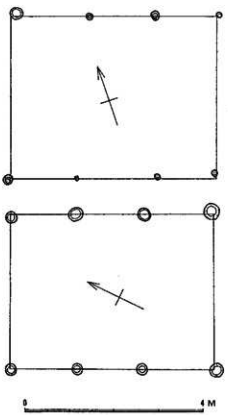
今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物1棟と自然流路であるが、ここでは、掘立柱建物について若干考察を加えておきたい。

検出された掘立柱建物の特徴は、桁行の1間に比して、梁行の1間がはなはだしく長いという点である。このようなプランを持つ掘立柱建物は、弥生時代以降幾つかの検出例が存在し、倉庫としての用途が考えられており、時期が下るにつれて建築技術が進歩し、梁行の間数が多くなることから、比較的古い建築様式の建物と言える。

県内では、本遺跡と同様の特徴を持つ掘立柱建物の検出例が、数件報告されている。その代表例である。野洲町久野部に所在する久野部遺跡（十ケ坪）[5]では、1間×3間の建物1棟（ＳＢ1）、1間×2間の建物2棟（ＳＢ2、ＳＢ3）が検出されている。本遺跡で検出された掘立柱建物と同様のプランを持つＳＢ1と比較した場合、ＳＢ1の梁行が3.4m、桁行1間が約1.5mであり、わずかな差があるにしても、ほとんど同様の規模・構造を持ったものと言えよう。

最後に掘立柱建物の時期であるが、久野部遺跡調査報告では、柱穴内の出土遺物、土色、土質より弥生時代後期の建物とされているが、本遺跡の建物については、時期を推定すべき良好な遺物の出土状況でなかったため、明確にすることができなかった。しかしながら、柱根が残存していなかったピットの埋土と同色、同質の土中より、弥生時代後期に比定されるべき土器が出土したこと、また、弥生時代の低地遺跡は、低湿な沖積地を水田とし、その中の微高地や比較的安定した土地を居住区とする。一般的形態を持っており、本遺跡で検出された掘立柱建物の立地状況も、砂礫層という安定した土地の上に建てられていることから、弥生時代低湿地性遺跡の特徴を備えた建物であるといえる。

以上のことから、本遺跡の掘立柱建物の時期は、即断しがたいが、一応弥生時代後期の建物と推測しておきた



第８図　掘立柱建物の比較
上：新旭町針江遺跡
下：野洲町久野部（十ケ坪）遺跡

い。このことは、当然今後の調査の結果によって、留意すべき問題を含んでいると言える。　（図司高志）

註

① 三上　貞二「滋賀県新旭町針江弥生遺跡について」（『史想』第９号，紫郊史学会，昭和33年）

② 林　博通『琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要』Ⅰ（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会，昭和48年）

③ 兼康　保明「古代の琴 ―森浜遺跡出土などの遺品をめぐって ― 」（『月刊文化財』169号，第一法規出版，昭和52年）

兼康　保明「よみがえる湖西の古代 ―水没した森浜遺跡を追って―」（『湖国と文化』第３号，滋賀県文化体育振興事業団，昭和53年）

兼康保明・堀内宏司『森浜遺跡（新川舟溜り航路部分）発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会，昭和54年）

④ 『池上遺跡』第２分冊・土器編（大阪文化財センター，昭和54年）

⑤ 辻広志・折井千枝子ほか「草津市下寺観音堂遺跡」（「滋賀県文化財調査年報，昭和51年度」滋賀県教育委員会　昭和53年）

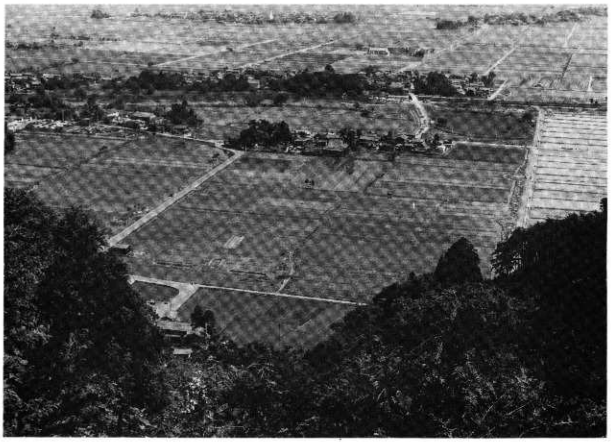
⑥ 大橋信弥・別所健二・谷口　徹『久野部遺跡発掘調査報告書 ―七ノ坪地区 ―』（滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・滋賀県文化財保護協会，昭和52年）

⑦ 兼康保明・本田修平・堀内宏司「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」（「ほ場整備事業関係遺跡調査報告書」Ⅵ－Ⅱ　滋賀県教育委員会，昭和54年）

⑧ 本田　修平「森浜遺跡出土の田下駄について」　『民俗文化』168　滋賀民俗会，昭和49年）

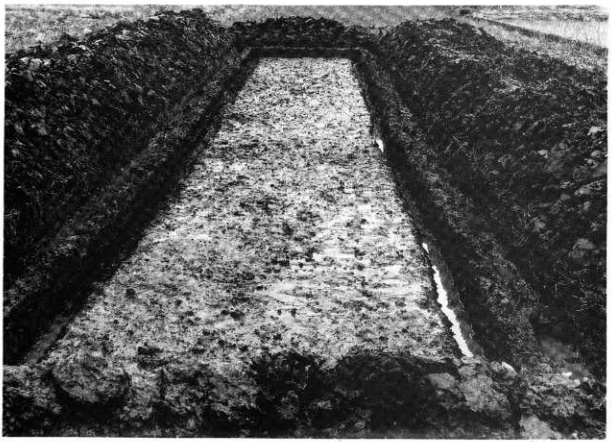
⑨ 兼康保明・折井千枝子『久野部遺跡発掘調査報告書 ―野洲郡野洲町久野部字十ケ坪所在 ―』（滋賀県教育委員会　昭和52年）

図　　版

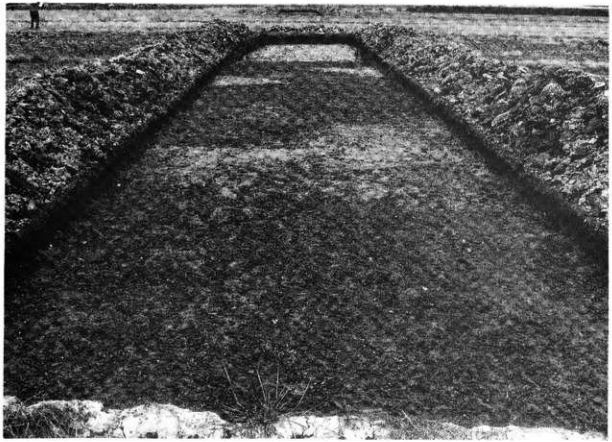


トレンチ配置状況遠景

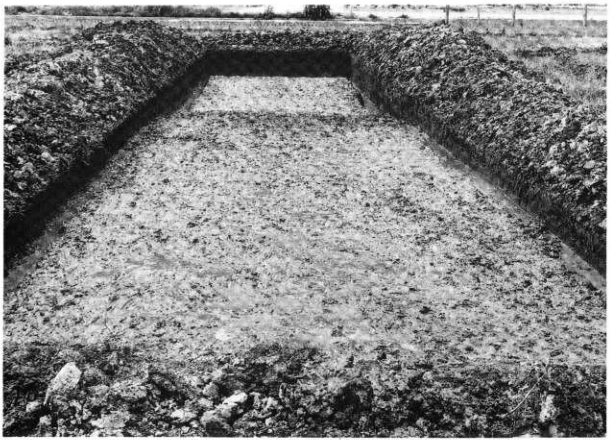
トレンチ配置状況近景



Cトレンチ

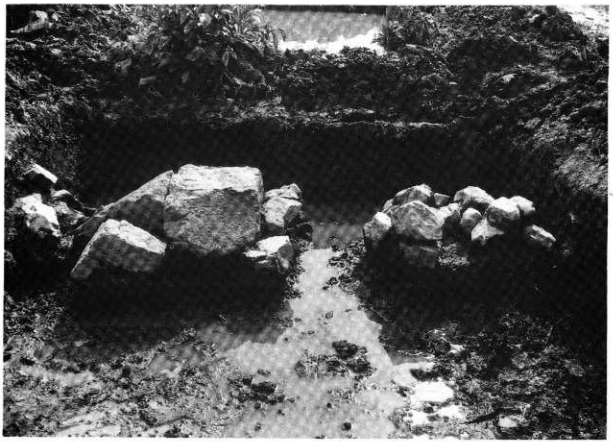


Aトレンチ

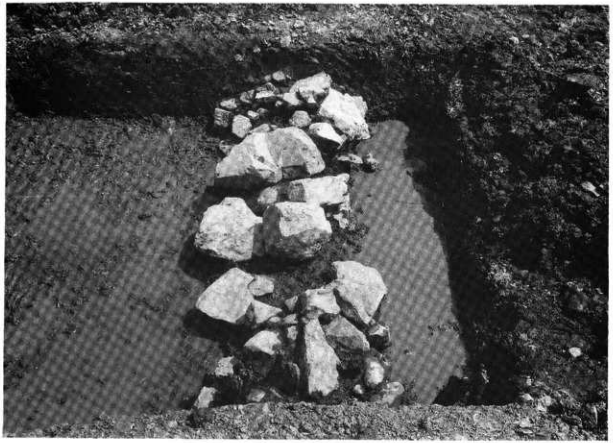


Bトレンチ

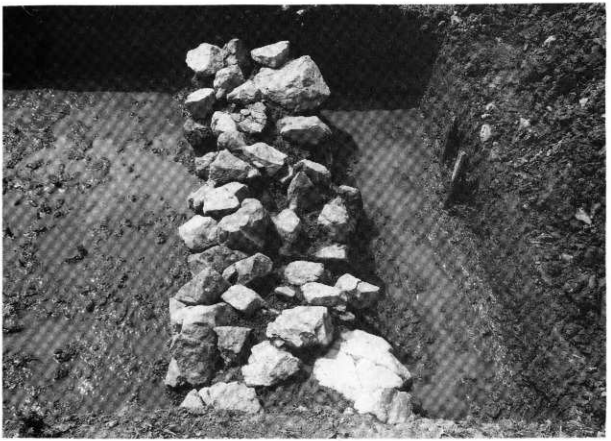
Bトレンチ断面土層



Eトレンチ石組



Gトレンチ石組

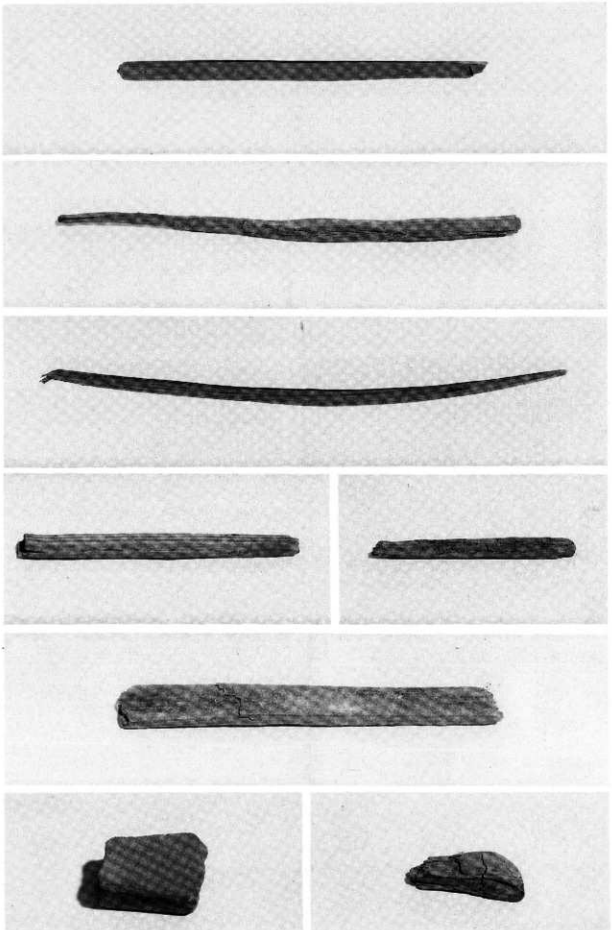


Hトレンチ石組

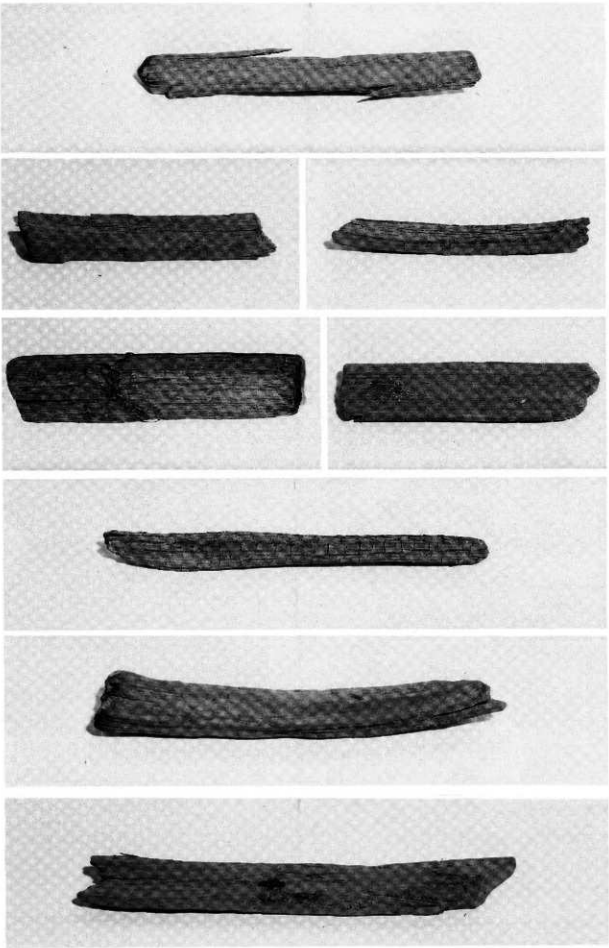
Iトレンチ石組

Jトレンチ石組

陶器甕出土状況

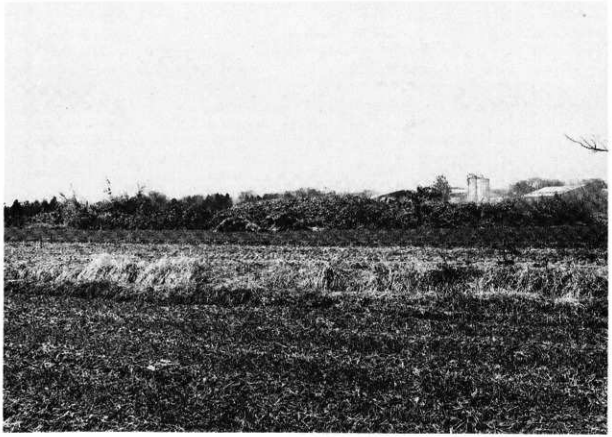


木器・砥石

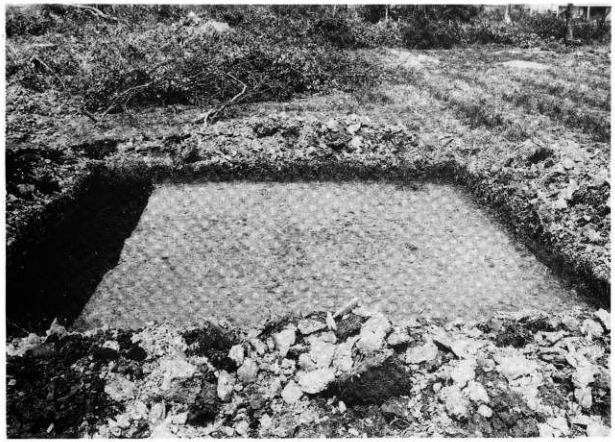


木鍬

遺跡遠景（西より）



遺跡遠景（南より）

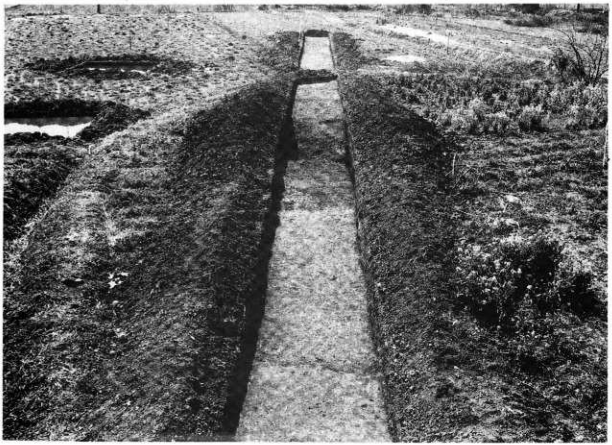


第14トレンチ（南より）

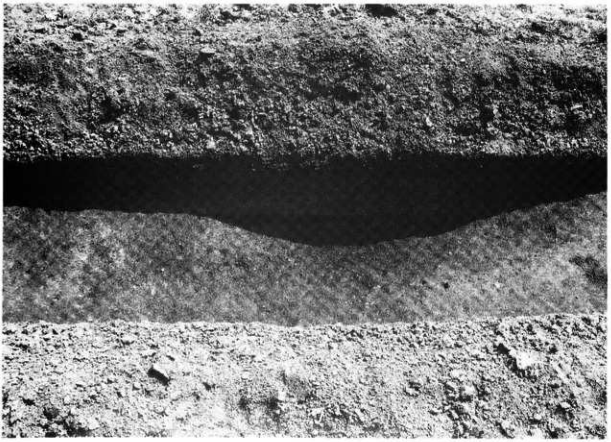
第19トレンチ（北西より）

第18トレンチ（西より）

第3トレンチ（東より）

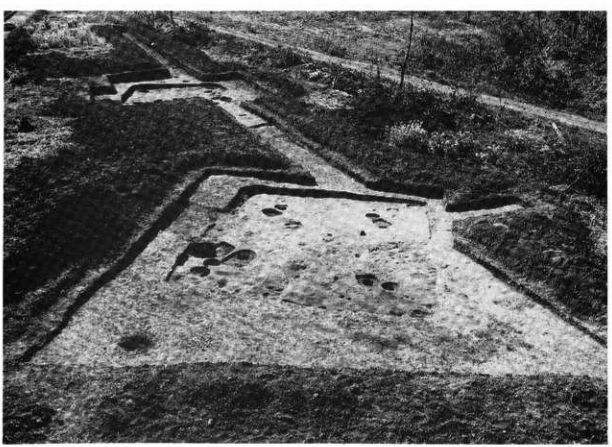


第1・2トレンチ（東より）

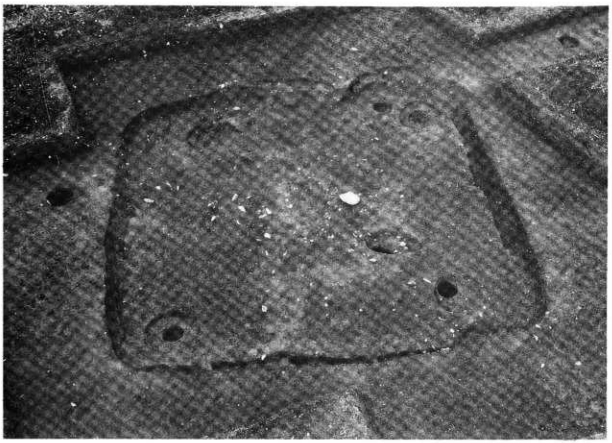


溝跡

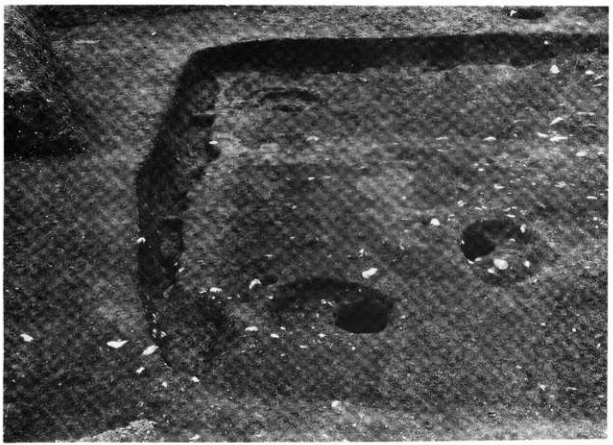
調査風景



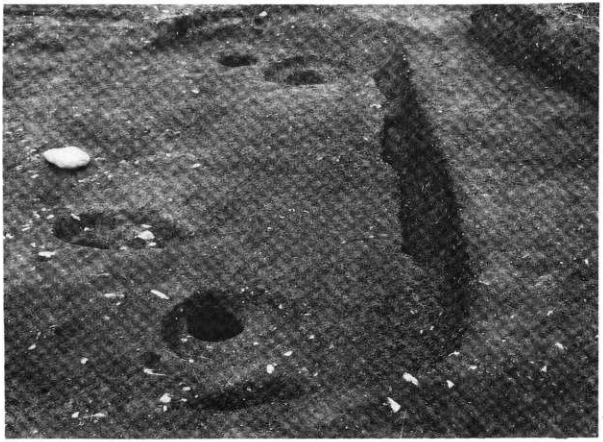
第1住居跡（向う側）・第2住居跡（手前）（東より）



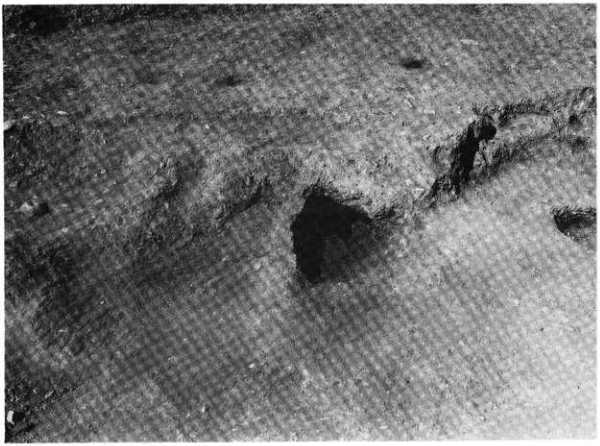
第１住居跡全景（南より）



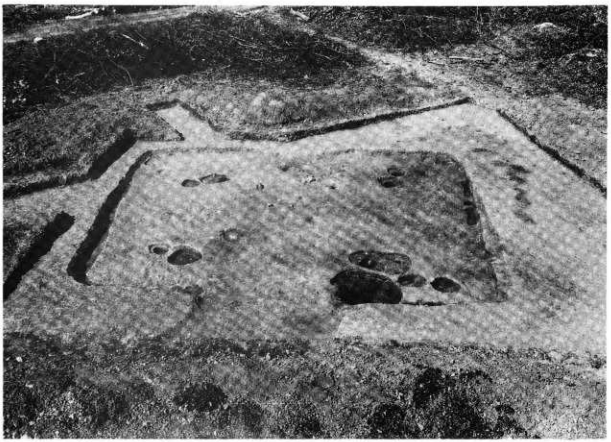
第１住居跡部分（南半部）



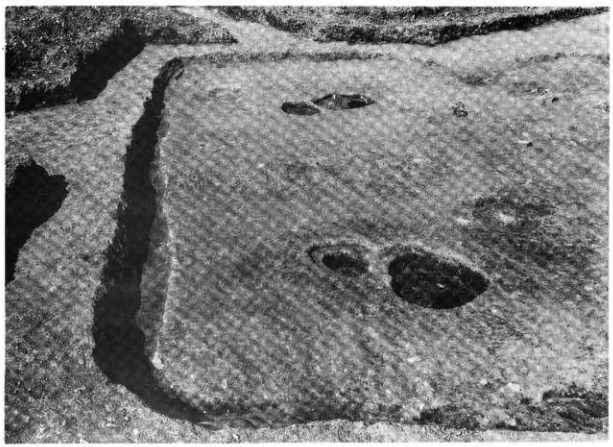
第1住居跡部分（東半部）



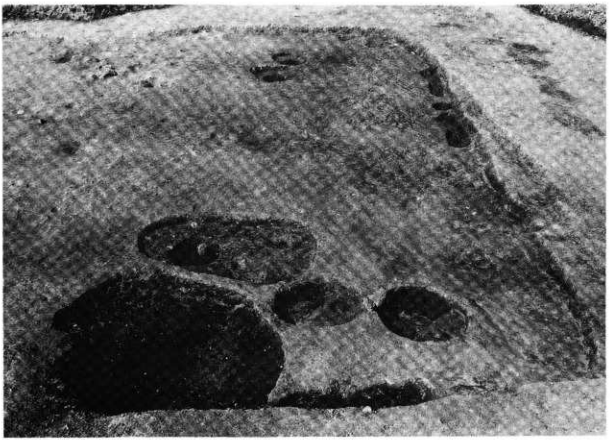
第1住居跡カマド



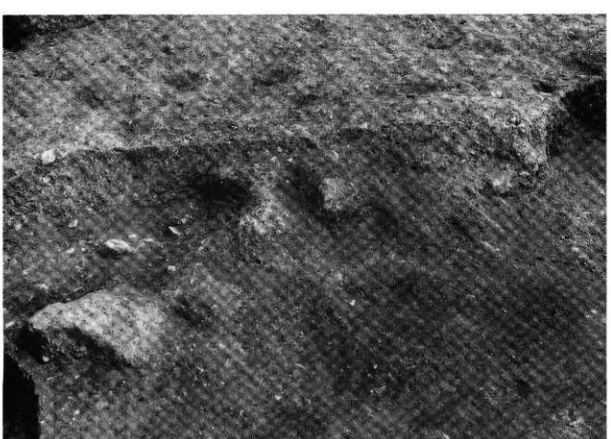
第２住居跡全景（南より）



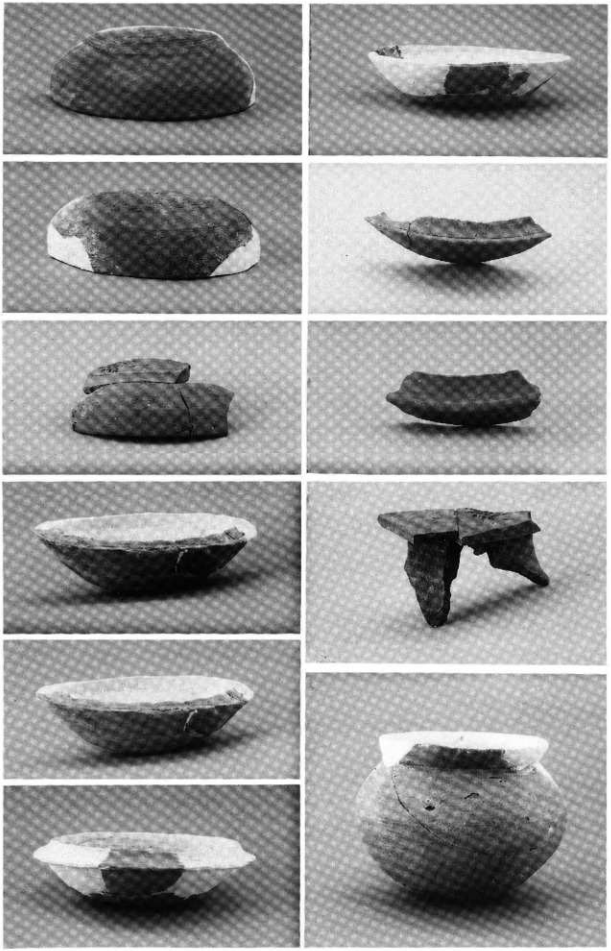
第２住居跡部分（西半部）



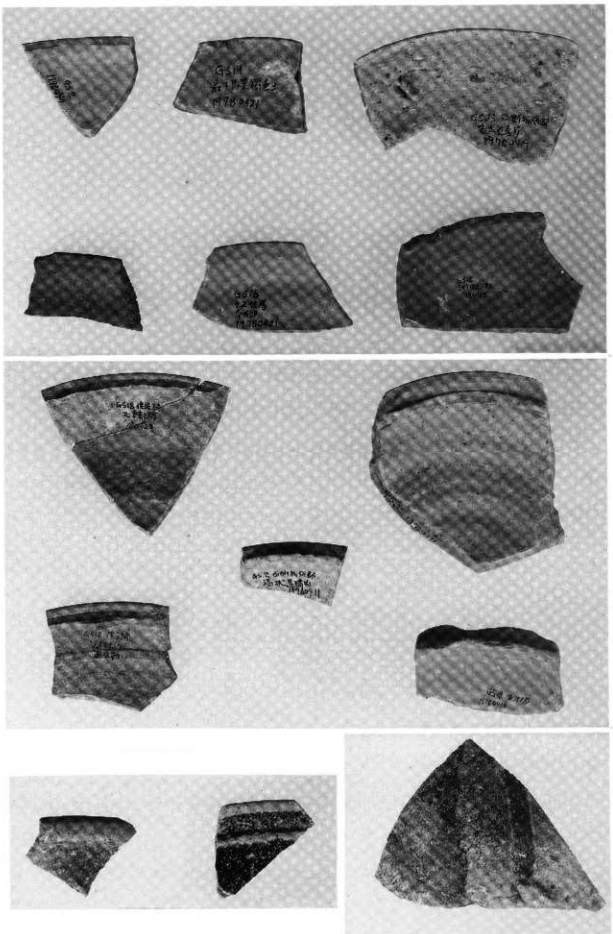
第２住居跡部分（東半部）



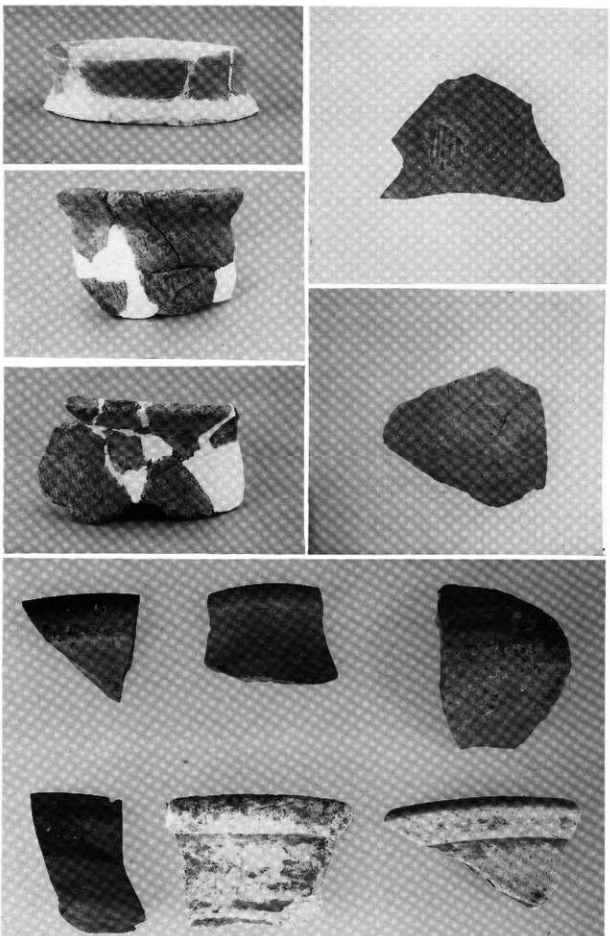
第２住居跡カマド



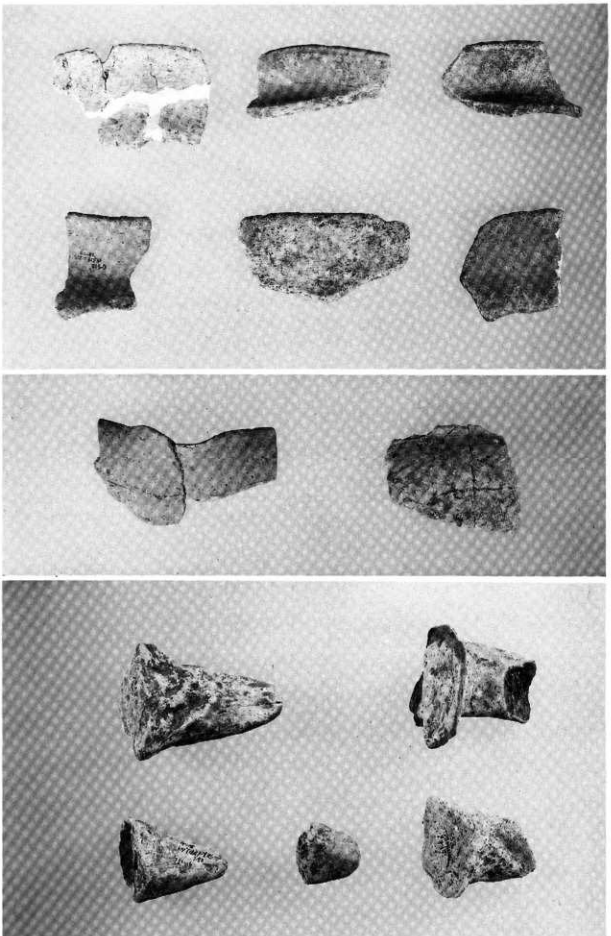
出土遺物（須恵器）



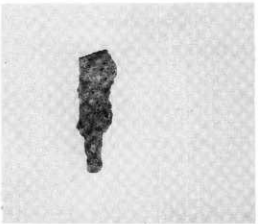
出土遺物（須恵器）

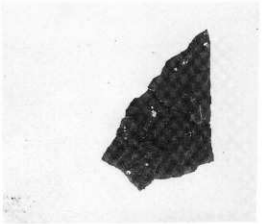


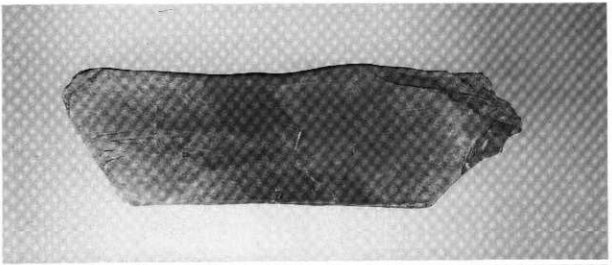
出土遺物（須恵器・土師器）

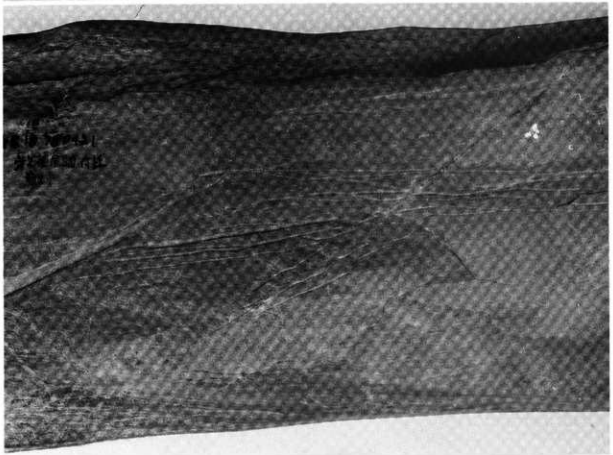


出土遺物（土師器）



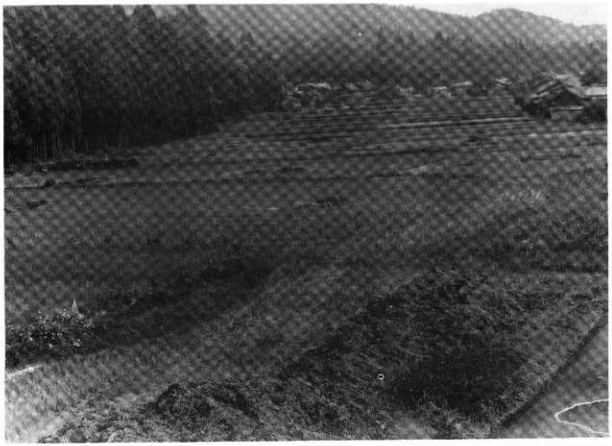






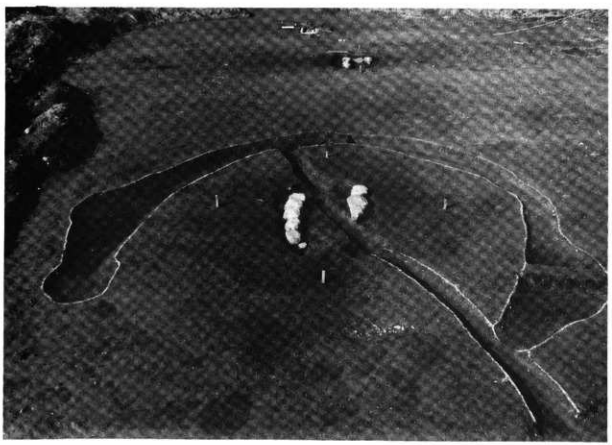
出土遺物（鉄器・石器）

A・B両地区調査地（西から）

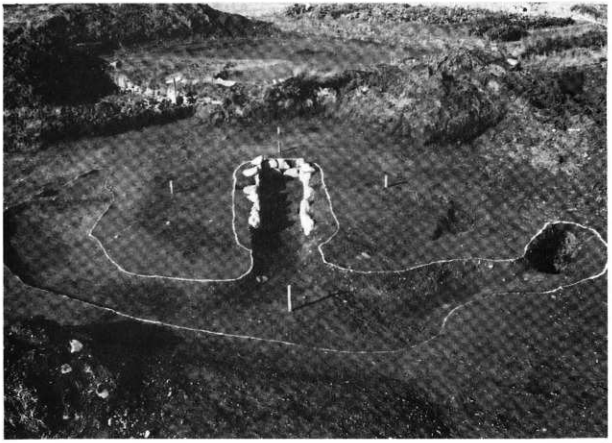


C地区調査地（西から）

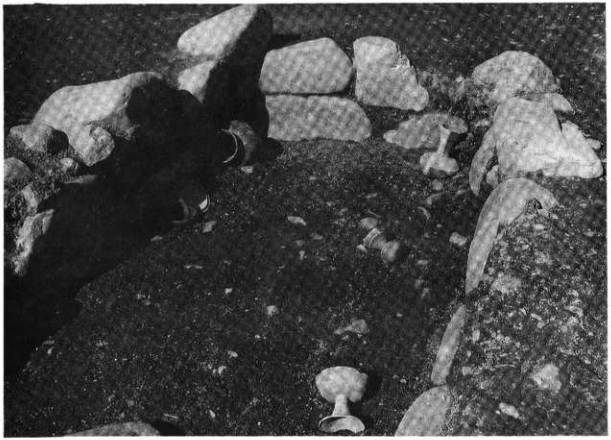
下井１号墳（南から）



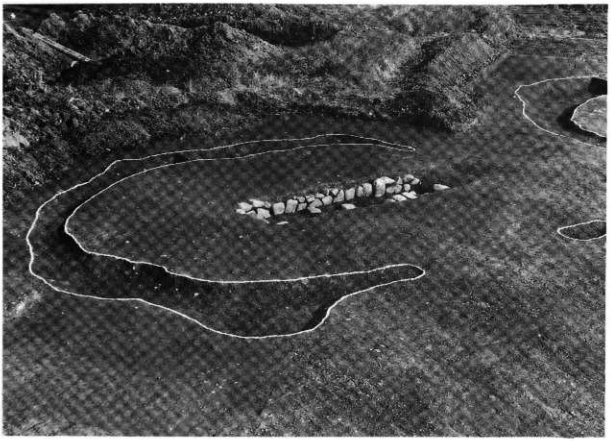
下井５号墳（南から）



下井２号墳（南から）

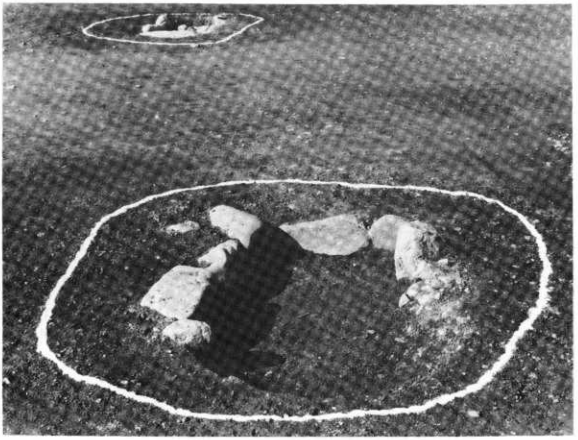


下井２号墳副葬品出土状況（南から）

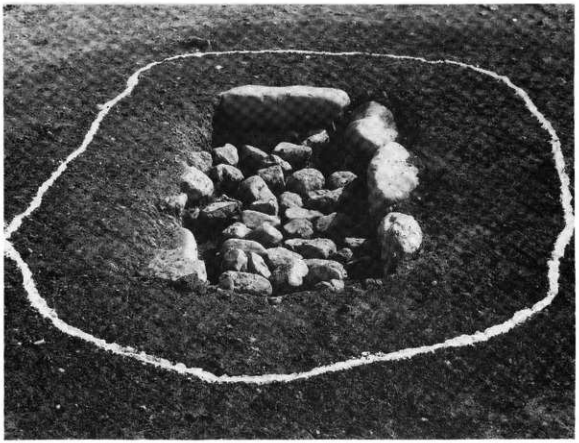


下井３号墳（北西から）

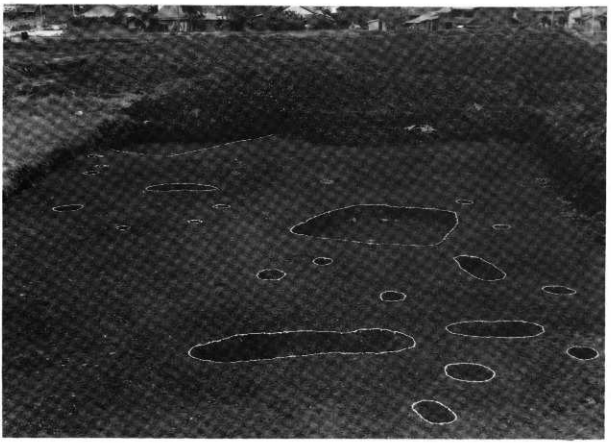
下井３号墳副葬品出土状況（北から）



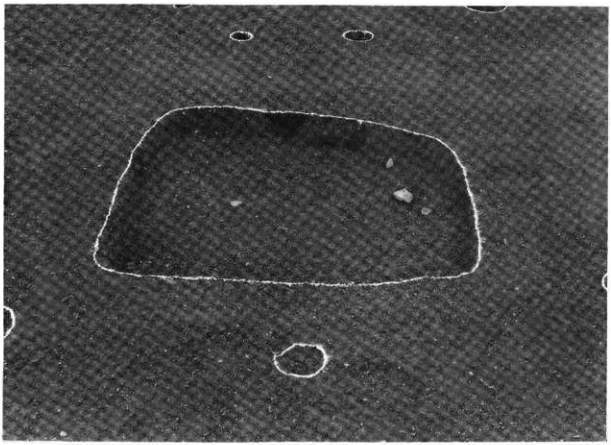
下井6号墳（東から）



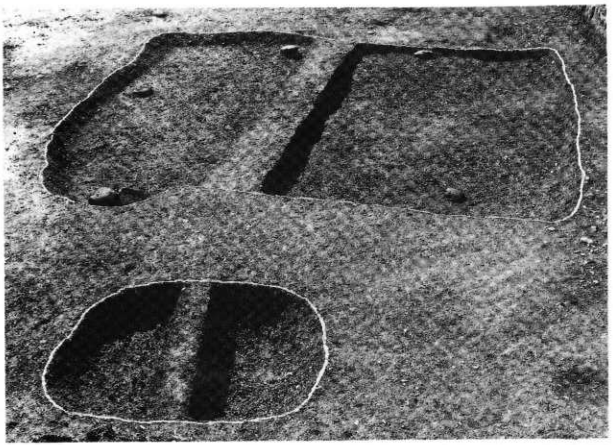
下井7号墳（西から）



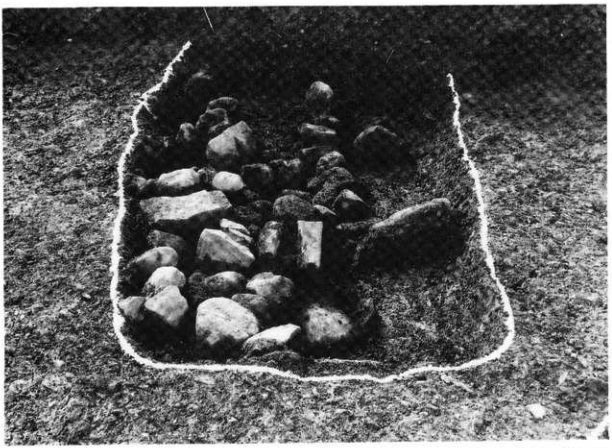
B17トレンチ（西から）



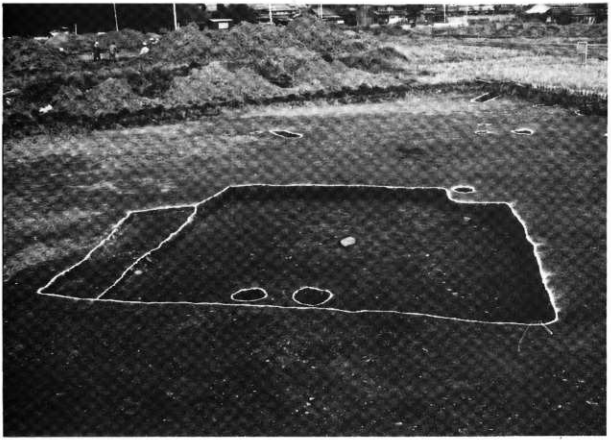
1号竪穴住居跡（南から）



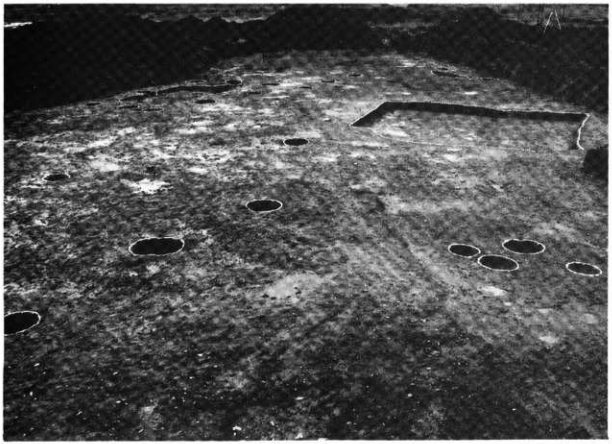
土壙4（手前）と4号竪穴住居跡



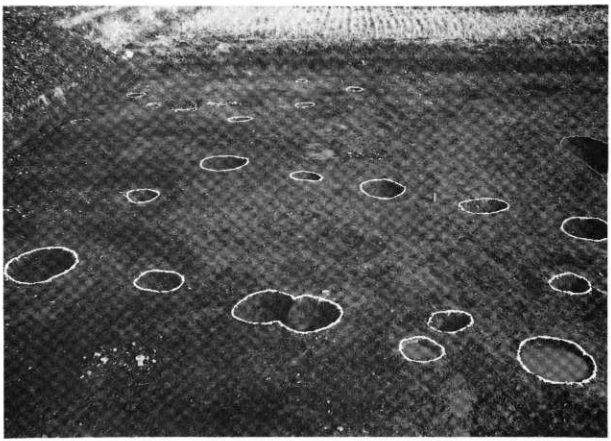
古墓3（北から）



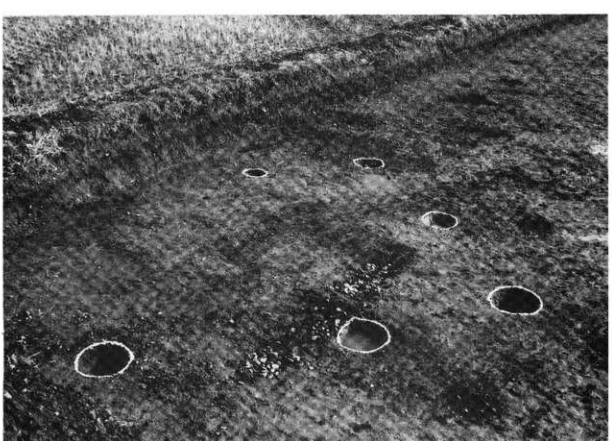
6号竪穴住居跡（西から）



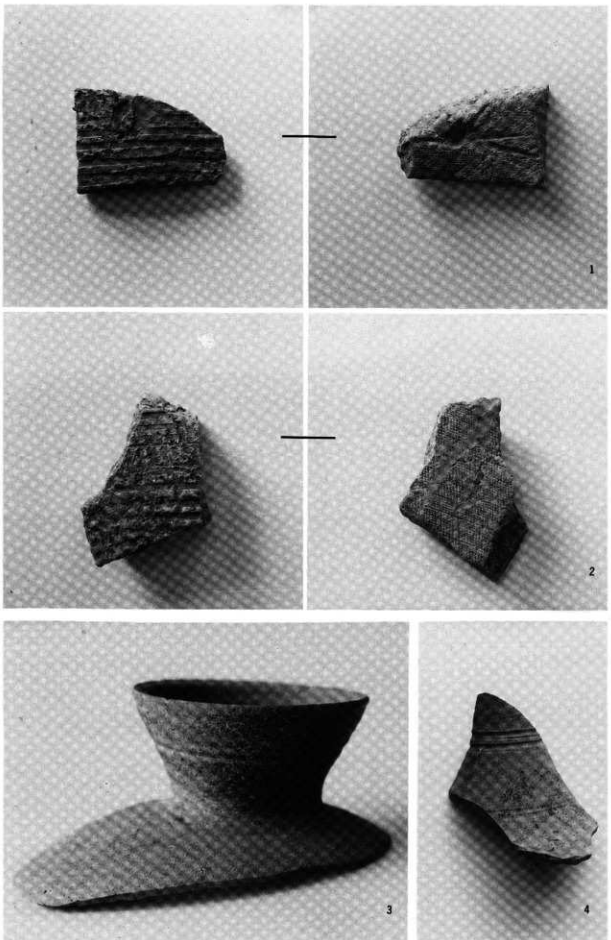
B2・6トレンチ（北から）



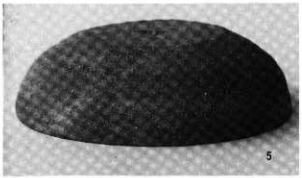
掘立柱建物１（南から）

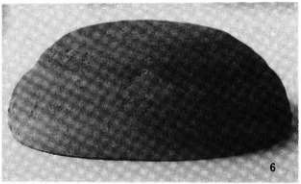


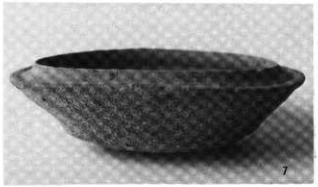
掘立柱建物２（西から）



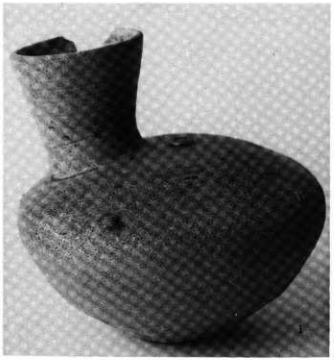
A７・８トレンチ（1、2）、５号住居跡（3）、下井４号墳（4）

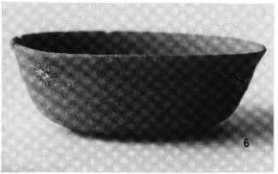


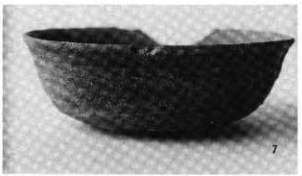


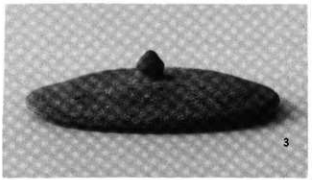


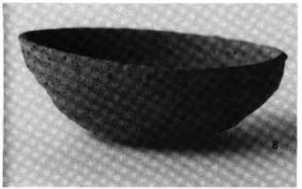
下井2号墳（1～7）

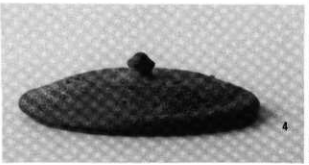


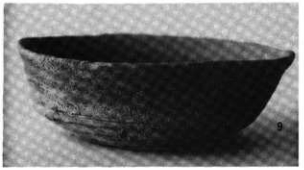




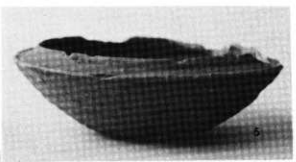


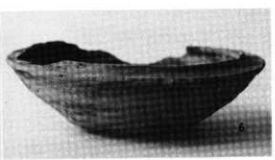


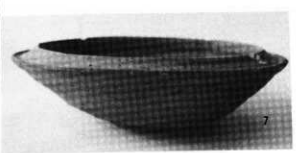


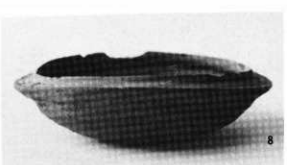


下井3号墳（1～9）

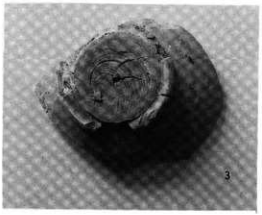


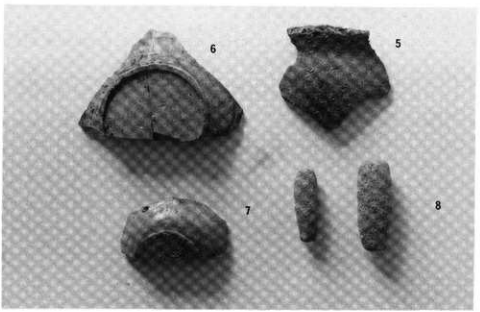




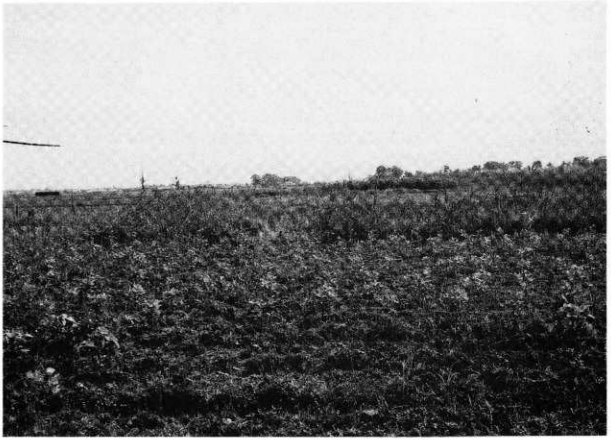


下井1号墳（1、3～6）、下井4号墳（2、7、8）

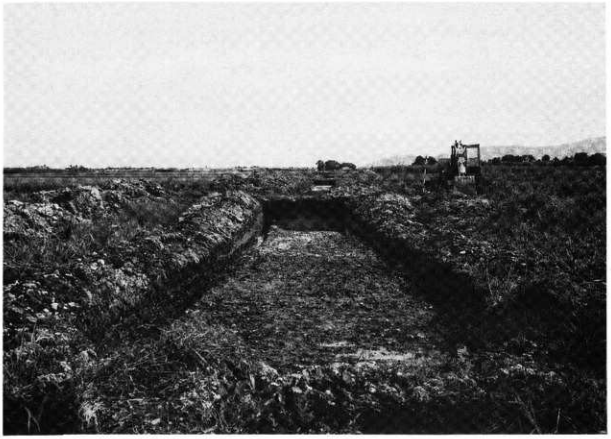




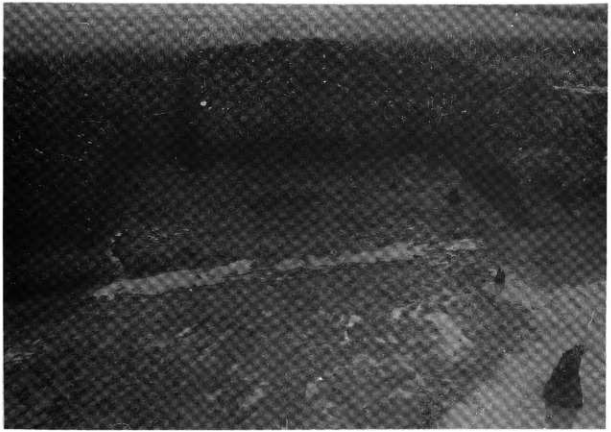
下井1号墳（1）、1号住居跡（2、4）、A7・8トレンチ（3）、A44試掘坑（6～8）



発掘前風景（北より）



発掘後風景（北より）



掘立柱建物（北西より）

掘立柱建物（南東より）

昭和54年３月
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ－１

編　集　滋賀県教育委員会
発　行　滋賀県教育委員会
　　財団法人　滋賀県文化財保護協会
印　刷　株式会社　中村太古舎